

国土交通省平成 15 年度地域連携支援ソフト事業

北東北学構築基礎調査事業報告書

# 北東北学の構築を目指して



平成 16 年 3 月

北東北学検討委員会

## 目 次

第1編 「北東北」における地域学	1
第1章 はじめに	1
1 目的	1
2 運営の概要	1
3 本報告書の構成	3
第2章 「北東北」に共通する基層文化	
縄文時代以来の伝統を引き継ぐ「北東北」	4
第3章 過去から見た「北東北」	6
1 絵図に描かれた「北東北」	6
2 『菅江真澄遊覧記』に見る江戸時代の「北東北」	14
(1) 「北東北」における基層文化の共通性	14
(2) 「北東北」の伝承	15
(3) 「北東北」のアイヌ語地名・蝦夷人	16
(4) 「北東北」の交流	16
3 近現代における「北東北」	18
(1) 自画像としての「北東北」	18
(2) 「東北党」の構想	18
(3) 「北東北」の固有性	19
(4) 閉塞化に抗する「北東北」	21
(5) 膨張化する「北東北」	22
(6) 「北東北」の可能性—過去から現在へ、そして未来へ—	22
第4章 国際化の中の「北東北」	24
1 国際化・グローバル化の進展と地域アイデンティティ	24
2 「北東北」とアイデンティティ	25
3 アイデンティティ形成における民・学・官の役割	26
第5章 地域学としての北東北学	28
1 地域学の考え方	28
2 北東北学の特徴	29
3 北東北学の実践的・学際的な性格	31
第6章 北東北学の目指すべき方向性	32
1 それぞれの地域づくりにつながる「北東北学」	32
2 住民の主体的な参加と「民・学・官」の連携による「北東北学」	33
3 「北東北」を再評価する「北東北学」	34
4 国際化・グローバル化の中の「北東北学」	34
5 地域の一体感を醸成する「北東北学」	35

第2編 「北東北」の地域資源	36
1 地域資源体系	36
2 「北東北」における地域資源の例	36
(1) 自然資源	37
ア 地理	37
イ 気候	39
ウ 殖生	40
エ 自然公園	40
オ 名勝	41
カ 山岳	41
キ 温泉地と湖沼群	42
ク 平野・盆地	43
ケ 河川	43
コ 天然記念物	43
(2) 人文資源	46
ア 歴史的な街並み	46
イ 重要文化財	46
ウ 重要民俗文化財	55
エ 特別史跡・史跡	58
オ まつり・民俗芸能	60
カ 民謡	63
キ 食文化	65
ク 民間信仰	67
ケ 民話	68
コ 県民気質等	69
サ 地域の先人	69
シ 作家の見た「北東北」	70
ス 方言	70
セ 歴史	71
(3) 社会資源	80
ア 農林水産業	80
イ 商工業	81
ウ 伝統産業	83
エ 交通基盤	84
オ 物流	87
カ 高等教育機関	88

キ 地域連携（広域連携）	90
第3編 「北東北」に関するアンケート	91
1 アンケート集計結果	91
2 アンケート内容	98
資料 『菅江真澄遊覧記』の「北東北」関係記事	100
1 「北東北」における基層文化の共通性	100
2 「北東北」の伝承	108
3 「北東北」のアイヌ語地名・蝦夷人	113
4 「北東北」の交流	117
参考文献など	121

# 第1編 「北東北」における地域学

## 第1章 はじめに

### 1 目的

青森県、岩手県及び秋田県の北東北3県は、互いに隣接し、様々な交流・連携の歴史がある。さらに近年、北東北3県は、各県が持つ資源を有効活用し、魅力を高め、地域の総合力を高めていくため、観光、環境等多様な分野で一層の連携を進めてきたところである。

また、今日の地方分権時代にあつては、地域の発想や個性、そこにしかない文化や資源を大切にし、それらを育てながら地域らしさを追求していくことが必要であり、そこから首都圏中心の既成の価値観や尺度にとらわれることのない新しい価値観や基準の確立を図っていくことが求められている。

本報告書は、このような状況を踏まえ、国土交通省の平成15年度地域連携支援ソフト事業「北東北学構築基礎調査事業」として、北東北3県における地域連携を進めていくために必要不可欠な住民レベルでの一体感の醸成、地域づくりの新たな基準（ローカル・スタンダード）の確立等のため、北東北の歴史、風土、文化、生活知等をまとめた総合的な思考の体系である“地域学”としての「北東北学」構築に向けた調査・研究を行った結果をまとめたものである。

「北東北」を既成の価値観や尺度にとらわれることなく、新しい視点、「北東北から見た北東北」という視点でとらえ、「独自性をもった北東北学」、地域の新たな魅力や将来の可能性を見出す「北東北学」を構築・発展させていくための方向性等を探る内容となっている。

今後、「北東北学」への住民を始めとした多様な主体の参加による取組みを通じて、対内的にはアイデンティティの共有による一体感の醸成や地域活性化の実現、対外的には北東北地域の特性・魅力を広くアピールしていくことが可能となることを期待している。

### 2 運営の概要

「北東北学構築基礎調査事業」は、「北東北学検討委員会」を組織し、各種資料の分析及び調査研究を行ない、その結果を本報告書として取りまとめている。

なお、委員の構成、委員会・ワーキング会議の開催状況等は、次のとおりである。

## (1) 委員構成

委員	長	長谷川 成一 (弘前大学人文学部・大学院地域社会研究科教授)	
委員		有谷 昭男 (あおもりNPOサポートセンター理事長)	◎
委員		藤川 直迪 (三内丸山縄文発信の会理事長)	○
委員		堤 基史 (青森県企画振興部参事)	
委員		庄司 誠 (青森県教育庁文化財保護課長)	
委員		大矢 邦宣 (平泉郷土館長)	
委員		菅野 文夫 (岩手大学教育学部教授)	
委員		熊谷 常正 (盛岡大学文学部教授)	○
委員		廣田 淳 (岩手県総合政策室参事兼政策推進監)	○
委員		小田野 哲憲 (岩手県教育委員会生涯学習文化課文化財保護監)	
委員		賢木 新悦 (北東北広域連携推進協議会長)	
委員		富樫 泰時 (前秋田県立博物館長)	
委員		半田 和彦 (秋田県立図書館長)	○
委員		川上 正 (秋田県企画振興部総合政策課長)	○
委員		船木 義勝 (秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室長)	
アドバイザー		河西 英通 (上越教育大学学校教育学部助教授)	

事務局 株式会社サンブラッソ a t v (青森市第二問屋町四丁目)  
阿部 一能  
船橋 弘毅

◎ : ワーキング会議座長 ○ : ワーキング会議メンバー

## (2) 委員会等開催状況

### ア 委員会

- 第1回 平成15年7月31日 14～16時 ホテル青森「はまなすの間」
- 第2回 平成15年10月2日 14～16時 ホテルメトロポリタン盛岡  
「はやちね」
- 第3回 平成16年1月13日 14～16時 ホテルメトロポリタン秋田  
「きりの間」
- 第4回 平成16年3月23日 14～16時 ホテル青森「はまなすの間」

### イ ワーキング会議

- 第1回 平成15年12月19日 14時～16時 岩手県庁会議室
- 第2回 平成16年2月13日 13時半～16時半 秋田県庁会議室

ウ 北東北学フォーラム

平成 15 年 11 月 1 日 13 時～16 時 青森市文化会館大会議室

### 3 本報告書の構成

前述のとおり第 1 編第 1 章では本報告書の目的等を記載したが、第 2 章では現代の北東北に共通する基層文化について、第 3 章では歴史資料から見た北東北について、第 4 章では国際化・グローバル化の中での北東北について、第 5 章では北東北における地域学としての北東北学の特徴などについて記載し、第 6 章ではこれらの分析を踏まえ、北東北学の目指すべき方向性について記載している。

次に第 2 編では、北東北学の取組みを行っていく上で必要不可欠な北東北の地域資源の調査結果を整理しており、第 3 編では、北東北学に対する住民の意識調査等のために実施したアンケート結果（注）を記載している。

（注）：平成 15 年 11 月 1 日開催の「北東北学フォーラム」会場において実施している。

## 第2章 「北東北」に共通する基層文化

### 縄文時代以来の伝統を引き継ぐ「北東北」

日本で最も古い学術雑誌に「人類学雑誌」がある。1927年（昭和2）、この雑誌に長谷部言人氏<sup>ことんど</sup>が「円筒土器文化」という論文を発表している。この論文以降「円筒土器」の名称が一般に使われるようになった記念すべき論文である。

この論文では土器の特徴を器形が筒形であること、分布が東北北部から北海道南部であることなどをあげ、それに伴う石器・土偶・人骨などを紹介し、最後に円筒土器文化の中心地が縄文時代終末に栄えた亀ヶ岡土器の本場と分布が一致することなどを論じた。そして大正・昭和の奥羽人の成年男子及び学童の身長が高いこと、頭の形が短頭であることなどが他の地域と異なることに着目し、このような特色は円筒土器の伝統があったからだろうという意味のことを書いている。

すなわち、縄文時代（円筒土器文化）以来の特徴が大正、昭和の身体に残っていたのではないかというのである。この仮説は、考古学研究が進展していなかったこともあって問題にされることがないまま見過ごされてきた。

しかし、その後考古学研究が進んだことによって、縄文時代前期の円筒土器文化によって形成された伝統文化が奈良・平安時代まで継続していたことが明らかになってきている。

日本の縄文文化研究を体系化した山内清男氏<sup>やまのうちの お</sup>は、1925年（大正14）に青森県オセドウ貝塚（市浦村）・是川中居遺跡（八戸市）などの発掘調査を行い、土器の胎土<sup>たいど</sup>に繊維を含む土器が下層から、繊維を含まない土器が上層から出土することを確認した。この事実に基づいて繊維を含む円筒土器が古く、含まない土器が新しいとし、前者を円筒下層式、後者を円筒上層式と名付けた。

器の大小にかかわらず器形が徹底して円筒をなし、文様やその構成に特徴ある円筒土器は、見極めが容易であることからその分布について早くから論じられている。その分布は基本的に北海道南西部から東北地方北部である。太平洋沿岸の北限は、北海道の噴火湾、南限は宮古市周辺である。日本海沿岸の北限は礼文島、南限は能登半島で、日本海沿岸地域の分布範囲が広いのが目につく。しかし基本的には北海道の渡島半島から秋田市・田沢湖・盛岡市・宮古市を結んだ範囲が円筒土器の分布圏である。

この円筒土器文化が栄えていた時期に、この地域の伝統文化が形成され、この分布圏の伝統は、その後、姿や形を変えても生き続けていると考えられる。

円筒土器文化の特徴は、その土器にあるのは言うまでもない。そのほかの遺物では石器に半円状扁平打製石器、それに土偶、なんとといっても岩偶<sup>がんぐう</sup>を持っていることがもっとも大きな特徴である。

遺構では住居の平面形は円形であることも特徴ですが堅穴住居<sup>たてあな</sup>の床面に特殊な穴が伴うことなどがある。家の姿が特徴的であれば集落そのものも特徴的なものであったと推測さ

れる。

およそ1500年間にわたって継続した円筒土器文化は縄文時代中期後半で終わりをとげるが、この期間にできあがった文化の伝統（風俗習慣等）は、その後の考古学資料からもいろいろな分野で確認できる。それを次に簡単にあげてみる。

中期後半に姿を消した土器（円筒土器）に代わって、後期前半に十腰内土器様式の土器が円筒土器文化と同様な分布を示す土器として登場する。それより前、中期後半に作られ始める青竜刀形石器がある。この石器は用途がはっきりしないが祭祀用の道具ではないかと考えられているものである。

祭祀用の道具だけでなく、この地域の縄文時代後期から晩期にかけての死者を埋葬する時、死者の頭を西あるいは西北向きに埋葬する習慣があったことが墓域の調査から明らかにされている。そして長谷部言人があげた晩期の亀ヶ岡土器様式の土器がある。このほか詳細に見ると他にもいくつかの事実をあげることができる。

弥生時代になると砂沢式土器、田舎館式土器、そして古墳時代に入ると北海道で栄えた後北 C2・D 式土器が北東北に分布する。この弥生時代から古墳時代に北東北から北海道に住んだ人々は、縄文時代的な狩猟・漁労・採集を主要にした生活をしていたと考えられている。その内容は西日本の弥生文化と異なり、縄文時代の伝統を強く持っていることから続縄文文化、続縄文時代と呼んでいる。

本州の続縄文文化には稲作農耕があるが、北海道にはない。しかし米の生産は上がりず狩猟・採集に依存する生活であったと考えられる。縄文的な生活であっても恵まれた自然環境にあって生活ぶりは豊かであったと推測される。

新しい文化の代表である鉄を知り鉄器を使用しているし、後半には西日本からとり込まれた須恵器なども使用している。

この縄文文化と弥生文化の境界が縄文時代以来の続いてきた円筒土器文化圏の南の境界秋田市・田沢湖・盛岡市・宮古市を結んだラインと考えられる。

古代になると、このラインは更に明瞭となる。

律令国家体制の東北地方の象徴として城柵官衙遺跡は存在しない。

以上見てきたように、秋田市～宮古市を結んだラインは北の文化と南の文化の接触線であったことがお分かりいただけたと思う。このラインこそ縄文時代前期にできた円筒土器文化圏の南限のラインなのである。

北東北に住んだ人々は、その時々南北の文化を取り入れて消化し、自分たちの伝統を生かして長い間住み続けてきたものと考えられる。現在この歴史の事実を再認識して将来を考えることは大きな意味のあることと思う。

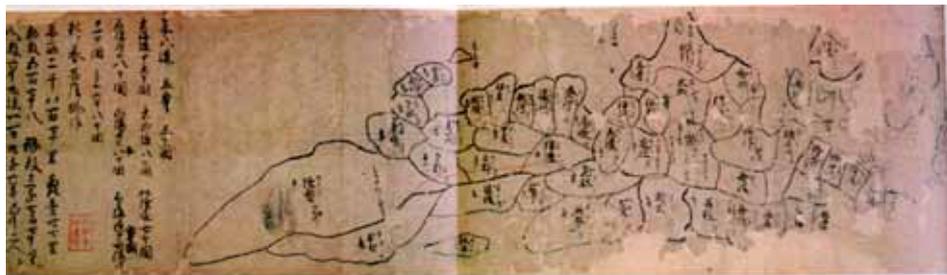
### 第3章 過去から見た「北東北」

#### 1 絵図に描かれた「北東北」

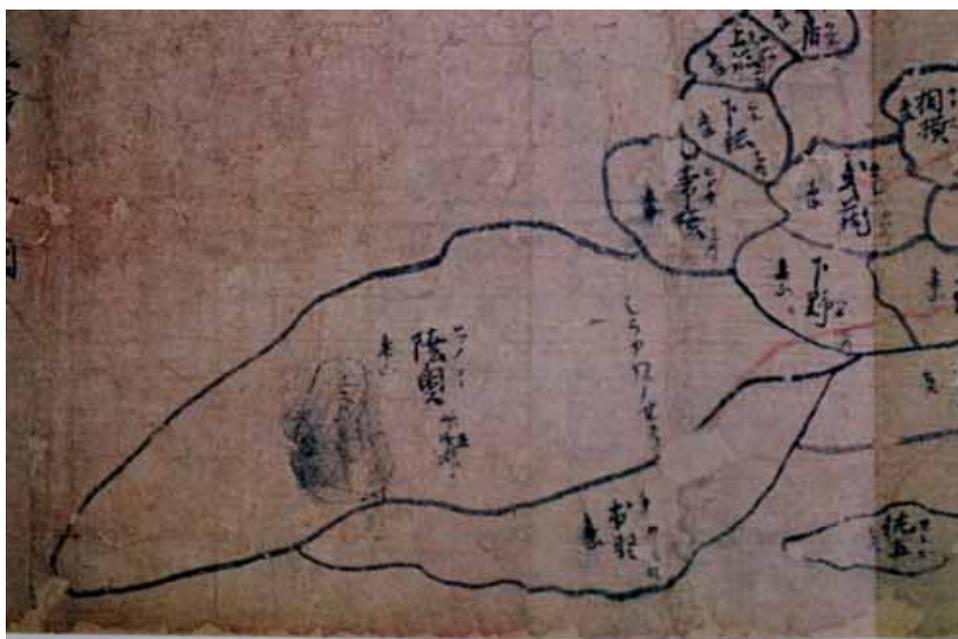
本節では、前近代の各絵図・屏風絵などに描かれた北東北を具体的に眺めることによって、中世国家、近世国家に同地方がどのように位置づけられていたのか、それを把握することにしたい。各図には、①～⑧の番号を付して全体図、北東北ないし東北地方の各部分図を適宜掲げて、理解を深めることにした。掲載した図版は中村拓『日本古地図大成』（講談社 1978年）を転載し、各図の解説を書くにあたって同書を主に参考にした。

以下、各図の説明の中で、「絵図に描かれた北東北」とその特徴について順次解説してゆくことにする。

①日本国 <sup>かげん</sup> 嘉元3年（1305） 手書 34.5×121.5 cm 京都仁和寺蔵



①-1 全体図



①-2 北東北部分図

行基図ともいう。南を上にしたやや粗略な図で、九州・四国の大部分と中国地方の一部は欠損しているが、鎌倉時代末期の嘉元3年(1305)に写したという奥書があり、現存する日本図のなかでは書写年代のもっとも古い図と考えられ、重要文化財である。

奥書には行基菩薩御作という文字があり、古い日本図を行基の作とする伝承の記録としても、もっとも早いもののひとつである。また図中には、国々の名前と郡の数が注記されているものの、地名の記入は少ない。

東北地方は、桃の実のような形で大きく突出しているのが特色である。それがまっすぐに東へ向かっているのは、古代・中世を通じて日本は東西にのびた国であるとの考えがあり、陸奥の先端の外浜そとがはまが国土の東のはしに当たると信じられていたことを反映している。

さらに東北地方は、陸奥・出羽の記載が見られ、国内の三関の一つ白河関(図中に「しらかわノせき」と見えるが、これは後年の加筆であろうという)が記されている。簡略ながらも東北地方が初めて描かれた日本図といえよう。

②南瞻部洲大日本国正統図 室町時代後期 手書 軸装 168.3×85.4 cm 唐招提寺蔵



②-1 全体図



②-2 北東北部分図

表題の南瞻部洲とは、仏説の人間居住世界を意味する。西を上にした図で、朱の道線に沿い、円みを帯びた輪郭の国々を連ねているのは、行基図の特色をよく示している。書写の年代は記されていないが、戦国時代、1555年から3年間日本に滞在した中国人鄭舜功ていしゆんこうが、

帰国後著した「日本一鑑」<sup>にほんいつかん</sup>に、ほとんど同じ図を載せている。したがって本図も 16 世紀中ごろに制作された図であることが判明する。①の図のような残欠ではなく、国土の全形を伝える図としては、書写年代のもっとも早いものである。

国土の内部には富士山のほか、東北地方に秋田城・鎮主府・夷地・宇曾利・会津などの注記がある。宇曾利<sup>うそり</sup>は延文元年（1356）の「諏訪大明神絵詞」<sup>すわだいましようじんえことば</sup>に記された地名である。東北地方が、かなり具体的に描写され、地名も正確である。夷地とは、蝦夷人が住む地という意味か。「人国記」によれば、陸奥国は青い目の人が住むと見えるので、異民族の居住を示唆していると推察される。

③日本図 桃山時代 手書 屏風 画面 27×375.3 cm（屏風 132.4×389 cm） 世界図と一  
双 河村平右衛門蔵



③-1 全体図



③-2 北東北部分図

数少ない初期南蛮屏風図の一つであり、浄得寺・小林中氏蔵の屏風図とは最も類以し、本図も含め三図ともに同一の系統に属すると推定される。本図は八曲の屏風をなすため、

日本の形態は東西に長く引きのばされ、とくに奥州の部分が関東の北部のところにくびれ、東に丸味を帯びて大きくふくらんでいるなど、三図のうちでは最も行基図の形態をとどめている。

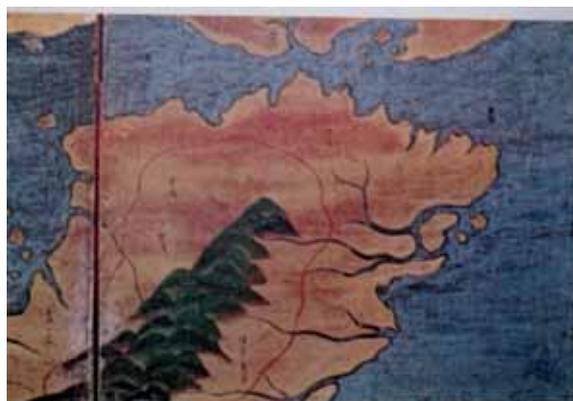
また伝説的な架空の「<sup>によごしま</sup>女子嶋」を記載しているのも本図だけである。しかし、本図にも名越（<sup>なごや</sup>名護屋）と高麗の間の航路や磯竹島（<sup>ウルルンド</sup>鬱陵島）が描かれているので、その作成年代はやはり文禄の役の前後と推定される。なお本州の北には、三図とも北海道の一部が描き込まれている。

陸奥国の突端には「<sup>そとがはま</sup>外浜」の記載があり、16世紀末、外浜が具体的にイメージされる地域として、当時の人々の認識に登場したことを示している。エゾ島と外浜がこのように対岸に位置するとの考えであり、地理認識が正確さをいっそう増して来ている。

④日本図 桃山時代 手書 屏風 画面 148.5×368.2 cm（屏風 163.8×379.6 cm） 世界図と一対 浄得寺蔵



④-1 全体図



④-2 北東北部分図

近世初期の南蛮屏風地図のうちでは、もっとも古い型に属するものの一つで、また代表的な作品として、重要文化財に指定されている。

東北地方の北部が幅広くひろがり、房総半島が伊豆半島よりもはるかに南方にまで伸びている点などは、まだ行基図の形態を継承しているといえる。また奥羽山脈や白雪を戴いた富士山が描かれている。

⑤大日本国地震之図 寛永元年（1624）刊 木版筆彩 44×26.7 cm 石川県 原田正彰蔵



⑤-1 全体図



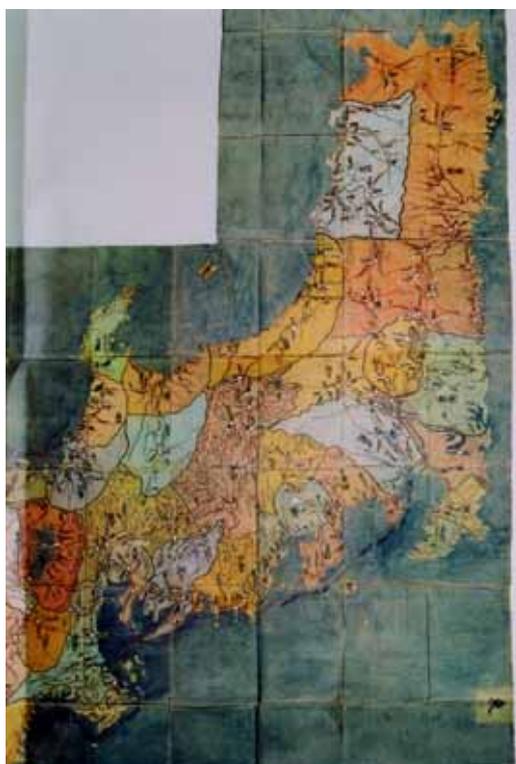
⑤-2 北東北部分図

この図には寛永元年5月吉日と、はっきりとした年紀があり、一枚刷りの日本図としては最も古いものであろう。自分の尾をくわえた竜が日本をとりまくという異様な構図をもち、竜からは12のひれのようなものが出ていて、それを12分月に配し、それぞれの月の地震占いが記入されている。たとえば3月に地震があると、農業は吉だが病気が流行し人が死ぬとある。

この図のなかの日本は明らかに行基図であるが、家康の江戸入府から4半世紀もたっているのに江戸の記入がなく、かえって鎌倉が大きく表現され、また他の行基図に見られる東京湾の大きな湾入もない。これらは、15世紀に朝鮮で刊行された「海東諸国紀」(1471)の日本図などに見られる特色である。

東北地方に関しては、「むつのくに 五十四くん」(陸奥国54郡)、「てわ 十二くん」(出羽12郡)、「あきた」などが記されている。東海中に「ゑそ」(蝦夷)が姿を現わし、日本海に「まつまひ」(松前)の小島があるのは注意される。この図の文字のほとんどすべてが仮名書きなのは、それが民衆の俗信に应ずるものであることを物語っている。

⑥幕府撰慶長日本図 寛永末期頃 手書 370×433.7 cm 国会図書館蔵



⑥-1 東日本部分図



⑥-2 北東北部分図

本図には題名もなく、図の来歴を語る記載もみえないが、慶長10年（1605）、幕府の命令によって制作された国絵図から編集された日本全図であろうといわれている。図形上の特徴は、奥羽地方が短小で陸奥湾の湾入が浅く、四国が矩形に近く、九州の中央部がくびれていることである。

主要城下を□印、その他の町を○印で表わし、おもな道路・航路・河川を記入するだけでなく、道路や航路には里程を注記し、河川の渡渉点には「舟渡」「歩渡」などの別を記している。

北東北では、久保田や盛岡などの城下町のほか、交通の要衝であった都市が記載され、河川・街道に重点を置いた描写がなされている。行基図を基本とした各図とは比較にならないほど、正確な地理描写がなされている点が注目されよう。

⑦<sup>こうこくみちのりのず</sup>皇國道度図（幕府撰正保日本図） 承応～明暦頃（1652～57） 手書 2 鋪 東日本（從遠信飛能至東北海） 83.4×162 cm 西日本（從西海道至參濃越加） 128.7×177.6 cm 大阪府立図書館蔵



⑦北東北部分図

本図は、正保元年（1644）、幕府の命令によって制作された国絵図に基づいて制作された日本全図とみなされるものである。一里ごとの測点を付した主要街道、舟がかりの良否および諸港への里数を詳記した港湾・海浜の表現などを描写。⑥慶長日本図に比べて一段と実際に近く、経緯度の測定を行なわない図としては驚くべき正確さを示している。このようなすぐれた図ができたのは、兵学・測量術に長じていた北条氏長<sup>ほうじょううじなが</sup>が、慶安4年（1651）、幕命を受けて制作に当たったからだといわれている。

本州の北方に群がる北海道・千島・カラフトの島々は想像の域を出ない稚拙な図形を示す。これは松前藩から提出された図絵図が、実際には計測せずに、伝聞をもとに制作した図であったからであろう。東北地方が本州中央部以西に対して北に向きすぎており、三陸海岸にふくらみがない。

北東北では、各城下町と有力都市、街道、河川、航路が描かれている。しかし国絵図が各藩領の領境を克明に描いているにもかかわらず、本図には、藩領の記載は見当たらない。なお 17 世紀中葉の北東北を描いた図としては、最も正確である。

⑧幕府撰元禄日本図 元禄 15 年（1702） 手書 2 舗 各 308.8×23.8 cm 明治大学図書  
館蔵



⑧北東北部分図

元禄 10 年（1697）、幕府の命令によって制作された国絵図を資料として、同 15 年に完成した日本全図。官撰日本図として、はじめて琉球諸島全体を登場させている。

東北地方に関して言えば、下北半島が小さいのに対して津軽半島が大きく描かれ、近畿から中国地方にかけての一带がじっさいとは反対に北に反り気味の形を示している。全体として⑦正保日本図よりも正確さを欠いた図形となっている。

## 2 『菅江真澄遊覧記』に見る江戸時代の「北東北」

－「北東北」の民衆世界－

本稿では、天明4年(1784)から文化9年(1812)にいたる、菅江真澄の東北地方遊覧の旅を記録した『菅江真澄遊覧記』(遊覧記と略記)から、北東北に関わる箇所を抽出して、彼が見聞した同地方の民衆世界の一端を窺おうというものである。ここでの北東北とは、弘前藩領・秋田藩領・盛岡藩領を主とする地域で、仙台藩領を北東北の範疇とするにはやや無理があると考え、岩手県南部の同藩領の区域は除外した。この点について、あらかじめご了解いただきたい。

ところで、本稿では、北東北の民衆世界でも、同地方に居住する人々の生活や行事などに共通するさまざまな事例を抽出して、一部重複する箇所はあるものの、次の4つのジャンルに分けた。

- (1) 「北東北」における基層文化の共通性
- (2) 「北東北」の伝承
- (3) 「北東北」のアイヌ語地名、蝦夷人
- (4) 「北東北」の交流

以下、各ジャンルに分けて、解説することにした。

- (1) 「北東北」における基層文化の共通性

北東北における基層文化とは何かという問いは、難しい問題である。しかしここでは、菅江真澄が、遊覧記のなかで指摘した、北東北における次のような共通性などを項目として掲げることが可能であると考え。これらの各要素を基層文化と称するかどうかは別にして、18世紀末から19世紀初頭に至る北東北を実際に歩いて見聞し、実感した菅江真澄の体験は、まぎれもない事実である。ここでは真澄の貴重な証言を尊重することで、北東北の基層文化をさぐる手がかりとすることにした。

- ① 行事の共通性
- ② 景観の類似性
- ③ 習俗の共通性
- ④ 風俗の共通性
- ⑤ 歌謡・芸能の共通性
- ⑥ 遊びの共通性
- ⑦ 習俗の普遍化
- ⑧ 地名の共通性
- ⑨ アイヌ語地名、北海道との共通性
- ⑩ 方言の共通性
- ⑪ 食事の共通性
- ⑫ 衣料の共通性
- ⑬ 技術の共通性

#### ⑭ 考古遺物の共通性

具体的な内容に関しては、資料編の各事例をご覧ください。

①～⑭にわたる各項目の内容を総覧すると、真澄は「出羽・陸奥のならわしである」「出羽・陸奥に…がたいへん多い」などの表現を多用しており、奥羽地方に共通した事柄が多く認められることを強調している。また⑧においては、白神やコガケ・ウトウなどの類似した地名が津軽・南部・下北・出羽に多いことをあげて地名の共通性を説き、さらに、北海道との同一地名（シリベシ・シヤルウシなど）、ナイ・シリなどのアイヌ語地名特有のものとの関わりについても言及している。

芸能・行事・遊び・信仰・習俗などの共通性に関しても、凧揚げ・端午の節句・番楽舞・ねぶた・木根崇拜・えんぶり・イタコ・さなぶり・歯固めなどを具体的に挙げて、北東北各地にこれらの事例が顕著に認められるとしている。

食事の共通性については、津軽と秋田との境の白神山地では、「きりたんぼ」が食されていることを記し、秋田の沿岸でとれる鱒（ハタハタ）の流通とそれが広く民衆の食卓にのぼる様子を叙述している。衣料については、コギン・裂織り・厚織りなどが例として示されている。

⑭の考古遺物に関しては、南部で出土した人面土器が、青森の三内（現青森市三内丸山遺跡）から出土したものと類似しており、アイヌの居住跡との関わりを推定している。

真澄が指摘した、14項目にわたる北東北の民衆生活にみえる地域的共通性は、これらの要素が幾重にも積み重なって、北東北の基層文化を形成していたことを示唆しているものと考えたい。ただし、後述のように真澄はただ単に共通性を指摘しただけではなく、小野小町の伝承を例に掲げるように、そこにはかつて行われていた、さまざまな交流、流通が存在したことを見逃してはいない。ここに基層文化の形成に関する、真澄なりの解釈が潜んでいるように思われるのである。

#### (2) 「北東北」の伝承

北東北における伝承については、遊覧記から次のような項目を立てることが可能である。

- ① 伝承の交流
- ② 伝承の伝播
- ③ 伝承の共通性
- ④ 交流と伝承

当時、真澄が北東北で見聞き確認した伝承は、山椒大夫伝承、安藤氏の伝承、能因法印の伝承、小野小町の伝承、義経島渡り（御曹司島渡りともいう）伝承であった。

①伝承の交流とは、もちろん陸奥←→出羽両国の間での交流を含み、山椒大夫伝承は、岩木山←→岩手山、小野小町伝承は、津軽←→秋田の雄勝である。②伝承の伝播では、たとえば男鹿的岩伝承は男鹿→津軽、蝦夷人に関するものは、津軽→北海道である。③伝承の共通性としては、津軽の大沼と秋田の田沢湖の女人投身伝承があり、④交流と伝承としては、陸奥の武士が陸奥→津軽→出羽→岩崎と移動をすることで各地に伝承を残し、地

域間で交流をしていったことが挙げられている。安藤氏の伝承は、同氏の先祖安日あひに関わるものとして南部に同伝承が存在し、津軽では阿倍比羅夫あべのひらふ伝承と結びつけて紹介されている。

### (3) 「北東北」のアイヌ語地名・蝦夷人

北東北における蝦夷人については、遊覧記から次のような項目を立てることが可能である。

- ① 蝦夷人居住の伝承
- ② 義経伝承
- ③ アイヌ語地名
- ④ アイヌの風俗と共通性
- ⑤ 蝦夷人の子孫
- ⑥ 考古遺物の共通性

①の蝦夷人居住の伝承は、津軽（津軽半島が多い）、下北地方に多く認められ、それは③アイヌ語地名でも同様の傾向が認められる。具体的には、ナイ・シリ地名などでも窺われるように、青森の野内のな・久栗坂くぐりざか・三内さんない、尾太おつが、下北では老部おいべなどである。また、峰の尾根をアイヌ語の「カノコ」と称するのも蝦夷人の居住の証であり、それが地名として津軽に定着したものもあるという。また「月のおろちね」によれば、「糠塚ぬかづか」の地名が陸奥・出羽に多いのは、「もと蝦夷婦ヌノコの酒造カールをするところからおこった」地名だからで、出羽・陸奥両国で共通に見られる地名だと述べている。その意味では、蝦夷人の居住伝承と地名伝承は、密接な関係を有していたと言えよう。

歴史的事実として、本州アイヌの居住域として、津軽領では津軽半島と夏泊半島の先端部に確認されている。南部領では、下北半島の北きた通どおり、脇野沢わきのさわなどに同様に認められ、18世紀後半には、両領において和人化が急速に進んだ。

その他、アイヌの民族衣料である「アツシ」についても出羽と蝦夷地との共通性が指摘されていて、風俗の共通性が地名とともに挙げられている。

(1) 「北東北」における基層文化の共通性でも述べたように、南部からの出土した人面土器は、津軽の三内でも出土し、それは蝦夷人の居住に関係が深いのだと述べている。出土遺物の共通性にアイヌ文化との関わりが指摘されているのは、真澄が原始時代からアイヌと北東北との関係が深いことを示唆しているものとして注目されよう。

### (4) 「北東北」の交流

北東北における交流については、すでに(1)から(3)で掲げたこととやや重複することになるが、遊覧記から次のような項目を立てることが可能である。

- ① 行事・習俗の共通性と交流
- ② 伝承の交流と地名の共通性
- ③ 人の交流
- ④ 仏像・信仰の移動と交流

①行事・習俗の共通性と交流では、下北の獅子舞という神楽が、松前の三年神楽と同じであるとし、また下北の天神祭とひな祭りも松前のそれとだいたい似ていると述べており、下北半島と松前・北海道の行事・習俗の共通性と交流を指摘している。②伝承の交流と地名の共通性は、小野小町の伝承にあつて津軽と秋田雄勝の交流が説かれている。③人の交流に関しては、白神山地における人々の交流と婚姻関係の在り方などが取り上げられていて、秋田領太良鉛山が媒介した民衆の交流が記されている。

天正 19 年 (1591)、九戸一揆で敗北した九戸政実の残党が、秋田の比内に逃れてきて、その子孫たちは山仕事をする者として生業を営んでいるという。また陸奥国の武士が南部の乱 (どの乱を指すのか不明) を避けて津軽猿賀村に落ちのび、さらに出羽、岩館に移住したという伝承を紹介している。これらは奥羽両国の争乱によって、それに関わった人々が各地に流散し、人や文化の交流がその面でも進んだことを、真澄は示唆しているようだ。

②仏像・信仰の移動と交流では、秋田能代・八郎潟湖東にかつて存在した阿弥陀像は、津軽の阿弥陀川の浦 (現青森県東津軽郡蓬田村) に移されたという。秋田山本郡の仏像は本来は円空仏であるが、下北恐山の菩薩や地藏と同じであつて、慈覚大師が制作したものか、と述べている。同様に秋田山本郡にあつた円仁仏は、津軽深浦の間口観音 (現深浦町円覚寺) へ運ばれ、船人たちの尊崇を集めているという。このように仏像の移動と信仰の伝播ないしは教線の伸張が伝承として語られ、それが格別の違和感なく北東北の人々に受け入れられているように見える。ここには、共通の基層文化が根をはり、共通の方言、行事・習俗・食習慣・信仰が人々のなかに受容されていた歴史的な背景があつたからではないかと推察される。

江戸時代の北東北における各藩領は、主なものとして北から弘前藩、盛岡藩、秋田藩であり、領民に対して強力な支配が行われた。もちろん藩境は厳重な警戒体制をとり、関所での旅人の詮議は国内有数の厳しさであつた。約 270 年間にわたる藩政時代には、前述のように各藩領において地域の特性に応じた統治が実施され、支配体制とその構造をのみ見れば、全く相違する藩領の寄り合いとしての北東北の姿が浮かび上がることになる。

しかし幕藩体制が成立してから約 200 年を経過した時期に北東北を旅行した真澄は、そのような上からの支配の在り方からではなく、民衆の世界に眼差しを据えて彼らの生活実態の中から、領主の支配権力では捉えきれない豊かな北東北の民衆像を描き出したのである。本稿で、抽出した 18 世紀末から 19 世紀初頭の北東北の民衆世界は、まさに領主の目線から外れた、民衆の躍動する姿が看取されるであろう。

### 3 近現代における北東北

#### (1) 自画像としての「北東北」

明治維新後に北東北の人々はいかなる自己認識・地域認識を抱いていただろう。数多くの建言・請願・建白から抽出できるいくつかの点をあげてみよう。

第一に蝦夷（エゾ）意識を含んだ後進感である。たとえば、明治5年（1872）4月の青森県役人杉山龍江の「奉請北巡建言」は、「僻邑ノ土人ハ殆ド蝦夷ニ近キ者甚虚説トセズ……最甚キニ至テハ聖上ハ何レノ地ニ在ルヤ朝廷ハ何レノ地ニ在ルヤヲ知ラザル者アリ」と管内の（蝦夷）ぶりを報じ、同年5月に岩手県士族の河村敬一郎が集議院宛に出した「奥羽事情建白書」も、奥羽地方がこのまま旧慣弊習を脱しなければ、「遂ニ蝦夷ノ名ヲ免ルハ能ハズ」とする蝦夷視する他者のまなざしを認めている。

第二は後進感や辺境感とは裏腹な強烈な使命感である。たとえば、明治6年（1873）10月の左院宛「陸羽開拓再上言書」は、「彼陸羽ノ地ハ一葦海ヲ渡ノ地ニシテ誠ニ北海ノ急ニ継可キ者ナレバ宜ク今ニ及テ其野ヲ開キ其土ヲ着シ農隙ニ於テ兵ヲ講ゼシメ以テ一旦緩急ノ用ニ備フ可シ」と北海道防衛との関係で東北開発の必要性を唱えている。筆者の小田為綱は盛岡藩野田通の宇部村（現岩手県久慈市）に盛岡藩士の子と生まれ、維新後に藩校作人館で原敬・那珂通世・佐藤昌介らを指導しており、のちに天皇リコール権、普通選挙、人民の抵抗権などを主張した「憲法草稿評林」の筆者と推定されている人物である。

ただし、こうした使命感の背後には北海道に対するライバル意識もうかがえる。明治7年（1874）3月、青森県令池田種徳に宛てて下北半島を管内とする第6大区長沢全秀は、「未墾ノ北海道」が「巨万ノ金」の投入によって、「開化進歩」しているのに対して、「積薄僻土」の地とはいえ、「内地ノ一端」を占める青森県が「開化ニ後」れているのは嘆かわしいことであると、「内地」レベルから脱落して北海道の後塵を拝しつつある危機感を吐露している。

第三は後進・辺境意識が疎外意識に終わらずに、政府批判につながり、自由民権運動への志向を見せている点である。たとえば、明治7年（1874）12月に青森県の農民諏訪内源司による太政官宛「建白書（起民撰議院之議）」や、明治12年（1879）12月の秋田県の平民遠山角助による来県中の政府高官佐々木高行宛の「国会開設ノ気運ニ至リシ儀及ビ議官巡視方法ノ儀」などは、社会的周縁性を逆手にとって、文明開化の遂行と民衆統治の合理化という大義名分をかかげて、政府批判・自由民権論を主張している。

#### (2) 「東北党」の構想

こうした北東北人の自己認識・地域認識は、はたして「東北人」が一般的に共有するものだったといえるだろうか。たとえば、青森県の代表的民権家本多庸一は、明治15年（1882）3月の旧弘前藩主津軽承昭宛答申書のなかで、東北の分裂割拠状態にふれ、「維

新以来各地風俗人情稍面目ヲ異ニシ、旧時奥羽ノ名アリテ、今日東北ノ実ナシ」とのべている。つまり、かつて奥羽と呼ばれた地域は幕末維新期の激動－奥羽越列藩同盟への結集、戊辰戦争の敗北－をくぐりぬけることで、相互の異質性が認識されていったと考えられる。

そのことが如実にあらわれたのが東北党問題である。明治 16 年（1883）8 月に山形で東北六県の自由党系民権家による有志懇親会が開かれ、「東北自治党」結成が提起された。主要な論者は秋田県グループであり、『秋田日報』によれば、「日本人民」のなかに東北人士対西南人士という対立があるから、まず東北の結合を固めてから、他地域の自由民権家を組織化しようという構想であった。政党組織の中央集権化を戒めて、地域連合政党を志向するものであった。これには反対意見も数多く出されたため、継続審議とされた。

しかし、明治 17 年（1884）5 月に秋田で開かれた東北会（東北有志懇親会の後身）で「東北自治党」について議論された形跡はない。その直後に『秋田日報』は廃刊となり、その母体である秋田改進黨も分裂した。これと並行して進められたのが、同年 7 月の『秋田青森函館新報』の創刊である。

同紙の発行元は「東北三州社」と名乗り、<sup>うご</sup>羽後（秋田県）・<sup>むつ</sup>陸奥（青森県）・<sup>おしま</sup>渡島（函館県－当時の北海道は、函館・札幌・根室の 3 県時代）の 3 州の有志から成り・同紙の発行目的は、秋田・青森両県＝「羽後・陸奥二州」と函館県をはじめとする「北海十一州」（渡島・<sup>しりべし</sup>後志・<sup>てしお</sup>石狩・<sup>いぶり</sup>天塩・北見・胆振・日高・釧路・根室・千島の 11 国）による「東北十三州」連合の形成であった。つまり、東北独自の運動体の結成をめざした「東北自治党」構想は、必ずしも全東北の共通利益として認識されなかったため、全東北の連携を一義的に求めることをやめ、北東北と北海道とのいわば北部連合の道を選んだのである。

東北党構想は帝国議会開設期の明治 23 年（1890）に「東北精神党」としてふたたび登場する。『岩手公報』によれば、「東北精神党」は岩手・青森・福島・新潟各県の有志によって組織され、規則には「朝野の藩閥を攻撃し、以て自由平等の大義を明にすること」、「実利に基づき事業上其他百般の事柄に付き東北人士固有の責任を全ふせんこと」、盛岡市に本部を置き、翌明治 24 年（1891）3 月に結党式を開くことなどが記されている。

「東北精神党」の結成については『秋田魁新報』や『東奥日報』（青森県）などで報じられたが、その寿命は短かったと思われる。というのは、第一議会において地価修正問題をめぐって鮮明化した東北（地価引き上げ→地租増徴が予想）と西南（地価引き下げ→地租軽減が予想）の対立により、いやがおうでも東北精神は高揚されねばならなくなったからである。東北精神の高揚は東北精神党の専売特許ではなくなり、既成政党の自由党と改進黨をはじめ、東北地域を超党派的に巻き込むかたちで進まざるを得なかった。

### (3) 「北東北」の固有性

つまり、近代の国民国家の形成過程において、東北の一体感は自明のことではなく、ある意味で東北の外部からの「圧力」によって自覚・促進されたと考えられる。東北は多様・重層的な世界であり、各地域の固有性や独自性を見つめ直し、論じなおすことが必要であ

る。アイヌ史の問題はまさにこのことを先鋭的に意味している。

たとえば、明治10年(1877)～明治13年(1880)頃にかかれたと思われる「陸奥事情」という史料がある。そこでは青森県とアイヌ民族との関連が言及され、「蝦夷の子孫と称するものハ両郡(南部・津軽)ともに今尚存するなり」とのべられている。また、明治15年(1882)12月に太平洋に面した青森県下北郡白糠村(現東通村)の北に位置する枝村の老部村が分離独立を願ったのに対して、本村の白糠村は「往古ニ遡リ之ヲ考フレバ白糠村・老部村ノ草創ハ北夷同種ノ夷人ナリ」と共通の開基から反対している。

あるいは、同年の史料で陸奥湾内に面した同郡川内村(現川内町)の湯野川温泉の風俗を描いた「遊浴日記」という史料には、アイヌ特有の衣装であるアットウシを身にまとう農婦の姿が見られる(図1)。別のスケッチ(図2)では刺子と思われる衣装を身にまとう農婦も描かれているから、この地域の作業着はアットウシに限られるものではない。ここで重要な点は、近代成立直前までの下北半島や津軽半島におけるアイヌ(本州アイヌ)の存在と生活を考えるならば、「遊浴日記」に描かれた農婦たちは「日本人」であり、彼女たちはアットウシや刺子を作業着として身にまもっていたという理解だけではなく、彼女たちが「日本人」ではなく、アイヌ(本州アイヌ)であったという理解もまた成立するだろう。



図-1



図-2

つまり、北東北はアイヌ史を自覚することによって、その姿を開示する地域なのである。

意識の面でいえば、「蝦夷人種は日本人以外の日本人なり」「吾人東北人たるもの、今日吾人が生活する所の天地は、曾彼等の祖先が経営せる所なりしを追想し、我東北の山川は、一度は彼等の祖先が獵漁の場たりしことを追懐せば、其感情果して如何ぞや」（岩手県花巻『偕同雑誌』第1号、明治24年（1891）2月1日付「蝦夷」というように、東北のアイデンティティは非日本的な契機、アイヌ民族に連なる歴史認識によって支えられていたのである。

#### (4) 閉塞化に抗する「北東北」

近現代東北の主要なイメージとして「凶作」がある。20世紀初頭の相次ぐ凶作被害は東北イメージの急速な瓦解をおよぼし、劣等意識を醸成した。たとえば、明治39年（1906）の『東奥日報』に掲載されたある投書（3月4日付「修養社と遊学生」）は、東北人にとって言語問題は「誠に大事件」であり、東京で学問をするからには、「充分なる注意を此の言語の方面に払はねばならぬ」、「自己の意志を発表するに大なる障害のあることは実に千古の恨事」だと論じている。同年掲載の別の記事（9月16日付「津軽英麿氏の講話の大要」）によれば、旧弘前藩主津軽承昭の養子英麿も、「同国人に通ぜぬ言葉」である津軽弁は改良されなければならないとのべていた。

昭和期に民政党総裁をつとめた秋田県出身の町田忠治<sup>まちだちゅうじ</sup>は、明治20年代初頭の東京遊学の若き日に「郷友」と諮って「秋田語を死守」し、他県人をして「秋田語に同化」せしめる一方、同郷人で「日本普通の言語」を話すものがいれば、「江戸弁を弄する軽薄児」と非難したというが（『秋田魁新報』明治41年（1908）4月24日付社説「先づ日本語を学べし」）、それからほぼ20年後の1908年に秋田から上京した金子洋文<sup>よしかん</sup>（のち『種蒔く人』を創刊）は、同郷の先輩から電車のなかで秋田弁を口にしないようにと釘をさされている。こうした転回の背景には、明治35年（1902）に設置された国語調査委員会による標準語選定の動きがあるだろう。

一方で、東北の従前の構造も動揺・分裂してくる。明治40年（1907）に秋田で創刊された『東北公論』の1910年3月30・31日付雑報「東北中心移転論」は、仙台が東北の中心であった時代は過ぎ、明治38年（1905）の奥羽本線の全通によって、東北経済の中心は日本海側にシフトし、近い将来に実現するであろう羽越線の開通（実際は大正13年（1924）によって、対大陸貿易港をめざす船川港を擁する秋田県に東北の中心は移転するだろうと展望している。また、明治30年（1897）～明治40年（1907）年頃に作成されたとされる「東北大学期成同盟会設置趣意書草案」という史料があり、東北帝国大学の設置地として、岩手県内を主張している。大藩であった仙台藩以来、東北の要であった宮城県の経済的文化的優位性、あるいは明治政府によって主導された仙台中心の東北支配の構図（第二師団や二高など）を自明のもの、不動のものではないと認識し、北東北に重点を移動させることで、あらたな「東北」、新しいアイデンティティが構想されはじめたといえよう。

## (5) 膨張化する「北東北」

20世紀に入ってから北東北の位置づけは、日本の対外膨張との関係で考える必要がある。たとえば、明治43年(1910)の『東北公論』は「朝鮮と東北」(10月16日付)のなかで、朝鮮への「移住者の注意事項」として、「先東北弁を矯せ」とのべている。つまり、日本の帝国主義的海外膨張のなかで、東北弁が問題となり、「漸く日本語を操る朝鮮人」に通じないような東北弁を話しては、彼らに「頗る面倒がられ」と指摘しているのである。

近代日本経済史において、1910年代は、東北全県が後進地域に定着する時期とみなされる。東北は地域格差を内包しつつも、産業資本確立・帝国主義転化期の日本にあつて、一方では米を中心とする第一次産品と資本主義的労働市場・北海道拓殖への労働力供給地として、他方では外米や肥料・軽工業品の移入地として、「国内植民地」的役割を果たし始める。すなわち、投資が増大する海外植民地や北海道の後塵を拝して、その政治的経済的文化的地位を低下させているという自己イメージが語られ始める。一国内的な後進・辺境イメージではなく、東アジア支配をめざす「帝国日本」における疎外イメージである。

その意味で、日露戦後の明治40年(1907)に青森県青森市で創刊された『北日本』や、明治45年(1912)に同県五戸村(現五戸町)で発行された『東北経済新誌』などの表紙の図柄は興味深い。前者は北海道を中心として東北・樺太・千島列島が広がる地図であり、後者も中心に北海道を置き、南に東北、北方に千島列島、南樺太、沿海州を配した地図である。また、青森商業会議所から衆議院へ提出され、明治43年(1910)に採択された青森港修築請願書も、青森港を「内地より北海道と樺太及露領浦塩港」に向けた要港として位置づけ、1907年の秋田市と土崎港町などを含む秋田商業会議所の設立趣旨にも、北海道・樺太・ウラジオストク航路は秋田県経済を活性化する突破口であるとする認識が見られる。

これらの動きは、北東北をたんに日本列島内に位置づける視点ではなく、広く北方圏、北東アジア圏のなかでとらえ返そうとする視点であつただろう。

## (6) 「北東北」の可能性—過去から現在へ、そして未来へ—

1910年代は、北東北が後進地への閉塞化と帝國的膨張への同調化というふたつのベクトルのなかで試行錯誤した時代だった。海外的には領土膨脹主義を拡大し、国内的には北東北に後進・劣等意識を強いた「帝国日本」の歴史的結末については、あらためて説明する必要はなかろう。注目すべきことは、そうした結末を迎える過程のなかで、北東北の可能性が語られたということである。

その一例が青森県出身の小説家太宰治である。太宰は昭和19年(1944)発表の「津軽」のなかで、先住民族としての東北アイヌの歴史に関連して、「澁刺と独自の文化を誇り、或

いは内地諸国に移住し、また内地人も奥羽へ盛んに入り込んで来て、次第に他の地方と区別の無い大和民族になってしまった」とそのダイナミクスを描きつつ、「津軽人の祖先も、本州の北端で、決してただらうろろしていたわけでは無かったようであるが、けれども、中央の歴史には、どういものか、さっぱり出て来ない」と従来の日本史像を批判している。この地点から「歴史の自信」を説き、「津軽の人よ、顔を挙げて笑えよ」と唱え、「日本の文華が小さく完成して行きづまっている時、この津軽地方の大きい未完成が、どれだけ日本の希望になっているか」と自負する太宰の眼差しは確実に新しい時代を展望していたといえよう。

昭和 21 年（1946）発表の「十五年間」において、太宰は「文化の表現方法の無い戸惑ひ」を感じつつ、「何かしら全然あたらしい文化」の誕生を予感し、「私は、津軽には文化なんてものは無く、したがって津軽人の私も少しも文化人では無かったといふ事を発見してせいせいした」とのべている。太宰の心境は、敗戦による一般的な喪失感や虚無感、あるいは精神的混乱ではない。近代の北東北が意識せざるをえなかった〈近代〉〈文明〉への劣等感、〈日本〉というマジョリティへの憧憬がおよそ無意味であったことの発見である。「十五年間」のつぎの一節は近代の北東北を内外から拘束してきた価値観から完全に解放されているだろう。

雪靴をはいて、雪路を歩いて居る私の姿は、まさに田舎者そのものである。しかし、私はこれからこそ、この田舎者の要領の悪さ、拙劣さ、のみ込みの鈍さ、単純な疑問でもって、押し通してみたいと思っている。いまの私が、自身にたよるところがありとすれば、ただその「津軽の百姓」の一点である。

太宰の覚悟に見られたような自立と自信を基盤とした新しい歴史の歩み方が、これからの時代、あらためて北東北に求められているだろう。北東北の過去と現在と未来を考えることは、国民国家として形成されてきた「日本」というこのクニの姿を考えることにもつながる問題である。

## 第4章 国際化の中の「北東北」

### 1 国際化・グローバル化の進展と地域アイデンティティ

地域学の取組みは、アイデンティティの形成と密接な関係がある。自らが生活する地域の歴史、風土、文化等は、個人や地域に住む人々のアイデンティティの形成に大きな影響をもたらすものである。

特に現在は、国際化・グローバル化の進展に伴いアイデンティティが多様化する中で、地域文化の復活による地域とつながりのあるアイデンティティの創造が顕著である。

17～18世紀のヨーロッパに始まる国民国家の形成の中で、国家による国語、歴史、文学等の教育を通じナショナリズムの醸成が図られていった。国民意識、つまりは国民としてのアイデンティティが形成されていく過程で、それに伴い地域性や地域文化に対する意識が縮小されていった。(図表 4-1)

また、日本においても、明治以降の中央集権的国家体制の下で国民としてのアイデンティティが醸成され、戦後高度成長の過程でさらに地域性や地域文化に対する意識は縮小されていった。

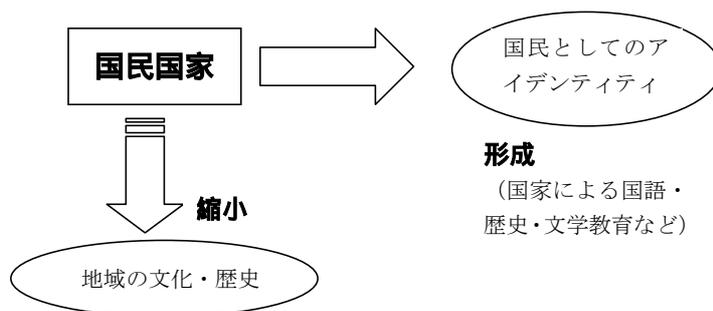
一方、20世紀後半の情報・交通手段の革命的進歩によるグローバリゼーションは、文化や広い範囲に大きな影響をもたらした。人・もの・情報・資金などが、世界の隅々までめざましいスピードと膨大な量で交流するようになり、時間と空間の壁が失われ、国境を越えたグローバルな意識が出てくることになった。

こうした流れの中でEUに代表される超国家的組織が誕生し、国家組織の統合力が低下するとともに、国家を越えた多様なアイデンティティが新たに形づくられてきている。自らの基盤を複数の国家をまたいだ形で置きながら生活しているヨーロッパの若者に見られるような意識は、国民としてのアイデンティティとは別の複合アイデンティティともいべきものである。

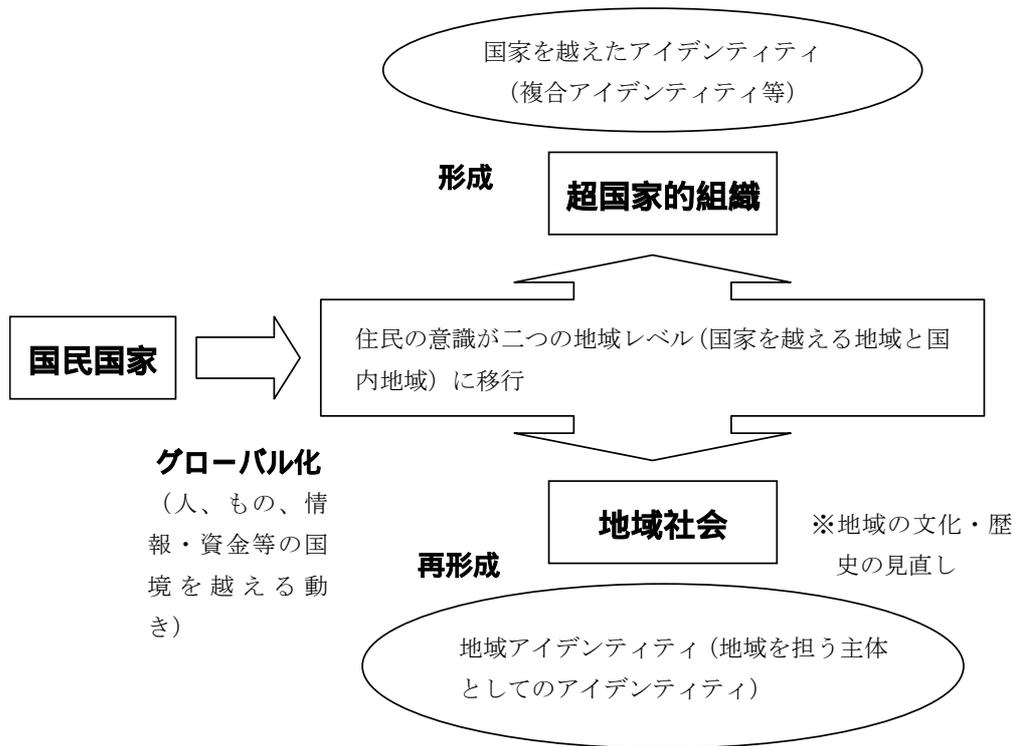
これに対し、グローバリゼーションの進行による国家を越えた意識の広がりとは裏腹に、また一部分はそれへの反発から、地方的かつ民族的な伝統を再評価しようという動きが強まったために地域文化の復活が各地で起こっている。(図表 4-2)

さらには、一歩進んで自らが属する地域の主体的な担い手としての意識（これを「地域アイデンティティ」と呼ぶこととする。）が醸成されてきている。

【図表 4-1：国民国家の形成とアイデンティティ（17～18世紀）】



【図表 4-2：超国家的機関の成立とアイデンティティ（現在）】



## 2 「北東北」とアイデンティティ

グローバル化の進行は、今まで知らなかった異文化の所在が明らかになり、相互の差異にいやでも気づかされ、反応せざるを得なくなることにもなる。海外の地域と国家を通さない直接的な交流が可能となり、このことが地域の文化や歴史を見直し、新たな価値の発見のきっかけともなるものであり、さらなる地域アイデンティティの醸成につながるものである。

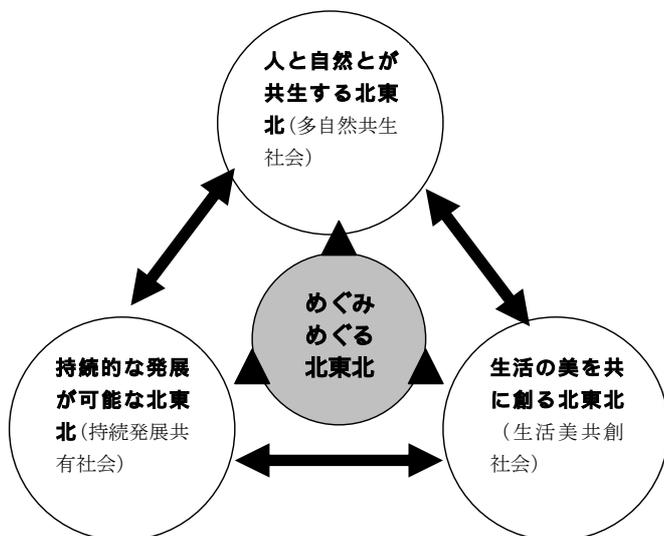
地域アイデンティティの形成に大きな影響を与えるものとして地域の歴史・文化・自然環境などがあり、その特性というものを大事にしていくことが必要である。

北東北の特性としては、豊かな自然環境と伝統的な文化があり、これを守り育てていくことが重要であると考えられる。北東北は、世界自然遺産である白神山地を代表とする雄大な自然環境に恵まれており、これを守っていくことが地域アイデンティティにおける地域への愛着・誇りの醸成という面で重要なものである。

また、北東北は、自然豊かな風土に根ざした生活様式等の特色ある地域文化を有している。縄文文化にみられる“自然との共生”の生き方は、その後の北東北の伝統的な生活様式に色濃く反映されており、地球規模での環境保護が叫ばれている 21 世紀にあって、その価値が再評価されている。

なお、青森県、岩手県及び秋田県の北東北三県が策定した「北東北広域連携構想」（平成 11 年 10 月）によれば、北東北地域が達成すべき社会像の一つとして「人と自然とが共生する北東北」があげられている。（図表 4-3）

【図表 4-3：北東北広域連携構想による達成すべき社会像イメージ】



資料)『北東北広域連携構想』(北東北地域連携推進会議)

このような北東北の特性を世界的な動きと照らし合わせてみた場合、イタリアの「スローフード」やそれを発展させた「スローライフ」という取組みは、豊かな自然環境、ゆとりある住環境、伝統的な食文化、豊かな食材などを持つ北東北に適した生活スタイルであると考えられる。

さらに北東北の地域文化は、自然への畏敬の念を持ち、自然との調和を尊んだ東洋思想的な性格を内包しており、西洋等の他地域の人々から見ると魅力ある“異”文化であり、同じ東洋の他地域の人々から見ると懐かしさや共感を覚える“原”文化であると考えられる。このことは、海外との直接的な交流を行っていく上で重要な特性といえるものである。

地域学である北東北学は、このような北東北地域の特性を踏まえたものであることが求められ、海外の地域との直接的な交流により異文化との差異を意識することで、自らの地域文化の新たな価値の発見を行い、さらなる拡充・発展が図られることになり、北東北ならではのライフスタイルを確立し、ローカル・スタンダードの形成につながっていくものと考えられる。

### 3 アイデンティティ形成における民・学・官の役割

前述したとおり、地域学である北東北学の構築は、地域アイデンティティの形成に大きく寄与するものと考えられる。地域アイデンティティの形成に向けて、北東北学への取組みを通じ、民（地域住民・企業）、学（大学等教育研究機関、博物館等を含む）、官（行政）のそれぞれの役割を果たしていくことが期待される。民・学・官が協力し、連携しながら地域文化等の継承に取り組んでいくことは、地域アイデンティティ形成に向けた大きな力となる。

まず、民の役割としては、住民が主体となった自主的な地域活動や社会活動が期待さ

れている。北東北に住む住民が一緒に活動を行うことによって、地域全体としての一体感や地域への帰属意識が醸成されることになると考えられる。近年の地域づくり団体やNPO（民間特定非営利団体）の県境を越えた活動の活発化は、これに合致したものである。

次に、学の役割としては、北東北に関する各種研究を通じて地域文化等の共通性や独自性の発掘を行い、その研究成果を情報発信することや研究成果に基づく教育を行うことが期待されている。つまりは、各種研究を通じて地域アイデンティティのベースとなるべき部分を明らかにしていくことが求められている。

最後に、官の役割としては、行政組織の県境を越えた連携事業等を通じ、地域同士の交流・連携の先導役が期待されている。連携事業により地域間の仲間意識・一体感形成の足がかりをつくることが求められている。したがって、住民の主体的な活動をバックアップしていくシステムづくりの役割を担っていくことも期待されている。

なお、北東北学に関する学・民・官の具体的な取組例をあげれば、次の表（図表 4-4）のとおりである。

**【図表 4-4：アイデンティティの形成に関する役割】**

区 分	主な役割	具体的な取組例
民間（民）	○ 主体的な地域活動や社会活動の実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地域資源を活用した地域おこし活動（農村体験ツアー等）の実施</li> <li>・ 北東北学自主研究大会の開催</li> </ul> <p style="text-align: right;">etc</p>
大学（学） ※博物館等を含む。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 地域文化等の共通性や独自性の研究</li> <li>○ 研究成果の情報発信</li> <li>○ 研究成果に基づく教育の実施</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 国際交流科目としての「北東北学」の構築</li> <li>・ 北東北学市民講座の開設</li> <li>・ 北東北に関する研究論文の発表</li> <li>・ 博物館等の一部開放（マイミュージアムギャラリーの開設）</li> <li>・ 民間学芸員制度の創設</li> </ul> <p style="text-align: right;">etc</p>
行政（官）	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 地域間連携事業の実施</li> <li>○ 住民活動支援のシステムづくり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 北東北遺産登録制度の創設</li> <li>・ 北東北学フォーラムの開催</li> <li>・ 学校副読本の作成</li> </ul> <p style="text-align: right;">etc</p>

## 第5章 地域学としての北東北学

### 1 地域学の考え方

地域学は、自分の在る地域の歴史や文化、産業、自然などを見つめ直し、地域の魅力や可能性を発掘しようとするものである。

地域学は、地域に暮らす人にとっては当たり前にあるもの（地域資源）やこと（生活・生産文化）の価値や意味を、外部の人の視点も借りながら掘り起こし、産業振興などの地域づくりに活かすものであり、従来の郷土史や民俗学とは異なり、住民自身が当事者となって調べ、考え、ものや地域、生活をつくっていくことを目指すものである。したがって、その成果が調査者に独占されたり、ただ何かを知って満足するだけの「もの知り学」には終わらないものである。

近年の地方分権化のうねりは、いきおい地方に自立を求めることになり、地域の活性化に地域学を取り込み、活用していこうとする動きが各地に見られるようになってきている。地域の個性化、アイデンティティの確立が、これまで以上に強く求められ、勢いを増している。

こうした状況の中で、地域学の果たすべき使命は、ふるさと創生はもちろんのこと、その地域住民が過去からいかなる自然的風土を培って、長い間、衣・食・住を通じた暮らしをして、歴史的風土を築いてきたかを、地域住民が学習し、地域における生き方、まちづくりの方法等、その他未来にかけての創造をよりよく促進させることである。

地域学は、フアジーな「学」であるが故に、その基盤、底流に、高度に専門分化した縦割りのジャンルの「学」には望むことのできないアマチュアリズムの参入が期待でき、多様な価値を持つ人々の参加を通じて地域コミュニティの活性化の可能性もうかがわせるものである。

住民の地域学への参加は、自然や文化という身の回りの現象や世界と同様に、そこに生活する自分自身さえも学習資源として対象化することにもなり、地域社会を担う地域の主体者としての意識形成に大きく寄与するものである。

地域学は、住民一人ひとりの個性に磨きをかけ、潜在化していた能力に弾みをつけ、彼等自身が自信を備えることによって、自らが勇気づき、自己の中に元気を取り戻す。地域コミュニティもまた、住民たちの成長と活気によって地域そのものも開かれ、魅力を増し、可能性を高めていく。住民にとって地域学は、自己の存在と向き合う格好の機会であるとともに、自己の社会的存在証明にもつながり、その存在証明は、まちおこし、まちの活性化といった新たな地域環境の形成にも貢献する。この意味で、地域学は、それを学び、活用する人には同時代に生きるという、当事者意識を強く感じさせるとともに、地域社会をともに構成し形成していくという、社会性への目覚めにも大きな役割を果たすものと考えられる。

以上のことから、地域学の考え方を整理すると次表（図表 5-1）のとおりとなる。

【図表 5-1：地域学の考え方】

<b>地 域 学</b>	<b>総合・学際</b>	人文科学や自然科学などの諸学を当該地域固有の風土の視点から総合化し、横断的で学際的な取り組みを特色とする「学」である。
	<b>連携・協力</b>	住民のイニシアティブのもとに地域の民・学・官が手を携え、地域の優れた資源、能力を発見・発掘し、当地域に新しい息吹を起こすことによって地域の活性化を目指す「学」であり、一方では、“地域力”の醸成を支援する住民主体の「学」である。
	<b>運動</b>	地域おこしの有力な観光資源としての資質と可能性を持ち、他地域から当地域への集客を誘発し、地域固有の文化的アイデンティティとして機能する「学」である。
	<b>創造・発信</b>	地元に住らす人々にとっては当たり前にあるものやことの価値や意味を、外部の人の視点も借りながら掘り起こし、地域づくりに活かす「学」であるとともに、住民自身が当事者となって調べ、考え、ものや地域、生活をつくっていくことを目指す自学自習の「学」である。

## 2 北東北学の特徴

北東北学は、北東北の地域学であり、当然に地域学の一般的な特徴を有している。したがって、北東北学は、北東北に住む人々や関わりのある人々が、北東北の自然・社会・文化・産業等の諸領域にわたり、生活の視点に立って北東北を多面的・総合的に知り・探求しながら、さらに学んだことを活かして創造していく中で、自らのアイデンティティの確立や地域の望ましい姿の実現に向け、長期的な視点に立って、取り組む住民主導型・総合型の学びである。

また、北東北学を通じて、地域住民が自らの足元を見つめ地域を考えること、そのことが契機となって地域社会のありようを住民の側から発言するという行政と住民との協働関係を取り戻すことも期待できる。住民による郷土学、学識者や行政に取り仕切られるのではなく住民自身が主体となって取り組むべきものである。

次に、独自性をもった北東北学ならではの点としては、

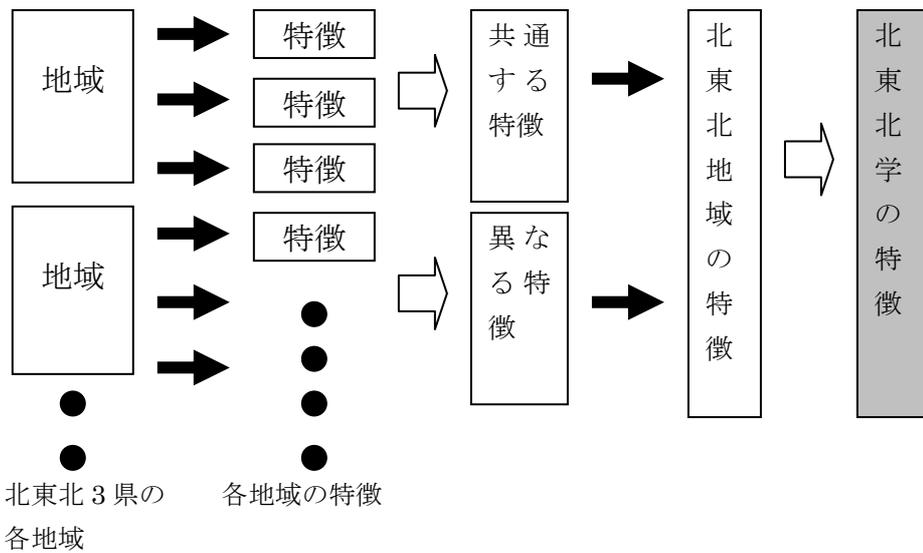
- ① 県境を越え青森県、岩手県、秋田県の北東北3県を一つの地域としてとらえている広域性を有すること、
- ② 北東北という広域的な地域を対象とするため、その中に内包する各地域の多様性を有すること（図表 5-2）、
- ③ 各地域の多様性があるがゆえに交流・連携の可能性を有すること

があげられる。(図表 5-3)

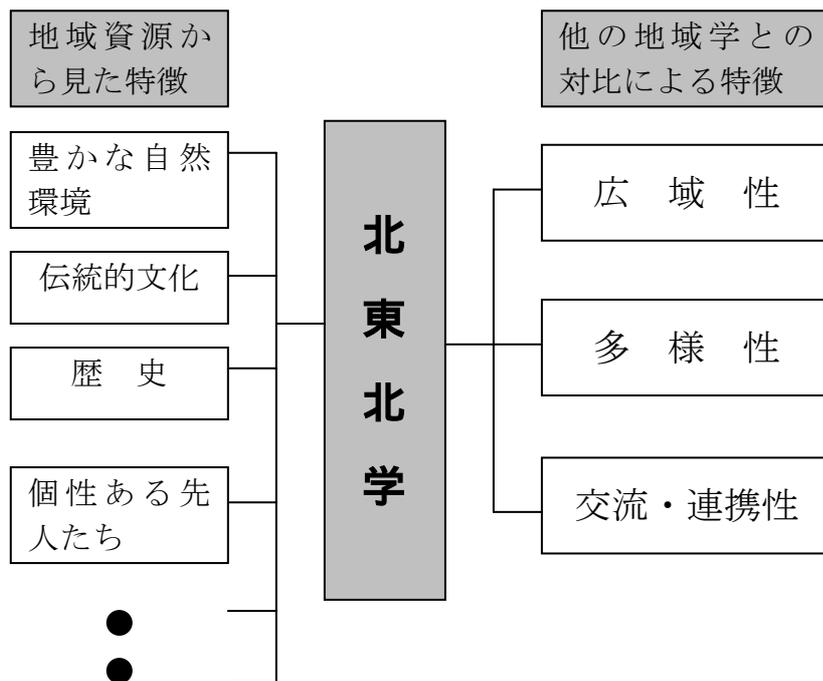
また、北東北学の特徴を地域資源の視点から見ると、①白神山地などの北東北の恵まれた自然環境、②北東北の風土に根ざした伝統文化、③縄文遺跡などにその足跡を残す北東北の歴史④個性ある地域の先人たち・・・などがあげられる。

北東北学は、北東北の特徴・特性を踏まえ、北東北にある地域資源を有効に活用しながら、従来のステレオタイプ化されたイメージではない“北東北ならではの視点”で取り組んでいくべきものである。

【図表 5-2 : 北東北学の特徴イメージ 1】



【図表 5-3 : 北東北学の特徴イメージ 2】



### 3 北東北学の実践的・学際的な性格

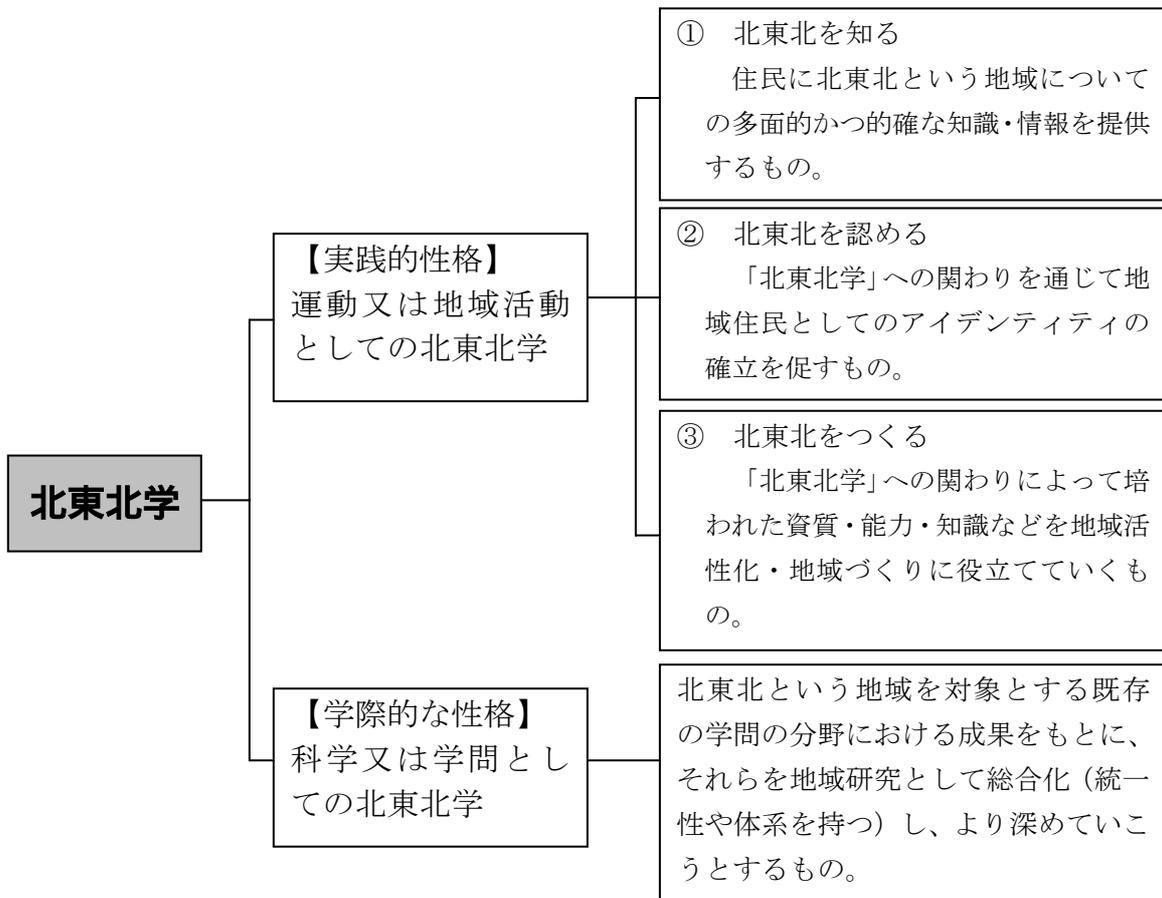
北東北学は、北東北の地域学であり、住民主体型・総合型の学びであるが、①運動あるいは地域活動としての「北東北学」と、②科学あるいは学問としての「北東北学」という二つの面を併せ持つと考えられる。(図表 5-4)

運動あるいは地域活動としての「北東北学」は、第1に住民に北東北という地域についての多面的かつ的確な知識・情報を提供する(北東北を知る)こと、第2に「北東北学」への関わりを通じて地域住民としてのアイデンティティの確立を促す(地域を認めること)、第3は「北東北学」への関わりによって培われた資質・能力・知識などを地域活性化・地域づくりに役立てていく(地域をつくる)ことを目標とするものである。

科学あるいは学問としての「北東北学」は、北東北という地域を対象とする既存の学問の分野における成果をもとに、それらを地域研究として総合化し、より深めていこうとするものであり、北東北グラフィ(百科辞典的・博物誌的な学問)ではなく、北東北トロジー(科学的で有機的な統一性・体系を持つ)を目指すものである。

北東北学は、地域の固有の人文科学や自然科学などの諸学を、地域の風土(郷土)の視点から総合化していこうとする横断的な「学」である。

【図表 5-4 : 北東北学の実践的・学際的な性格】



## 第6章 北東北学の目指すべき方向性

今後、北東北学を構築し、発展させていく上で目指すべき方向性の重要な柱となるべきものとして、次の5点があげられる。

### 1 それぞれの地域づくりにつながる「北東北学」

「北東北学」は地域学であり、そこで暮らす住民を主体とする“地域”のためのものである。つまり、自分が暮らす地域の歴史や文化・産業・自然などを見つめなおし、地域の魅力や可能性を発掘するものである。地域住民が過去からいかなる風土に生き、衣・食・住の歴史的文化を築いてきたかを自らが学習することで、自己の存在と向き合う格好の機会であるばかりでなく、自己の社会的存在証明にもつながり、その存在証明は積極的な地域活動への参加を通じ、「まちおこし」「まちの活性化」といった新たな地域環境の形成にも貢献するものである。

「まちおこし」「まちの活性化」を実現するためには、北東北学を地域産業とリンクさせ、産業を振興していくという視点が必要である。

例えば、現在各地域で進められている「地産地消」の取組みは、そこに地域の食文化の視点を欠くことができないと考えられる。地域社会には、人間の暮らしがあり、そこに地域に根ざした伝統的文化がある。それぞれの地域社会には食の文化があり、食の文化に基づく食生活は地域社会の食の生産と結びついている。地域の食文化を守っていくということは、地域の食の生産を守っていくことにつながるものである。

さらに、北東北学を北東北の重要な産業の一つとなっている観光産業と結び付けていくことも必要である。北東北の文化財等を訪ねる観光ルートを開発することや地域内外の住民を北東北の農山漁村に宿泊させ、北東北の文化を体験させる「北東北学ツーリズム」などの取組みが必要である。

【図表 6-1：地域づくりにつながる「北東北学」取組例】

取組例	概要
北東北の食文化と地産地消運動の実施	豊かな地元の食材を使った北東北の伝統的な食文化（伝統料理）を地域内外の人々に体験してもらう。
北東北学探求ルートの形成	民・学・官の連携により北東北学を探求していく観光ルートを形成する。
北東北学ツーリズムの実施	地域内外の住民が、北東北の農山漁村に宿泊し、伝統的な北東北の文化を体験する。
北東北学ふるさと学校の創設	都市に住む児童を北東北に留学させ、北東北の住民と一緒に生活しながら北東北学を学ぶ。
北東北マイスター制度の創設	北東北の伝統工芸等を地域の貴重な財産として後世に残していくため、技能者養成システム（後継者及び指導者の育成）として創設する。

## 2 住民の主体的な参加と「民・学・官」の連携による「北東北学」

「北東北学」を“役立つ道具”とし、これからの新たな地域づくりに活かすためには、住民自らが当事者意識を持ちながら積極的に取り組んでいくことが必要であると考えられる。

同時に、北東北学を構築・発展させていくためには、地域を担っている「民・学・官」がそれぞれの役割を果たしながら、連携・協力していくことが必要である。そのためには、民・学・官が連携・協力しながら取り組んでいくための母体として、北東北の民・学・官からなる「北東北学会」を創設し、その上でそれぞれの役割を果たしていくことが必要である。

それぞれに期待される役割としては、「民」には、住民が主役の自主的な取り組みを積極的に進めていく役割が期待される。そのためには、北東北学を地域づくりに活かしていくための方策等を住民自らが協力しながら検討していく「北東北学ワークショップの開催」などの取り組みを進めていくことが必要である。

次に「学」に期待される役割としては、各種研究を進め、研究成果を社会に還元することがあげられる。そのためには、北東北学の学習の場としての「北東北学市民講座の開設」、「北東北学出前講座の開設」や各分野における基礎研究を進める場としての大学における「北東北学講座」の設置や「北東北学研究所の創設」などの取り組みを進めていくことが必要である。

また、「学」の中の博物館等においては、博物館等の一部を住民に展示・発表の場として開放する「マイミュージアム・ギャラリーの開設」や北東北学に関するアドバイスを行うための「民間学芸員制度の創設」などの取り組みを進めていくことが必要である。

最後に「官」に期待される役割としては、住民の自主的な活動をバックアップするシステムづくりをしていくことがあげられる。そのためには、北東北学を広く普及させていくための「北東北学フォーラムの開催」や「北東北学ブックスの作成」などの取り組みを進めていくことが必要である。

【図表 6-2：住民の主体的な参加と「民・学・官」の連携による「北東北学」取組例】

取 組 例	概 要
北東北学会の創設	民・学・官からなる北東北学の取り組み母体を創設する。
北東北学ワークショップの開催	北東北学を地域づくりに活かしていくための方策等の検討のため、ワークショップを開催する。
北東北学自主研究発表会の開催	北東北学をテーマに小学生高学年の夏休みの自主研究を募集し、発表会を開催する。
北東北学市民講座の開設	住民向けの市民講座を開設する。
北東北学出前講座の開設	北東北学の市民講座を出前講座の形で実施する。
北東北学研究所の創設	各分野における学問的な基礎研究を進めるために創設する。
北東北学マイミュージアム・ギャラリーの開設	博物館等を一部開放し、住民に北東北学に関する展示・発表の機会を提供する。

【図表 6-2 続き】

取 組 例	概 要
民間学芸員制度の創設	住民への北東北学に関する取組み等のアドバイスを行うため、博物館等に民間学芸員制度を創設する。
北東北学フォーラムの開催	北東北学の普及啓発のため、フォーラムを開催する。
北東北学ブックスの作成	北東北学の冊子を作成し、普及啓発を行う。

### 3 「北東北」を再評価する「北東北学」

「北東北学」を構築・発展させていく上で大きな柱の一つとなるべきものが、“北東北ならではの視点で北東北を見つめなおすこと”であり、つまりは北東北を再評価するということである。

これまでのような中央からの視点ではなく、北東北に住む我々が主体となる視点で北東北の歴史、文化などを見つめなおしてすることで、新たな価値や魅力を発見し、創造し、発信していくことができると考えられる。

以上の点を踏まえれば、北東北の自然遺産、文化遺産等を北東北ならではの視点で保存・保護していくための「北東北遺産登録制度の創設」や北東北ならではの視点で自らの歴史を後世に残すための「北東北史の編纂」などの取組みが必要である。

【図表 6-3：北東北を再評価する「北東北学」取組例】

取 組 例	概 要
北東北遺産登録制度の創設	北東北の自然遺産、文化遺産などを後世に残すべき遺産として登録し、保護していく。
北東北史の編纂	北東北の視点で北東北の歴史を編纂する。
北東北マイスター制度の創設 (再掲)	北東北の伝統工芸等を地域の貴重な財産として後世に残していくため、技能者養成システム(後継者及び指導者の育成)として創設する。

### 4 国際化・グローバル化の中の「北東北学」

「北東北学」を構築・発展させていく上で、北東北の持つ特性を活かしていくことが必要である。北東北は、世界自然遺産である白神山地を代表とした雄大な自然環境と、自然豊かな風土に根ざした伝統文化等を有しており、国際化・グローバル化が進む現在、これらの特性を広く世界に発信していくことも北東北学の方向性の一つとして考えられる。

豊かな自然環境、ゆとりある住環境、伝統的な食文化、豊かな食材などを持つ北東北の特性は、今般注目を集めているイタリアを発祥とする「スローフード」やそれを発展させた「スローライフ」という生活スタイルを実践する場としてふさわしいと考えられる。

さらに自然への畏敬の念を持ち、自然との調和を尊んだ東洋思想的な性格を内包する北東北の地域文化は、西洋等の他地域の人々から見ると魅力ある“異”文化であり、同

じ東洋の他地域の人々から見ると懐かしさや共感を覚える“原”文化であり、海外との直接的な交流を行っていく上で重要な特性といえるものである。

以上の点を踏まえれば、北東北学を通じて北東北の魅力を全世界的に情報発信していくことが必要であり、北東北の各大学に留学生を対象とした「国際交流科目『北東北学』の創設」やインターネット上のエキスポ（祭典）である「北東北学バーチャル・エキスポの開催」などの取組みが必要である。

【図表 6-4：国際化・グローバル化の中の「北東北学」取組例】

取 組 例	概 要
国際交流科目「北東北学」の創設	北東北3県の大学等に国際交流科目として「北東北学」を創設する。
北東北学バーチャル・エキスポの開催	インターネット上で北東北学に関するエキスポ（祭典）を開催する。
北東北学ホームページの創設	国際的に「北東北学」を情報発信していくため、複数の言語によるホームページを創設する。

## 5 地域の一体感を醸成する「北東北学」

「北東北学」は、青森県、岩手県及び秋田県の北東北3県を対象とする地域学である。北東北は、広いエリアの中に様々な特性を持った地域を内包している。「北東北学」は、それらの多様性が北東北全体としてみた場合に地域の総合力となるように、地域の一体感の醸成に寄与するものでなければならない。

「北東北学」への取組みを通じ、各地域の相互理解が深まり、交流・連携が生まれ、地域としての一体感を醸成するとともに、北東北の地域アイデンティティの確立につなげていくことが重要である。

以上の点を踏まえれば、将来の北東北を担う児童・生徒を対象とした「学校副読本『北東北学』の作成」や北東北地域の住民がインターネット上で情報交換が行えるような「北東北学ホームページの創設」などの取組みが必要である。

【図表 6-5：地域の一体感を醸成する「北東北学」取組例】

取 組 例	概 要
学校副読本「北東北学」の作成	将来地域を担っていく児童・生徒向けに学校副読本として「北東北学」の冊子を作成する。
北東北学ホームページの創設（再掲）	インターネットを活用し「北東北学」に関する情報交換を行うことができるようにホームページを創設する。
北東北学ワークショップの開催（再掲）	北東北学を地域づくりに活かしていくための方策等を各地域の人々が一緒に検討できる場として、ワークショップを開催する。

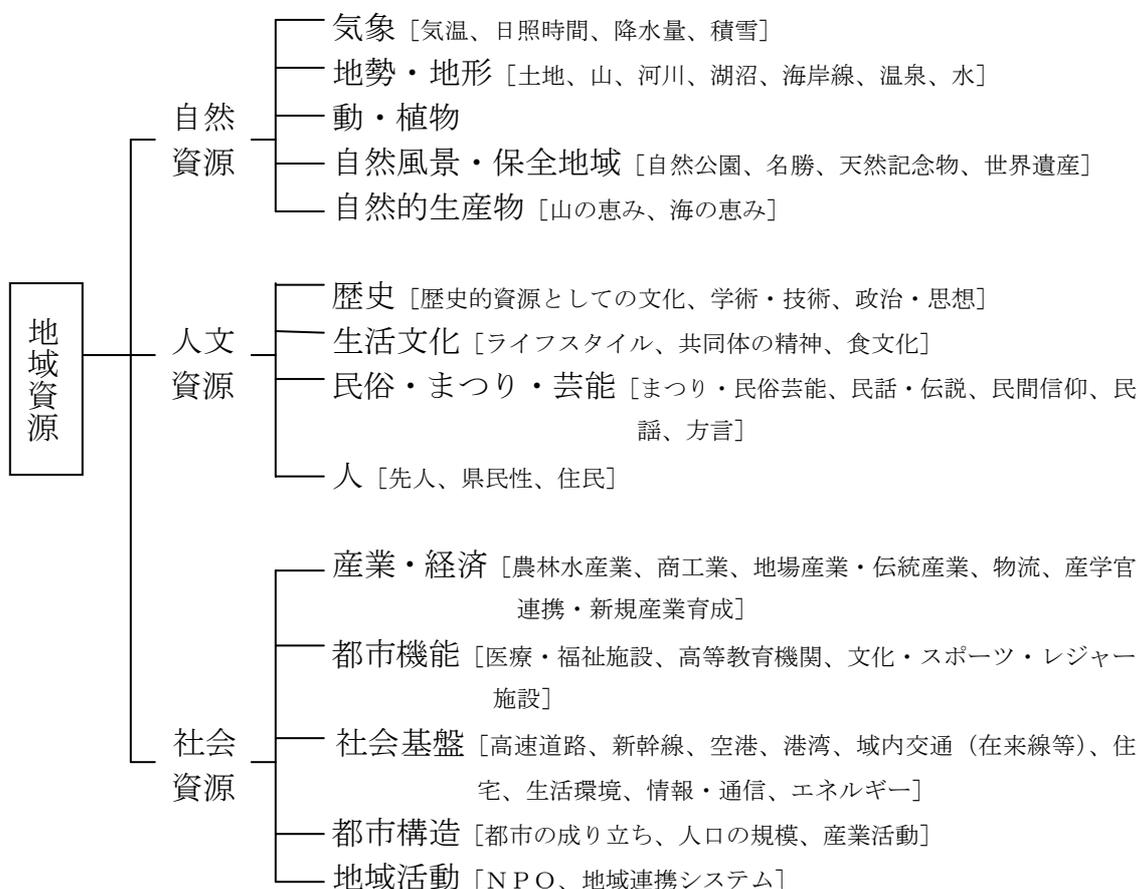
## 第2編 「北東北」の地域資源

### 1 地域資源体系

北東北学を展開・構築していく上で、地域資源を掘り起こし、活用することが必要である。もちろん、その地域資源の特徴を十分に把握・分析できることが、北東北学を地域づくりに活かしていく上で必要不可欠である。

北東北の潜在的な地域資源については、さまざまなとらえ方ができると考えられるが、切り口の一つとしてその体系を示せば、次のような体系が想定できる。

【図表 2-1：地域資源体系図】



### 2 「北東北」における地域資源の例

北東北は、豊かな自然環境、風土に根ざした伝統文化、個性ある先人たち、そして現実に北東北での生活を支える社会資本など多様な地域資源を有しており、その主なものを示せば次のとおりである。

## (1) 自然資源

北東北は、我が国有数の自然公園や世界自然遺産の白神山地を始めとする豊かな自然環境を有するばかりではなく、日本列島の中で、最も季節の移り変わりがはっきりとした地域といわれる。新緑が一斉に萌える春、さわやかな夏、紅葉の秋、白銀の冬など、四季折々の風景に満ちあふれ、それがみずみずしい自然環境に一層の彩りを添えている。このような自然景観とそこに生息する多様な生物相からみても、北東北の自然から受ける我々の恩恵ははかり知れないといえる。

例えば、北東北では「ブナの木一本が水田一反歩をうるおす」とか「ヒノキ（ヒバ）の枝にアワビが生える」といったことわざが語り継がれてきた。これらの言葉は、この地で土に触れ、日差しを受け、風を感じながら生きてきた先人たちが、自然と共生者でもあったことを示している。

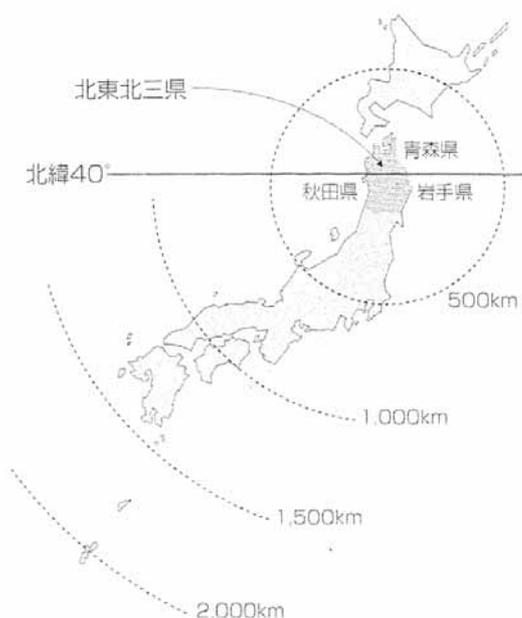
### ア 地理

#### ① 位置

北東北は、東には南北両アメリカへとつながる太平洋を望み、西は日本海を挟んでユーラシア大陸と隣り合い、北には太平洋と日本海が交差する津軽海峡が本州と北海道との十字路に位置するなど、「インターブロック交流圏」として今後の発展が期待されている地域であるとされている。

また、国内的には北海道から関東に至る東日本のほぼ中央部に位置し、本州北端というよりは、“東日本の中心”という見方がふさわしいといえる。

【図表 2-2：北東北の位置】



資料)『北東北広域連携構想』(北東北地域連携推進会議)

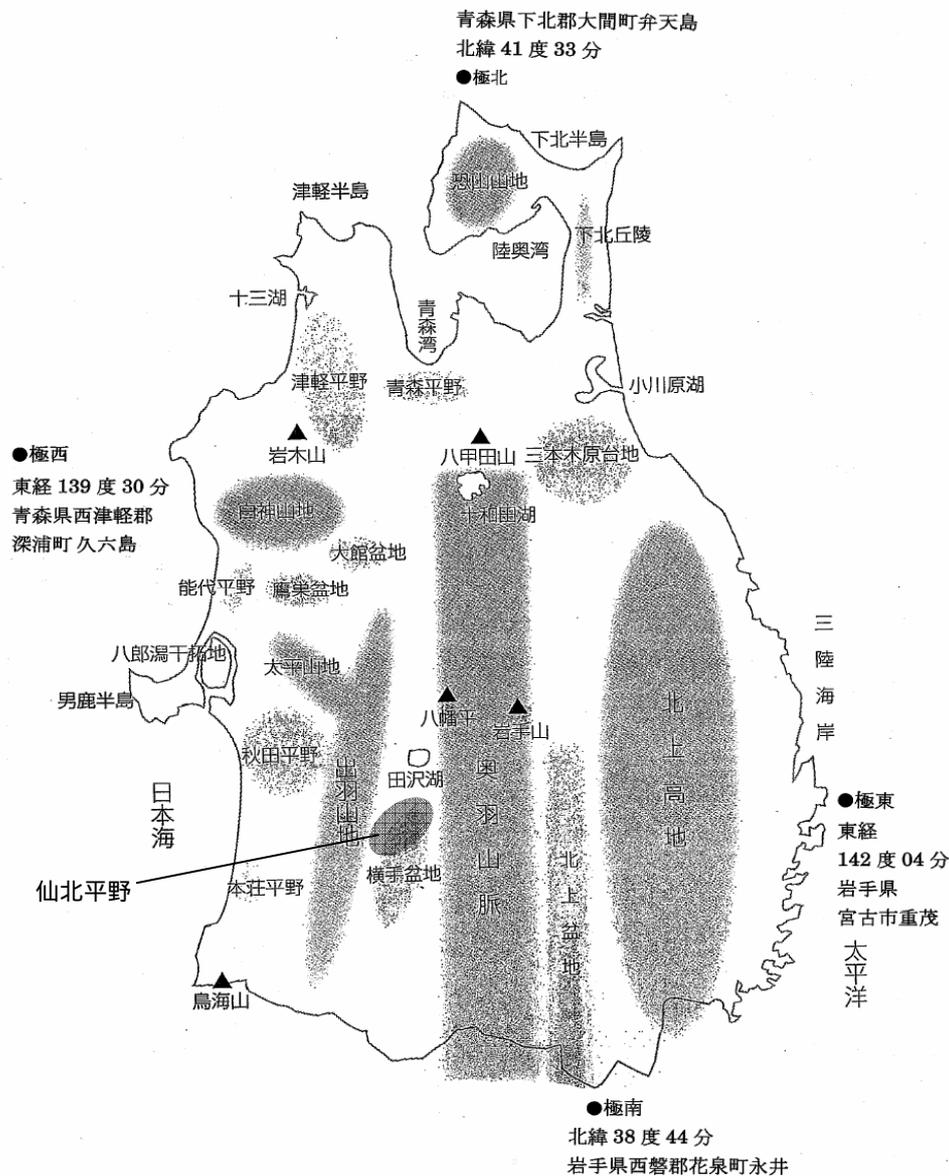
## ② 地形

北東北は、東端が岩手県宮古市重茂（東経 142 度 04 分）、西端が青森県西津軽郡深浦町久六島（東経 139 度 30 分）、南端が岩手県西磐郡花泉町永井（北緯 38 度 44 分）、北端が青森県下北郡大間町弁天島（北緯 41 度 33 分）となっている。

このように北東北は、東西約 200 km、南北約 300 km の広がりを持ち、面積はおよそ 36.5 千km<sup>2</sup>で、国土の 1 割弱を占めている圏土を有している。

この広大な圏土の中央には、高い自然度を誇る奥羽山脈が脊梁として南北に貫き、これをはさむようにして東に準平原状の北上高地、西に低山性の出羽山脈が縦走り、さらに青森・秋田県境には世界自然遺産の白神山地が広がっている。

【図表 2-3 : 北東北の地形】



資料)『北東北広域連携構想』(北東北地域連携推進会議)を基に作成

## イ 気候

北東北 3 県の県庁所在地（青森市、盛岡市、秋田市）の気候は、年平均気温を見ると 10℃前後と冷温な地域であり、月別平均気温で見ると最高（8 月）が 22.9～24.4℃、最低（1 月）が△0.4～△2.5℃と寒暖の差が大きく、四季の移り変わりが明確な地域であるといえる。

また、降雪の影響から青森市と秋田市で年間日照時間が少ないこと、青森市で積雪 10 cm 以上の日数が多いことが特徴としてあげられる。

【図表 2-4：気候】

区分	標高	年平均気温 (℃)	月別平均気温(℃)		平均不快日数 (日)	年間日照時間 (h)	年間降水量 (mm)	積雪10cm以上 の日数(日)
	(m)		最高(8月)	最低(1月)				
青森市	2.8	9.7	22.9	△ 1.8	7.7	1,695	1,360.4	105
盛岡市	155.2	9.8	23.2	△ 2.5	11.8	1,815	1,265.3	52
秋田市	6.3	11.1	24.4	△ 0.4	13.7	1,642	1,746.4	50

資料) 国立天文台編『理科年表』

注) 平均不快日数は、不快指数が80を超える日数の合計値である。日本では、不快指数が70以上で一部の人が、77で半数の人が、85で全ての人が不快感を訴えるとされる。

## ウ 植生

北東北は、世界の温帯モンスーン地帯の中でも有数の落葉広葉樹林帯を有する地域であり、全面積の 75.2%を森林が占め、その 42.4%に当たる 1,125 千km<sup>2</sup>が天然林となっている。

特にブナ林の蓄積は全国の 33.6%というシェアを持ち、地球規模での亜寒帯～冷温帯地域の豊かな自然の面影を色濃く残していることをうかがわせる。

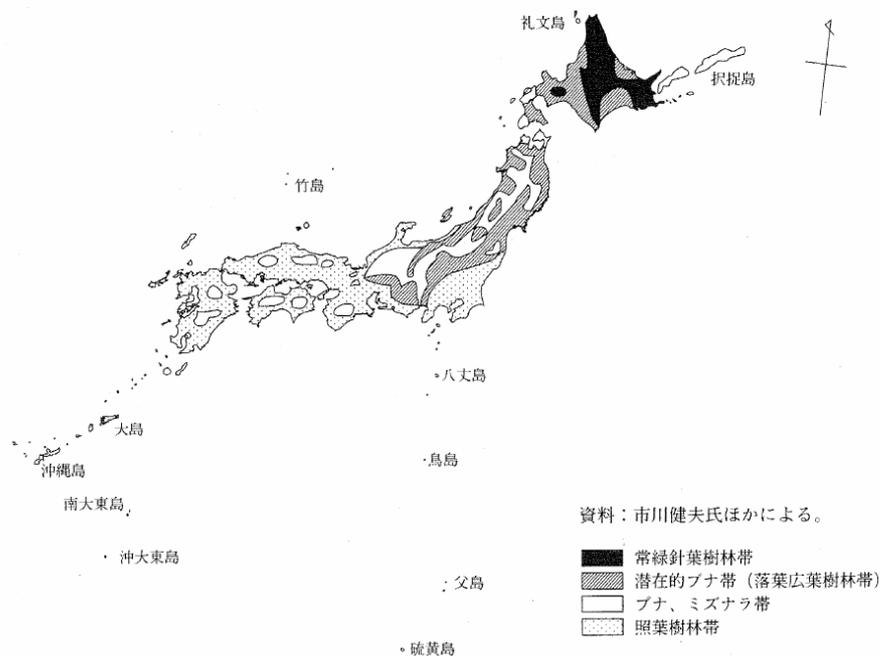
自然との共生が叫ばれるようになった現在、人類と「ブナ林」との新しい関係を構築することは、深刻な環境問題に直面する現代人の大きな課題のひとつであり、“開発”の道を北東北が歩むのかを問いかけているといえる。

こうしたブナ林を代表するものとして、平成 5 年、青森・秋田県境に広がる白神山地のうち 16,971 ha が鹿児島県の屋久島とともに、「原始的なブナ天然林の面積が世界最大級であること、ブナ林内の生態系が世界的にみても貴重である」として日本初の世界自然遺産に登録された。

白神山地には、標高 1,000m 級の急峻で広大な山々の連なりの中に、世界最大級の原始的なブナの自然林が残され、そこには多種多様な植物群落と、これを基盤とする豊かな動物群が生息する高い完成度の生態系が形成されている。

しかし、このようなブナ林は、かつては森吉山や奥羽山系の和賀岳周辺、そして北上高地に広く形成されていましたが、近年の開発により、消失したことも忘れてはならない。

【図表 2-5 : 植生分布】



【図表 2-6 : 世界自然遺産】

登録名	保有地域自治体
白神山地	青森県鱒ヶ沢町、深浦町、岩崎村、西目屋村、秋田県藤里町

資料) 青森県・秋田県ホームページ

## エ 自然公園

北東北には、十和田八幡平、陸中海岸という二つの国立公園に加え、下北半島、津軽、早池峰、男鹿、鳥海、栗駒の六つの国立公園のほか、22の県立自然公園ある。これらの自然公園はトータルで約310千haと、北東北の1割弱にも達している。

しかし、それまで津軽国立公園の一部にすぎなかった白神山地が世界自然遺産に登録され、また、シラカバ林の広がる平庭高原に多くの人々が集い始めたように、いまだその価値が知られていない自然環境も少なくないと考えられる。その意味でも残された自然環境を保護していくことは、北東北に住む我々のみならず、地球的な課題であるといえる。

【図表 2-7：自然公園】

区 分	青森県	岩手県	秋田県
国立公園	十和田八幡平	陸中海岸 十和田八幡平	十和田八幡平
国定公園	津軽 下北半島	栗駒 早池峰	鳥海 栗駒 男鹿
県立自然公園	浅虫夏泊 大鱒碓ヶ関温泉郷 種差海岸階上岳 名久井岳 芦野池沼群 岩木高原 黒石温泉郷 赤石溪流暗門の滝	久慈平庭 外山早坂高原 花巻温泉郷 湯田温泉郷 折爪馬仙峡 五葉山 室根高原	田沢湖抱返り きみまち坂藤里峡 八森岩館 森吉山 太平山 田代岳 真木真昼

資料)『東奥年鑑』(東奥日報社)、『岩手年鑑』(岩手日報社)、『秋田魁年鑑』(秋田魁新報社)

## オ 名勝

北東北では、特別名勝及び天然記念物として、青森県と秋田県にまたがる十和田湖および奥入瀬溪流、特別名勝として岩手県の毛越寺庭園、名勝及び天然記念物として青森県の仏宇多、岩手県の厳美溪と碁石海岸が国から指定されている。さらに、名勝として、種差海岸、高田松原、奈曽の白瀑谷などの自然の景勝地のほか、盛美園など歴史的な庭園など国から 9 件の指定を受けている。

また、県の名勝、名勝及び天然記念物として、合わせて 7 件指定されている。

【図表 2-8：特別名勝・名勝】

区 分	青森県	岩手県	秋田県
国指定	特別名勝及び天然記念物	十和田湖および 奥入瀬溪流	十和田湖および 奥入瀬溪流
	特別名勝		毛越寺庭園
	名勝及び天然記念物	仏宇多(仏ヶ浦)	厳美溪 碁石海岸
	名勝	種差海岸 盛美園 清籐氏書院庭園 瑞楽園	狛鼻溪 高田松原 珊瑚島
県指定	名勝	成田家庭園 貞昌寺庭園	浄土ヶ浜 船越海岸
	名勝及び天然記念物		青松島

資料)『東奥年鑑』(東奥日報社)、『岩手年鑑』(岩手日報社)、『秋田魁年鑑』(秋田魁新報社)

## カ 山岳

北東北は、数多くの名山を抱えている。例えば、北海道までの雄大な景色を一望する岩木山、16 連山にアオモリトドマツの純林を抱く八甲田連峰、火山の標本地ともいわれ、大火山高原に大小の湖沼や湿原を点在させる八幡平、特別天然記念物「焼き走り溶岩流」を擁する岩手山、修験の霊地として信仰を集める早池峰山、そして日本海から直接そびえ立つ孤峰、鳥海山などがあげられる。

これらはいずれも、北東北の落葉広葉樹林ならではの全山を染め上げる紅葉の季節ばかりでなく、可憐な高山植物や湿性植物の大群落を有し、「日本百名山」(深田久弥)にも数えられている。

【図表 2-9 : 主な山】

名 称	標高(m)	所在地(県)
八甲田山	1,584	青森県
岩木山	1,625	青森県
白神岳	1,235	青森県
階上岳(種市岳)	740	青森県、岩手県
岩手山	2,038	岩手県
姫神山	1,124	岩手県
早池峰山	1,917	岩手県
五葉山	1,351	岩手県
焼石岳	1,548	岩手県
和賀岳	1,440	岩手県、秋田県
八幡平	1,613	岩手県、秋田県
駒ヶ岳	1,637	秋田県
田代岳	1,178	秋田県
森吉山	1,454	秋田県
太平山	1,170	秋田県
鳥海山	2,236	秋田県、山形県
神室山	1,365	秋田県、山形県

資料) 国立天文台編『理科年表』

## キ 温泉地と湖沼群

北東北の山々は那須火山帯に属し、多くの名湯や秘湯が点在している。実際、温泉地数、湧出量において、北東北三県はいずれも全国のトップテンに名を連ねており、そのトータルは 318 か所、毎分 38 万リットルに達している。

高村光太郎が日本一の湖と称えた十和田湖(透明度 15m)や、ルリ色の湖水をたたえる我が国最深の湖、田沢湖(最大水深 423m)、湖畔に恐山を望む宇曾利山湖等の絶景も、こうした火山のカルデラとして生み出されたものである。

湖としてはほかにも、津軽安東氏の繁栄を支え、湖面の下にその遺跡を眠らせる十三湖、夕日がマテ小屋や漁師の姿を美しいシルエットに変える小川原湖、田沢湖のたつ子との悲哀の伝説を秘め、干拓事業までは琵琶湖に次ぐ面積を誇った八郎潟などがある。

【図表 2-10 : 主な湖】

名 称	面積(km <sup>2</sup> )	最大水深(m)	所在地(県)
小川原湖	62.2	24.0	青森県
十三湖	18.1	3.0	青森県
十和田湖	61.0	327.0	青森県、秋田県
八郎潟	27.7	12.0	秋田県
田沢湖	25.8	423.0	秋田県

資料) 国立天文台編『理科年表』

## ク 平野・盆地

北東北には、沿岸部に青森平野、津軽平野、能代平野、秋田平野、本荘平野があり、内陸部には北上盆地、大館盆地、鷹巣盆地、横手盆地などが点在している。これらによって、可住地面積は北東北3県とも全国トップテンに位置しており、トータルで9.4千km<sup>2</sup>に達している。

## ケ 河川

北東北には、奥羽山脈や白神山地に源流を發する大河川が存在している。例えば、一級水系として津軽平野を流れて十三湖に注ぐ岩木川、工業都市八戸を支える馬淵川、宮城県まで南流する東北最大の河川である北上川、木材や鉱物、米等の舟運により秋田藩の動脈として活用された米代川や雄物川などがある。これらの河川は、北東北の平野や盆地をうるおし、米作地帯としての農業を支える役割を担っている。

また、自然景観として名高い河川として、奥入瀬溪流や薬研溪流などがあげられる。

【図表 2-11：主な河川】

水系名	指定年度	河川数	幹川流路延長 (km)	流域面積 (km <sup>2</sup> )	流域関係県
岩木川	昭和41年	94	102	2,540	青森県
高瀬川	昭和47年	22	64	867	青森県
馬淵川	昭和42年	30	142	2,050	青森県、岩手県
北上川	昭和40年	296	249	10,150	岩手県、宮城県
米代川	昭和41年	85	136	4,100	岩手県、秋田県
雄物川	昭和41年	167	133	4,710	秋田県
子吉川	昭和46年	42	61	1,190	秋田県

資料)『国土統計要覧』

## コ 天然記念物

北東北の天然記念物をみると、豊かな自然環境のもと、白神山地に生息するクマゲラ、下北半島のサル等の動物や岩手山高山植物帯、秋田駒ヶ岳植物群帯等の植物などが多数指定されている。

【図表 2-12：特別天然記念物（国指定）】

区分	青森県	岩手県	秋田県
国指定	<b>【動物】</b> 小湊のハクチョウおよびその渡来地 (青森市、平内町) カモシカ(地域を定めず)	<b>【動物】</b> カモシカ(地域を定めず) <b>【植物】</b> 早池峰山及び薬師岳の高山帯・森林植物群落 (大迫町、遠野市、川井村) <b>【地質鉱物】</b> 根反の大珪化木(一戸町) 夏油温泉の石灰華(北上市) 焼走り熔岩流(西根町)	<b>【動物】</b> カモシカ(地域を定めず) <b>【地質鉱物】</b> 玉川温泉の北投石(田沢湖町)

資料)各県ホームページ

注)( )内の市町村は、所在地を示す。

【図表 2-13：天然記念物（国指定）】

区分	青森県	岩手県	秋田県
国指定	<p>【動物】</p> <p>燕島ウミネコ繁殖地(八戸市)</p> <p>下北半島のサルおよびサル生息北限地(むつ市、下北郡7町村)</p> <p>声良鶏(地域指定なし)</p> <p>軍鶏(地域指定なし)</p> <p>クマガラ(地域指定なし)</p> <p>イヌワシ(地域指定なし)</p> <p>オジロワシ(地域指定なし)</p> <p>オオワシ(地域指定なし)</p> <p>コクガン(地域指定なし)</p> <p>ヒシクイ(地域指定なし)</p> <p>マガン(地域指定なし)</p> <p>ヤマネ(地域指定なし)</p> <p>【植物】</p> <p>ツバキ自生北限地帯(平内町)</p> <p>法量のイチョウ(十和田湖町)</p> <p>縫道石山・縫道石の特殊植物群落(佐井村)</p>	<p>【動物】</p> <p>椿島ウミネコ繁殖地(陸前高田市)</p> <p>三貫島オオミズナギドリ及びヒメクロウミツバメ繁殖地(釜石市)</p> <p>大揚沼のモリアオガエル及びその繁殖地(松尾村)</p> <p>イヌワシ繁殖地(岩泉町)</p> <p>日出島クロコシノウツバメ繁殖地(宮古市)</p> <p>【植物】</p> <p>盛岡石割桜(盛岡市)</p> <p>シダレカツラ(盛岡市)</p> <p>カズグリ自生地(東和町)</p> <p>岩手山高山植物帯(滝沢村)</p> <p>勝源院の逆ガシワ(紫波町)</p> <p>長泉寺の大イチョウ(久慈市)</p> <p>花輪堤ハナショウブ群落(花巻市)</p> <p>華蔵寺の宝珠マツ(陸前高田市)</p> <p>竜谷寺のモリオカシダレ(盛岡市)</p> <p>実相寺のイチョウ(一戸町)</p> <p>藤島のフジ(一戸町)</p> <p>早池峰山のアカエゾマツ自生南限地(川井村)</p> <p>【地質鉱物】</p> <p>蛇ヶ崎(陸前高田市)</p> <p>岩泉湧窟及びコウモリ(岩泉町)</p> <p>館ヶ崎角岩岩脈(大船渡市)</p> <p>崎山の潮吹穴(宮古市)</p> <p>崎山の蠟燭岩(宮古市)</p> <p>妹帯・小鳥谷・根反の珪化木地帯(一戸町)</p> <p>浪打峠の交叉層(一戸町)</p> <p>葛根田の大岩屋(雫石町)</p> <p>樋口沢ゴトランド紀化石産地(大船渡市)</p> <p>安家洞(岩泉町)</p>	<p>【動物】</p> <p>秋田犬(地域を定めず)</p> <p>ザリガニ生息地(大館市)</p> <p>声良鶏(地域を定めず)</p> <p>軍鶏(地域を定めず)</p> <p>比内鶏(地域を定めず)</p> <p>クマガラ(地域を定めず)</p> <p>イヌワシ(地域を定めず)</p> <p>オジロワシ(地域を定めず)</p> <p>オオワシ(地域を定めず)</p> <p>コクガン(地域を定めず)</p> <p>ヒシクイ(地域を定めず)</p> <p>マガン(地域を定めず)</p> <p>ヤマネ(地域を定めず)</p> <p>【植物】</p> <p>ツバキ自生北限地帯(男鹿市)</p> <p>秋田駒ヶ岳高山植物帯(田沢湖町)</p> <p>長走風穴高山植物群落(大館市)</p> <p>芝谷地湿原植物群落(大館市)</p> <p>角館のシダレザクラ(角館町)</p> <p>桃洞・佐渡のスギ原生林(森吉町、阿仁町)</p> <p>【地質鉱物】</p> <p>鯛状珪石および噴泉塔(雄勝町)</p> <p>象潟(象潟町)</p> <p>筑紫森岩脈(河辺町)</p> <p>千屋断層(千畑町)</p> <p>【地質鉱物及び植物】</p> <p>鳥海山獅子ヶ鼻湿原植物群落及び新山溶岩流末端崖と湧水群(象潟町)</p>

資料) 各県ホームページ

注) ( )内の市町村は、所在地を示す。

【図表 2-14：天然記念物（県指定）】

区分	青森県	岩手県	秋田県
県指定	<p>【動物】</p> <p>十三湖の白鳥(市浦村)</p> <p>大湊湾の白鳥(むつ市)</p> <p>小川原湖のハクチョウ(三沢市・上北郡)</p> <p>藤崎のハクチョウ(藤崎町)</p> <p>横浜町のゲンジボタルおよびその生息地(横浜町)</p> <p>寒立馬とその生息地(東通村)</p> <p>【植物】</p> <p>茨島のトチノキ(階上町)</p> <p>関の杉(深浦町)</p> <p>北金ヶ沢のイチョウ(深浦町)</p> <p>大杉(弘前市)</p> <p>銀南木(七戸町)</p> <p>桑の木(三戸町)</p> <p>うつぎ(階上町)</p> <p>天狗杉(南部町)</p> <p>爺杉(名川町)</p> <p>法光寺参道松並木(名川町)</p> <p>りんごの樹(柏村)</p> <p>カヤの木(南郷村)</p> <p>イチイ(板柳町)</p> <p>関根の松(三戸町)</p> <p>モミの木(十和田湖町)</p> <p>クスギ(十和田湖町)</p> <p>妙堂寺のモミの木(トドロポ) (鶴田町)</p> <p>妙経寺のカヤの木(黒石市)</p> <p>燈明杉(弘前市)</p> <p>根岸の大いちょう(百石町)</p> <p>わむら(上村)のカシワの木(倉石村)</p> <p>向外瀬のモクゲンジ(ゼンダンバナボダイジュ) (弘前市)</p> <p>天満宮のシダレザクラ(弘前市)</p> <p>鬼沢のカシワ(鬼神腰掛柏) (弘前市)</p> <p>百沢街道および高岡街道の松並木(岩木町)</p> <p>【地質鉱物】</p> <p>赤根沢の赤岩(今別町)</p> <p>金木町玉鹿石(金木町)</p>	<p>【動物】</p> <p>白沼のモリアオガエル繁殖地</p> <p>佐賀部のウミネコ繁殖地</p> <p>【植物】</p> <p>田野畑村シロバナシクナゲ群落(田野畑村)</p> <p>タブの木自生地(山田町)</p> <p>山岸のカキツバタ群落(盛岡市)</p> <p>駒形神社及び水沢公園のヒガン系桜群(水沢市)</p> <p>湯田湯川沼の浮島(湯田町)</p> <p>小鳥崎の大カヤ(北上市)</p> <p>常膳寺の姥杉(陸前高田市)</p> <p>大船渡の三面椿(大船渡市)</p> <p>胆沢川流域ユキツバキ群落(胆沢町)</p> <p>イワタバコ北限自生地(田野畑村)</p> <p>北笹間のならかしわ(花巻市)</p> <p>大沢の臥竜梅(山田町)</p> <p>玉山のシダレアカマツ(玉山村)</p> <p>大籠のカンボクエゴノキ(藤沢町)</p> <p>薄衣の笠マツ(川崎村)</p> <p>猿沢の幕カヤ(大東町)</p> <p>遠野のモリオカシダレ(遠野市)</p> <p>青笹のイブキ(遠野市)</p> <p>若柳のヒメカユウ群落(胆沢町)</p> <p>霧畑のケヤキ群(山形村)</p> <p>普門寺のサルスベリ(陸前高田市)</p> <p>早池峰神社の夫婦イチイ(遠野市)</p> <p>遠野のエゾエノキ(遠野市)</p> <p>【地質鉱物】</p> <p>藤里の硅化木(江刺市)</p> <p>コランダム産地(大東町)</p> <p>内間木洞及び洞内動物群(山形村)</p> <p>田野畑の白亜紀化石産地(田野畑村)</p> <p>山王岩(田老町)</p> <p>【地質鉱物及び植物】</p> <p>天狗森の夏氷山風穴(安代町)</p>	<p>【動物】</p> <p>金八鶏(地域を定めず)</p> <p>スズムシ群棲地(五城目町)</p> <p>大須郷のウミウ繁殖地(象潟町)</p> <p>男鹿のコウモリ生息地(蝙蝠窟・孔雀窟) (男鹿市)</p> <p>トミヨ及びイバラトミヨ生息地(平鹿町)</p> <p>【植物】</p> <p>しだれ桜(協和町)</p> <p>榎(男鹿市)</p> <p>いちょう(二ツ井町)</p> <p>杉(鹿角市)</p> <p>枝垂桜(西仙北町)</p> <p>檜(藤里町)</p> <p>いちょう(藤里町)</p> <p>白椿(金浦町)</p> <p>タブの群落(象潟町)</p> <p>カスミ桜(大内町)</p> <p>イチイ(鳥海町)</p> <p>千本カツラ(鳥海町)</p> <p>ユキツバキ自生北限地帯(田沢湖町)</p> <p>青サギ群生地(男鹿市)</p> <p>浅舞のケヤキ(平鹿町)</p> <p>堀切のイチョウ(大内町)</p> <p>木地山のコケ沼湿原植物群落(皆瀬村)</p> <p>水沢のアキタスギ天然林(二ツ井町)</p> <p>金浦のタブ林(金浦町)</p> <p>鬢垂のシダレグリ(協和町)</p> <p>鳥海ムラスギ原生林(矢島町)</p> <p>唐松神社のスギ並木(協和町)</p> <p>前川のタブノキ(金浦町)</p> <p>金浦のマルバグミ(金浦町)</p> <p>善明庵のマツ(横手市)</p> <p>岩館のイチョウ(東由利町)</p> <p>母体のモミ林(能代市)</p> <p>真山寺の乳イチョウ(西木村)</p> <p>法内の八本スギ(東由利町)</p> <p>金峰神社のスギ並木(象潟町)</p> <p>女潟湿原植物群落(秋田市)</p> <p>梅内のイチイ(二ツ井町)</p> <p>筏の大スギ(山内村)</p> <p>玉川のヒメカイウ群生地(田沢湖町)</p>

資料) 各県ホームページ

注) ( )内の市町村は、所在地を示す。

## (2) 人文資源

北東北は、地域の歴史や自然に裏打ちされた街並みや建造物、伝統工芸、まつりや行事などを数多く有している。

また、各分野において多くの人材を輩出するとともに、郷土を愛するという意識が現在も強く残されている。

そういった現代日本に失われつつあるものが、失われずにある地域が北東北であるということができる。このことを、貴重な地域の特性として、アイデンティティのより所として再認識していくことが重要である。

### ア 歴史的な街並み

地域の文化を示す素材の一つに、風土に根ざした街並みをあげることができる。

青森県では、弘前城跡を始め歴史的な神社仏閣等を数多く保存する弘前市や、藩政時代のプロムナードともいべき「こみせ」と白壁の土蔵が美しい調和をみせる黒石市の街並み、岩手県では「南部曲がり家」を残し、柳田國男が「平地人を戦慄せしめよ」と記した民話の里、遠野市や気仙大工の技を今に伝える陸前高田市の街並みがその代表とされている。

また、秋田県では、武家屋敷とシダレザクラや桜並木が融合する角館町、藩政時代に城下町として発展した横手市などがあげられる。

特に青森県弘前市仲町、岩手県金ヶ崎町城内諏訪小路、秋田県角館町角館の武家屋敷などの街並みは、文化保護法に基づく「重要伝統的建造物保存地区」として選定を受けている。

【図表 2-15：重要伝統的建造物群保存地区】

県名	保存地区名	内容
青森県	弘前市仲町伝統的建造物群保存地区	城下町の武家屋敷などの街並み
岩手県	金ヶ崎町城内諏訪小路伝統的建造物群保存地区	武家屋敷などの街並み
秋田県	角館町角館伝統的建造物群保存地区	武家屋敷などの街並み

資料)各県ホームページ

### イ 重要文化財

北東北の重要文化財のうち、建造物についてみると、国指定の文化財として、青森県には最勝院五重塔、弘前城天守、長勝寺三門、長勝寺御影堂、津軽家霊屋、旧第五十九銀行本店本館（以上弘前市）などの「重要文化財」がある。

岩手県では、中尊寺金色堂や経蔵（平泉町）などの「国宝」のほか、正法寺（水沢市）や天台寺（浄法寺町）、旧小笠原家（東和町）などが、国の「重要文化財」に指定されている。

秋田県では、旧奈良家住宅や赤れんが郷土館、藤倉水源地水道施設（以上秋田市）、

旧阿仁鉱山外国人官舎（阿仁町）、古四王神社本殿（大曲市）などが国指定の「重要文化財」となっています。

このほか、絵画や彫刻、工芸、古文書、考古資料など、北東北の足取りを今に伝える多くの「国宝」、「重要文化財」がある。

【図表 2-16：国宝】

	青森県	岩手県	秋田県
国宝	櫛引八幡宮(八戸市) 赤糸威鎧 兜、大袖付 白糸威褌取鎧 兜、大袖付	中尊寺金色堂(平泉町) 付 棟札 納札 旧組高欄 古材 旧飾金具 紺紙著色金光明最勝王経(平泉町) 金字宝塔曼荼羅図 中尊寺経蔵堂内具(平泉町) 木造礼盤 螺鈿平塵案 磬架 付 孔雀文磬 螺鈿平塵燈台 孔雀文磬(平泉町) 螺鈿八角須弥壇(平泉町) 中尊寺金色堂堂内具(平泉町) 金色堂諸像及び天蓋 木造礼蓋 螺鈿平塵案 磬架 付孔雀文磬 金銅幡頭 金銅華鬘(迦陵頻伽文) 紺紙金字一切経(内15卷金銀文書経)(平泉町) 付 漆塗箱	線刻千手観音等鏡像 (中仙町)

資料) 各県ホームページ

注) ( )内の市町村は、所在地を示す。

【図表 2-17：重要文化財（建造物）】

区分	青森県	岩手県	秋田県
国指定	<p>最勝院五重塔(弘前市)                      岩木山神社楼門(岩木町)                      岩木山神社拝殿(岩木町)                      岩木山神社本殿、奥門、瑞垣、中門(岩木町)                      弘前八幡宮本殿、唐門(弘前市)                      長勝寺三門(弘前市)                      弘前城 天守、二の丸辰巳櫓、二の丸末申櫓、二の丸丑寅櫓、二の丸南門、二の丸東門、三の丸追手門、北の郭北門(弘前市)                      誓願寺山門(弘前市)                      円覚寺薬師寺堂内厨子(深浦町)                      弘前城三の丸東門(弘前市)                      南部利康霊屋(南部町)                      津軽為信霊屋(弘前市)                      東照宮本殿(弘前市)                      熊野奥照神社本殿(弘前市)                      旧第五十九銀行本店本館(弘前市)                      石場家住宅(弘前市)                      高橋家住宅(黒石市)                      旧笠石家住宅(十和田湖町)                      江渡家住宅(五戸町)                      旧平山家住宅主屋、表門(五所川原市)                      弘前学院外人宣教師館(弘前市)                      清水寺観音堂(八戸市)                      津軽家霊屋 環月臺、碧叡臺、明鏡臺、白雲臺、凌雲臺(弘前市)                      長勝寺御影堂(弘前市)                      櫛引八幡宮本殿、旧拝殿、末社神明宮本殿、末社春日社本殿、南門(八戸市)                      長勝寺本堂、庫裏(弘前市)                      革秀寺本堂(弘前市)                      旧弘前借行社(弘前市)</p>	<p>大長寿院経蔵                      付 棟札(平泉町)                      金色堂覆堂(平泉町)                      願成就院宝塔(平泉町)                      釈尊院五輪塔(平泉町)                      旧菅野家住宅                      主屋 付 色々御手傳物被下申候覚え帳(享保13年1月)                      表門 付 棟札 享保5年4月15日立の記がある。(北上市)                      旧後藤家住宅(江刺市)                      旧小笠原家住宅(東和町)                      旧中村家住宅(主家・土蔵・はかりば)(盛岡市)                      旧菊池家住宅(遠野市)                      伊藤家住宅(東和町)                      藤野家住宅(盛岡市)                      佐々木家住宅(盛岡市)                      正法寺(付 鐘楼堂1棟)(水沢市)                      日高神社本殿(水沢市)                      毘沙門堂(東和町)                      多聞院伊澤家住宅 付 家相図2枚(北上市)                      天台寺(付 棟冊11枚)(浄法寺町)                      岩手大学農学部(旧盛岡高等農林学校) 旧本館 門番所 附・旧正門 一所(盛岡市)                      岩手銀行(旧盛岡銀行)旧本店本館(盛岡市)                      白山神社能舞台(平泉町)</p>	<p>古四王神社本殿(大曲市)                      神明社観音堂(飯田川町)                      三輪神社本殿、境内社須賀神社本殿(羽後町)                      旧奈良家住宅(秋田市)                      赤神社五社堂(中央堂)内厨子(男鹿市)                      嵯峨家住宅 主屋・北米蔵(秋田市)                      大山家住宅(八竜町)                      土田家住宅(矢島町)                      鈴木家住宅 主屋・土蔵(羽後町)                      草薙家住宅 主屋・土間(田沢湖町)                      波宇志別神社神楽殿(大森町)                      旧黒沢家住宅 主屋・表門・土蔵・米蔵・木小屋(秋田市)                      天徳寺 本堂・書院・山門・総門(秋田市)                      佐竹家霊屋(秋田市)                      八幡神社                      正八幡宮本殿・若宮八幡宮本殿(大館市)                      赤神社五社堂                      三の宮堂・客人権現堂・赤神権現堂・八王子堂・十禅師堂(男鹿市)                      旧阿仁鉱山外国人官舎(阿仁町)                      藤倉水源地水道施設(秋田市)                      旧秋田銀行本店本館(秋田市)                      康楽館(小坂町)                      旧小坂鉱山事務所(小坂町)</p>
県指定	<p>久祥院殿位牌堂(弘前市)                      三尊仏及びその厨子堂(弘前市)                      桧山御前五輪塔(三戸町)                      青銅塔婆(今別町)                      高照神社本殿、中門、随神門、拝殿及び幣殿(岩木町)                      南部利直霊屋(南部町)                      法眼寺鐘楼堂(黒石市)                      八戸城角御殿表門(八戸市)                      見町観音堂(七戸町)                      旧岩田家住宅(弘前市)                      稻荷神社本殿(三戸町)                      南宗寺山門(八戸市)                      新羅神社本殿、拝殿(八戸市)                      旧八戸小学講堂(八戸市)                      旧東興義塾外人教師館(弘前市)                      旧弘前市立図書館(弘前市)                      熊野宮本殿(弘前市)                      日本聖公会弘前昇天教会教会堂(弘前市)                      厳鬼山神社本殿(弘前市)                      法眼寺本堂(黒石市)                      旧海軍大湊要港部水源地堰堤(むつ市)                      旧青森県尋常中学校本館(弘前市)                      日本基督教団弘前教会教会堂(弘前市)                      飯詰八幡宮本殿(五所川原市)                      袋宮寺本堂(弘前市)                      円明寺本堂(弘前市)                      報恩寺本堂(弘前市)                      猿賀神社本殿(尾上町)                      本行寺護国堂(弘前市)                      寶福寺本堂(五戸町)                      野辺地八幡宮本殿、末社金刀比羅宮本殿(野辺地町)                      青岩寺本堂(七戸町)                      旧津島家住宅(金木町)                      旧園子家住宅(倉石村)                      南部安信の墓(宝篋印塔)(南部町)                      旧坪田家住宅(浪岡町)</p>	<p>鹿島神社宮殿(北上市)                      中尊寺本坊表門(平泉町)                      端山神社(祖霊舎)(水沢市)                      千葉家住宅門(水沢市)                      武家住宅(後藤新平旧宅)(水沢市)                      早池峰神社本殿(大迫町)                      宝持院山門(花泉町)                      普門寺三重塔(陸前高田市)                      法泉院小前沢坊庫裡(平泉町)                      熊野神社本殿(東和町)                      薬師堂(東和町)                      旧岩谷堂共立病院(江刺市)                      木津屋池野籐兵衛家住宅付土蔵(盛岡市)                      旧鈴木家住宅(一関市)                      保性院廟厨子(一関市)                      旧後藤正治郎家住宅(前沢町)                      白山神社本殿(北上市)                      丹内山神社本殿 付 厨子(東和町)                      八幡神社本殿(千厩町)                      旧朴館家住宅(一戸町)                      西方寺毘沙門堂 付 寛文3年銘・棟札(一戸町)                      八幡神社本殿 付 棟札(胆沢町)                      於呂門志胆沢川神社厨子(旧伊達宗章霊廟厨子)(胆沢町)                      麓山神社本殿 付 棟札(江刺市)                      智福毘沙門堂 付 棟札(江刺市)                      千養寺観音堂(水沢市)                      曾慶熊野神社本殿(大東町)                      摺沢八幡神社本殿(大東町)                      山谷観音堂(遠野市)                      鞍迫観音堂(宮守村)                      村上家住宅(千厩町)                      太田家住宅(太幸邸)(前沢町)</p>	<p>彌高神社(秋田市)                      八幡神社本殿(矢島町)                      大国主神社(西木村)                      石造五重塔(大曲市)                      増川八幡神社宮殿(男鹿市)                      北鹿ノリストス正教会聖堂(大館市)                      永泉寺山門(本荘市)                      唐松神社奥殿(協和町)                      旧雄勝郡会議事堂(湯沢町)                      薬師堂宮殿(矢島町)                      旧日新館(横手市)                      日吉八幡神社(秋田市)                      黒沢家住宅(羽後町)                      浄明寺山門(能代市)                      宝篋印塔(男鹿市)                      多宝院(能代市)                      雲巖寺山門(角館町)                      八幡秋田神社本殿(秋田市)                      旧松本家住宅主屋(角館町)                      菅生橋(皆瀬村)</p>

資料) 各県ホームページ

注) ( )内の市町村は、所在地を示す。

【図表 2-18 : 重要文化財（絵画）】

区分	青森県	岩手県	秋田県
国指定			絹本着色当麻曼荼羅図(大曲市) 絹本着色千山万水図(渡邊華山筆) (秋田市) 絹本着色不忍池図(小田野直武筆) (横手市) 絹本着色唐太宗花鳥図(小田野直武筆) (横手市)
県指定	世界地図屏風(青森市) 親鸞上人連座御影(鯉ヶ沢町) 阿弥陀如来像(鯉ヶ沢町) 絹本着色当麻曼荼羅図(弘前市)	絹本着色開山良韶画像(水沢市) 絹本着色愛染明王画像(陸前高田市) 漆絵立花図(大絵馬)(浄法寺町) 絹本着色十六羅漢像(水沢市) 仏涅槃図(遠野市) 十三仏(遠野市) 聖観音菩薩画像(江刺市)	稚児文珠像(象潟町) 普賢菩薩像(大曲市) 白雲上人画像(六郷町) 十六羅漢像(秋田市) 紙本着色秋田風俗絵巻(秋田市) 絹本着色千手観音像(仁賀保町) 金剛胎蔵両界曼荼羅(男鹿市) 絹本着色芍薬花籠図 直武筆(横手市) 絹本着色象潟図屏風(象潟町) 紙本着色白雲筆真景帖および彩絵方 (六郷町) 絹本阿弥陀来迎図(比内町) 秋田蘭画「岩に牡丹図」(大曲市) 紙本墨画寒山拾得(秋田市) 絹本着色十六善神(秋田市) 絹本着色弘法大師像(男鹿市) 小田野直武筆写生帖(横手市) 鶴之図(沈南蘋筆)(横手市) 釈迦三尊像図(秋田市) 絹本着色松に唐鳥図(佐竹曙山筆)(森吉町) 紙本着色ファン・ロイエン筆花鳥図模写(横手市)

資料)各県ホームページ

注) ( )内の市町村は、所在地を示す。

【図表 2-19 : 重要文化財（彫刻）】

区分	青森県	岩手県	秋田県
国指定	木造阿弥陀如来坐像(むつ市常念寺) 木造阿弥陀如来坐像(大鱒町大円寺)	木造一字金輪坐像 付 木造天蓋 (平泉町中尊寺) 木造聖観音立像(浄法寺町天台寺) 木造十一面観音立像(浄法寺町天台寺) 木造大日如来坐像(平泉町瑠璃光院) 木造毘沙門天立像 付 木造二鬼坐像 (東和町毘沙門堂) 木造伝吉祥天立像(東和町毘沙門堂) 木造阿弥陀如来坐像(花巻市勝行院) 木造毘沙門天立像(北上市万福寺) 木造二天王立像(北上市万福寺) 木造阿弥陀如来坐像(平泉町中尊寺) 木造大日如来坐像(平泉町金剛院) 木造千手観音立像(平泉町観音院) 木造薬師如来坐像(平泉町金色院) 木造薬師如来坐像(平泉町願成就院) 木造薬師如来坐像(水沢市黒石寺) 木造僧形坐像(水沢市黒石寺) 木造兜跋毘沙門天立像(江刺市愛宕神社) 能面延命冠者(平泉町中尊寺) 木造騎獅文殊菩薩及脇侍像(経蔵安置) (平泉町大長寿院) 木造四天王立像(水沢市黒石寺)	銅造阿弥陀如来坐像(秋田市全良寺)

<p>県指定</p>	<p>木彫阿弥陀如来立像(弘前市西光寺) 獅子頭(三戸町個人) 舞楽面(岩木町岩木山神社) 木彫阿弥陀如来立像(青森市当古寺) 薬師如来三門本尊(弘前市長勝寺) 津軽為信木像(弘前市長勝寺) 十一面観音立像(南部町恵光院) 木彫阿弥陀如来立像(野辺地町海中寺) 木彫十一面観音立像(弘前市袋宮寺) 木彫十一面観音立像(佐井村長福寺) 十一面観音像(田子町個人) 弥勒菩薩像(田子町個人) 阿弥陀如来像(岩木町吉祥寺) 十一面観音像(弘前市西福寺) 地藏像(弘前市西福寺) 十一面観音像(田舎館村 村) 観世音菩薩像(三厩村義経寺) 如来立像(むつ市常楽寺) 菩薩坐像(蓬田村正法院) 菩薩坐像(寺伝薬師如来像) (鱒ヶ沢町延寿寺) 菩薩坐像(平賀町神明宮) 舞楽面(八戸市櫛引八幡宮) 十一面観世音菩薩座像(三戸町観福寺) 聖観世音菩薩立像(下田町聖福寺) 阿弥陀如来立像(三戸町悟真寺) 円空作木造男神像(小泊村個人) 円空作木造観世音菩薩坐像 (浪岡町西光院) 円空作木造観世音菩薩坐像 (浪岡町元光寺) 木造舞楽面(青森市大星神社) 木造能面(青森市大星神社)</p>	<p>木造如意輪観音坐像(水沢市正法寺) 木造僧形坐像(水沢市正法寺) 銅造菩薩立像(千厩町個人) 木造薬師如来立像(千厩町大光寺) 木造如来坐像(大船渡市長谷寺) 木造阿弥陀如来坐像(住田町光勝寺) 木造聖観音立像(一関市永泉寺) 木造十一面観音立像(花泉町大祥寺) 木造釈迦三尊坐像(北上市如意輪寺) 木造神像(北上市万蔵寺) 木造十一面観音立像(玉山村東楽寺) 木造来迎阿弥陀及び菩薩像 (東山町二十五菩薩像保存委員会) 木造詞梨菩提母像(平泉町大乘院) 木造薬師如来坐像(一関市願成寺) 木造聖観音立像(室根村南流神社) 銅造阿弥陀如来立像(江刺市松岩寺) 木造薬師如来坐像(軽米町徳楽寺) 木造脇侍菩薩立像(軽米町徳楽寺) 木造十一面観音立像(紫波町個人) 木造十一面観音立像(江刺市愛宕神社) 木造毘沙門天三像(江刺市愛宕神社) 獅子頭(権現さま)(宮古市黒森神社) 木造十一面観音菩薩立像(北上市白山神社) 木造男神坐像(北上市白山神社) 木造聖観音坐像(大東町東川院) 木造阿弥陀如来立像(藤沢町藤勢寺) 木造毘沙門天立像(紫波町正音寺) 木造降三世明王像(紫波町正音寺) 木造軍荼利明王像(紫波町正音寺) 木造大威徳明王像(紫波町正音寺) 木造金剛夜叉明王像(紫波町正音寺) 木造観音菩薩坐像(住田町光勝寺) 木造勢至菩薩坐像(住田町光勝寺) 木造蔵王権現像(北上市白山神社) 木造薬師如来坐像(衣川村個人) 木造薬師如来坐像(平泉町毛越寺) 木造阿弥陀如来立像(花巻市延妙寺) 木造仁王像(玉山村東楽寺) 木造十一面観音菩薩立像 付 木造立像(東楽寺) 木造伝阿弥陀如来立像(頭後補) (東和町毘沙門堂) 木造伝聖観音菩薩坐像(陸前高田市普門寺) 木造十一面観音菩薩立像(大船渡市長谷寺) 木造十一面観音菩薩立像(東和町凌雲寺) 木造不動明王坐像(平泉町西光寺) 木造日光菩薩立像(水沢市黒石寺) 木造月光菩薩立像(水沢市黒石寺) 木造十二神将像(水沢市黒石寺) 木造薬師如来坐像(北上市万蔵寺) 木造十一面観音立像(北上市万蔵寺) 木造男神立像(北上市万蔵寺) 木造女神立像(北上市万蔵寺) 木造聖観音立像(北上市万蔵寺) 木造不動明王立像(北上市個人) 木造観音菩薩坐像(平泉町白王院) 木造男神坐像(平泉町毛越寺) 木造阿弥陀如来坐像(平泉町白王院) 木造伝稻荷神像(平泉町宝積院) 銅造不動明王立像(平泉町寿命院) 木造伝薬師如来坐像(平泉町正善院) 木造阿弥陀如来坐像(平泉町寿徳院) 木造熊野神像(平泉町金剛院) 木造熊野神両脇立像(平泉町金剛院) 木造薬師如来立像(浄法寺町天台寺) 木造伝広目天立像(浄法寺町天台寺) 木造伝多聞天立像(浄法寺町天台寺) 木造伝吉祥天立像(浄法寺町天台寺) 木造菩薩形坐像(浄法寺町天台寺) 銅造聖観音立像(盛岡市源勝寺) 木造地藏菩薩立像(西根町聖福寺) 木造七仏薬師如来立像(紫波町個人) 獅子頭(権現さま)(久慈市個人) 木造阿弥陀如来立像(水沢市個人) 木造釈迦如来坐像(江刺市寶城寺) 木造地藏菩薩坐像(江刺市光明寺) 木造仁王像(東和町凌雲寺) 木造十一面観音立像(東和町(宗)丹内山神社) 舞楽面(浄法寺町天台寺) 木造釈迦三尊坐像(水沢市(宗)正法寺) 木造地藏菩薩半跏像 付 木造二天立像(花泉町大門神社)</p>	<p>聖徳太子像(秋田市豊平神社) 大日如来像(秋田市泉福院) 聖観世音菩薩像(中仙町小沼神社) 十一面観世音菩薩像(中仙町小沼神社) 聖観世音菩薩像(大曲市個人) 聖観世音菩薩像(男鹿市赤神神社) 十一面観世音菩薩像(男鹿市赤神神社) 石製狛犬(男鹿市赤神神社) 愛染明王像(秋田市道川神社) 金剛夜叉明王像(秋田市道川神社) 不動明王像(秋田市道川神社) 毘沙門天像(秋田市道川神社) 舞楽二ノ舞面(西仙北町円満寺) 本尊阿弥陀如来 脇士(羽後町個人) 薬師如来坐像(男鹿市真山神社) 木造岩城伊予守重隆公坐像(岩城町竜門寺) 木造弥陀・薬師・勢至(西木村大国主神社) 木造薬師如来立像(横手市観音寺) 懸仏(薬師十二神将鉄製鋳出) (横手市観音寺) 木造阿弥陀如来立像(増田町満福寺) 木造弥陀三尊(阿弥陀仏・観世音菩薩・ 勢至菩薩)(鹿角市恩徳寺) 金銅聖観音立像(横手市正伝寺) 木造聖観音(秋田市歙喜寺) 懸仏(稲川町個人) 懸仏(皆瀬村個人) 懸仏(稲川町個人) 木造十一面自在観音(湯沢市土沢神社) 女神像(湯沢市白山神社) 神像(横手市旭岡山神社) 銅造阿弥陀如来立像(秋田市来迎寺) 木造聖観音立像(大内町金峰神社) 木造十二神将(横手市観音寺) 木造多聞天立像(十文字町古四王神社) 木造阿弥陀如来立像(雄勝町誓願寺) 銅造十一面観音立像(秋田市大悲寺) 木造僧形頭部(中仙町小沼神社) 木造薬師如来寄木漆箔坐像(男鹿市長楽寺) 木造狛犬(象潟町金峰神社) 木造十一面観音菩薩立像(秋田市大悲寺) 木造観音菩薩立像(象潟町金峰神社) 木造蔵王権現立像(象潟町金峰神社) 木造阿弥陀如来坐像(横手市桂徳寺) 翁面(象潟町浄専寺) 二の舞面(能代市龍泉寺) 木造十一面観音菩薩立像(能代市龍泉寺) 木造薬師如来坐像(男鹿市増川八幡神社) 木造阿弥陀如来坐像(鷹巣町糠沢部落) 金銅造薬師如来立像(能代市龍泉寺) 木造獅子頭(協和町唐松山天日宮) 木造十一面観音菩薩立像(雄勝町愛宕神社) 銅造阿弥陀如来立像(鹿角市円福寺)</p>
------------	---	--	--

資料) 各県ホームページ  
注) ( )内の市町村は、所在地を示す。

【図表 2-20 : 重要文化財（工艺品）】

区分	青森県	岩手県	秋田県
国指定	紫糸威肩白浅黄鍔 兜、大袖付(八戸市) 唐櫃入白糸威肩赤胴丸 兜、大袖付 (八戸市) 兜 浅黄威肩赤大袖二枚付(八戸市) 太刀 銘友成作(岩木町) 太刀 銘真守(岩木町) 銅鐘(弘前市) 刀 無名伝来国光(弘前市) 太刀 銘成高、綾包太刀拵(弘前市)	刀 無銘 伝来国長作(盛岡市) 銅鐘(盛岡市) 太刀 銘 助真(盛岡市) 金銅釈迦如来像御正体(平泉町) 蓮華唐草文蒔絵大壇(平泉町) 金銅千手観音像御正体(平泉町) 金銀装舎利壇(平泉町) 銅竜頭(北上市) 銅錫杖頭(北上市) 椿彫木彩漆笈(平泉町) 鉄五輪塔地輪(花泉町) 鉄樹(珊瑚樹・橙樹)(平泉町) 白地天鷲絨陣羽織(盛岡市) 緋地羅紗合羽(盛岡市)	太刀 銘 正恒(羽後町) 銅錫杖頭 正元元年、信阿弥陀仏の 刻銘がある(横手市)

<p>鎧櫃(八戸市) 古瀬戸瓶子(青森市) 鰐口 正長二年銘(平賀町) 鰐口 至徳二年銘(深浦町) 釣燈籠(岩木町) 日本刀 銘相州住綱廣(岩木町) 津輕信政着用具足(岩木町) 短刀 銘波岡森宗(弘前市) 梵鐘(五所川原市) 日本刀 銘津輕主為相州綱廣 呼下作之(弘前市) 日本刀 無銘伝備中古青江貞次作 (青森市) 鰐口 慶長九年奉納銘(弘前市) 日本刀 銘陸奥大椽橋盛宗(八戸市) 短刀 銘奥州津輕住国廣(弘前市) 日本刀 銘奥觀壽藤原吉廣(八戸市) 日本刀 銘奥觀壽藤原吉廣(金木町) 金梨子地牡丹紋散蒔繪糸卷太刀拵 (平賀町) 日本刀 銘吉治郎紀正賀鍔外濱沙 鐵作之(むつ市) 劍 銘以外濱沙鐵紀正賀護鑑造(むつ市) 鰐口 応永十二年奉納銘(八戸市) 日本刀 銘備州長船兼光(八戸市) 金梨子地牡丹紋散蒔繪衛府太刀拵 (黒石市) 日本刀 銘津輕住安宗(板柳町) 津輕塗(弘前市) 高照神社刀剣類(岩木町) 津輕漆塗手板(弘前市)</p>	<p>金銅薬師如来像御正体(花泉町) 桐竹文綾九条袈裟 付 包裂等付属品(水沢市) 銅鰐口(浄法寺町) 銅鰐口(大東町) 銅鰐口(陸前高田市) 懸 仏(御正体)(花泉町) 懸 仏 付 宮殿厨子(大船渡市) 刀 銘 月 山 應永三年八月 日(北上市) 脇指 銘 新藤原義 延宝八年二月吉日 (盛岡市) 花菖蒲に蝶図鐔 銘 盛岡住橋孝家造 (盛岡市) 太刀 銘 奥州南部盛岡住新藤原義正 柄 元文元丙辰 年八月 日謹造之(盛岡市) 脇指 銘 手柄山甲斐守正繁 文化三年二月 日 如水如雪 刀身銘 應一関侯需造(盛岡市) 短刀 銘 平安城長吉 付 丸に向かい 鶴紋散合口拵(盛岡市) 雲龍図鐔 銘 岩鷲山麓住 月館源知道製 (盛岡市) 彫透柄の横刀(平泉町) 立鼓柄の横刀(平泉町) 金銅六器 鉢(平泉町) 金銅六器 受皿(平泉町) 真鍮戒体箱(平泉町) 短刀 銘 奥州舞草光長(江刺市) 刀 銘 新藤原義國(釜石市) 金銅五鈷杵(平泉町) 鍍銀柄香炉(平泉町) 線刻五尊像鏡(端花双鳳八棧鏡)(西根町) 金銅五鈷杵(平泉町) 梵鐘(康永二年七月日鑄師藤原助信 の銘がある)(平泉町) 雷文地椿彫木彩漆笈(平泉町) 牡丹彫木彩漆笈(平泉町) 金銅装勝軍地蔵等文笈(平泉町) 太刀 銘 永和二年八月 日寶寿(遠野市) 銅双雀鏡(紫波町) 銅菊花双雀鏡(紫波町) 銅秋草双雀鏡(紫波町) 銅梅花鏡(紫波町) 金銅懸仏(紫波町) 銅三尊像懸仏(江刺市) 鉄賽銭鉢(浄法寺町) 鉄木目鍛菊花鐔(盛岡市) 銀本小札紫糸威二枚胴具足 兜、大袖、 小具足付 付鎧櫃 1合(盛岡市) 鯨尾兜(盛岡市) 刀 銘 奥州舞草友長(盛岡市) 刀 銘 新藤原義國(盛岡市) 槍 銘 濃州之住長俊(盛岡市) 金装家紋散衛府太刀 鞘 銘 関古 鶴齋(花押)(遠野市) 源為朝流瀆の図鐔 銘 君万蔵就壽(花押) (遠野市) 刀 銘 新藤原國義(江刺市) 孔雀石微塵塗鞘大小拵(盛岡市) 竹図鐔(盛岡市) 藍革威胴丸 兜、大袖、小具足付 桶側二枚胴具足 兜、大袖、小具足付 (花巻市) 卯花威紅羅紗地唐獅子牡丹文二枚 胴具足 兜、大袖、小具足付(盛岡市) 唐冠兜(紫波町) 太刀 無銘 伝山城(盛岡市) 脇指 無銘 新藤原義(盛岡市) 紺糸威最上胴具足(盛岡市) 短刀 銘 奥州津住森宗(盛岡市) 金銅製前立(大東町) 緋威二枚胴具足(葛巻町) 黒羅紗地唐獅子牡丹文二枚胴具足(盛岡市) 丸に石畳紋透し鐔(盛岡市) 箒(雫石町) 鉄錆地十二枚張兜鉢(盛岡市) 金時絵繁駒絵馬(平泉町) 金時絵獅子手箱(平泉町) 鉦鼓付懸架 撞木(江刺市) 鉦鼓(江刺市) 金銅聖観音坐像懸仏(江刺市) 劍(江刺市) 雉子尾雌雄御太刀(盛岡市) 鷹頭御陳太刀(花巻市) 鳳凰御陳太刀(花巻市) 前装式火繩銃(差取棒鉄砲) 付 鉄砲由緒書 土井利勝書状(盛岡市) 南部家伝来打毬装束 伝 下着、 肌着、指貫、腕貫(盛岡市) 南部家伝来陣羽織 白羅紗地日の出紋陣羽織 白羅紗地陣羽織 緑羅紗地陣羽織 茶羅紗地陣羽織(盛岡市) 金小札茶糸威二枚胴具足付鎧櫃(盛岡市)</p>	<p>涅槃図(秋田市) 陣幕(六郷町) 梵鐘(秋田市) 銅鼓(大曲市) 太刀 銘正恒(中仙町) 太刀 銘吉岡一文字(大曲市) 短刀 銘信国(大曲市) 脇差 銘大慶直胤(仁賀保町) 太刀 銘粟田口(秋田市) 甲冑(岩城町) 黒塗角頭兜(中仙町) 紫色威横刷二枚胴具足 附六十二間 筋兜(中仙町) 白岩焼(角館町) 白岩焼角皿(角館町) 太刀 銘守次(横手市) 脇差 銘粟田口一文字入道忠綱 彫同作(大館市) 蒔絵衣桁(岩城町) 上絵牡丹文秋田万古急須(秋田市) 黄瀬戸小皿(ビードロ手)(男鹿市) 金工資料(矢島町) 糸巻ノ太刀(鞘巻)外装(矢島町) 端花文円鏡(中仙町) 竜文刻馬具(中仙町) 螺鈿鞍馬具(中仙町) 染付磁器荒川尻焼大皿(角館町) 道三作上絵五彩水注(秋田市) 長康亭道三作染付壺(秋田市) 緑園作秋田万古連急須(秋田市) 緑園作秋田万古緑袖連湯ざまし(秋田市) 水注(五城目瀬戸産製)(五城目町) 鐔1枚 壇溪図(秋田市) 刀 銘天野河内助藤原高真花押(秋田市) 刀 銘天野河内助藤原高真作(角館町) 刀 銘出羽秋田住正忠造(横手市) 刀装1本 銘出羽秋田住正阿弥伝兵 衛作(大館市) 小柄1本 金銀地杓目鍛銘正阿弥 伝兵衛(昭和町) 鐔1枚 竹林猛虎の図 銘秋田住重具 (昭和町) 刀 銘出羽住忠秀刻印(秋田市) 赤銅金象眼鐔1枚 威透之図 銘 出羽秋田住正阿弥重恒(秋田市) 鰐口(藤里町) 太刀 無銘(伝一文字成宗)(大館市) 刀 無銘(伝直江志津)(平鹿町) 刀 無銘 伝長光(秋田市) 刀 無銘 伝志津(秋田市) 刀 無銘 伝備前国重真(湯沢市) 古瀬戸鉢・青磁椀(明代)(角館町) 鐔1枚 銘出羽秋田住正阿弥伝兵衛 (秋田市) 白磁瓶子(初期伊万里)(大曲市) 太刀 銘備州長船兼光(秋田市) 短刀 銘天野藤原高真作 元治元年 吉日(秋田市) 黒塗金箔押机(羽後町) 初期伊万里草花文花瓶(秋田市) 刀 銘大和太椽藤原正則(大館市) 青銅製明代門鐔(象潟町) 刀 銘羽州矢馬臣 藤原国重作之、 慶応二丙寅八月作(象潟町) 刀 銘天野河内助藤原高真 慶応二丙寅八月吉日応三森光茂 需作之(秋田市) 焼山焼スズおよび碗(増田町) 馬具(河辺町) 扇面図脇差拵揃金具(本荘市) 魚藻文沈金手箱(秋田市) 刀 銘國重依願指科授 東海林直八 慶応元年五月日(矢島町) 鐔(あやめ図透彫) 銘出羽秋田住正 阿弥二代作享保十八年三月日(秋田市) 刀 銘羽州住兼廣作 安政四年二月 吉日(秋田市) 波宇志別神社神楽殿神輿(大森町) 秋田家資料(刀剣類ほか)(秋田市)</p>
--	---	--

資料) 各県ホームページ  
注) ( )内の市町村は、所在地を示す。

【図表 2-21：重要文化財（書跡・典籍・古文書）】

区分	青森県	岩手県	秋田県
国指定		紙本墨書中尊寺建立供養願文 付 同願文(平泉町) 留守家文書(水沢市) 中尊寺文書 附 宝永三年修理関係文書(平泉町) 陸奥国骨寺村絵図 紙背 中尊寺与骨寺村差図(平泉町)	因幡権守重隆家歌合(巻頭)(秋田市)
県指定	久祥院殿写経(弘前市) 新編文林全集(八戸市)	紙本墨書正法眼蔵 付 正法眼蔵雑文 (水沢市) 紙本墨書大般若波羅密多経(平泉町) 第一百一十巻 第二十七巻 第四百六十三巻 第一百九十六巻 第一百二十五巻 原本無刑録(大東町) 春日版法華経(北上市) 豊臣秀吉朱印状(盛岡市) 盛岡藩雑書(盛岡市) 吉田家文書(陸前高田市)	貞観の写経(六郷町) 写経(大般若波羅密多経)(横手市) 菅江真澄著作(大館市) 平田篤胤竹画讃(秋田市) 平田篤胤書簡(秋田市) 平田篤胤和魂漢才(秋田市) 歌切 伝近衛信尹筆(能代市) 雪村友梅、梅花帖詩(横手市) 即非の書(秋田市) 亀年禅師書字号(秋田市) 季吟・桂葉両吟百韻(六郷町) 国典類抄(秋田市) 法隆寺一切経(本荘市) 出羽一国御絵図(秋田市) 鈴木重孝自筆本キヌブレイ(男鹿市) 花葉集(角館町) 霧山天神連歌懐紙(御規式用具9点 を含む)(能代市) 梅津政景日記(秋田市) 佐竹北家日記(秋田市) 岩屋家文書(六郷町) 連歌切紙本(能代市) 佐藤信淵文書(羽後町) 佐藤信淵自筆本(羽後町) 佐竹南家御日記(湯沢市) 羽陽秋北水土録(秋田市)

資料)各県ホームページ

注)( )内の市町村は、所在地を示す。

【図表 2-22：重要文化財（考古資料）】

区分	青森県	岩手県	秋田県
国指定	陸奥国是川遺跡出土品(八戸市) 壺形土器(青森市) 青森県石神遺跡出土品(森田村) 青森県宇鉄遺跡出土品(青森市) 青森県大石平遺跡出土品(青森市) 青森県風張1遺跡出土品(八戸市) 青森県葉師前遺跡墓坑出土品(八戸市) 青森県砂沢遺跡出土品(弘前市) 青森県三内丸山遺跡出土品(青森市)	金色堂須弥壇内納置棺及副葬品(平泉町) 深鉢形土器(盛岡市) 岩手県蒔前遺跡出土品(一戸町)	人面付環状注口土器(秋田市) 磨製石斧(秋田市)
県指定	石棒(青森市) 蕨手刀(七戸町) 蕨手刀(弘前市) 縄文式尖底土器(名川町) 亀ヶ岡式皿形彩色土器(木造町) 亀ヶ岡式壺形彩色土器(浪岡町) 亀ヶ岡式壺形羽状縄文土器(浪岡町) 亀ヶ岡式浅鉢形台付土器(浪岡町) 盤形籃胎漆器(木造町) 亀ヶ岡式壺形丹漆塗土器(青森市) 縄文式甕形土器(八戸市) 縄文式土偶(青森市) 亀ヶ岡式壺形土器(三戸町) 縄文式土器(八戸市) 縄文式注口土器(青森市) 漆塗壺形土器(青森市) 勾玉(青森市) 鯨骨製青竜刀形骨器、鹿角製尖頭器、猪牙製垂飾品、鹿角製叉状品(天間林村) 垂柳遺跡出土品(田舎館村) 亀ヶ岡式土器(木造町) 縄文式板状土偶(八戸市) 石神遺跡出土縄文式遺物(森田村) 亀ヶ岡遺跡出土品(青森市) 亀ヶ岡式香炉形土器(木造町) 縄文土器(狩獵文土器)(青森市) 鹿島沢古墳群出土品(八戸市) 二枚橋(2)遺跡出土品(大畑町) 大森勝山遺跡出土の旧石器(弘前市) 細隆起線文尖底深鉢形土器(青森市)	鉄塔(平泉町) 鉄鉢 建武元年八月二十日 在銘(宮古市) 丹内山神社経塚出土品(東和町) 最明寺石塔婆 建長八年丙辰二月廿九日の銘あり(川崎村) 不動明王絵像碑 元亨三年四月八日の銘あり(紫波町) 極楽寺石塔婆 延慶三年庚戌十二月廿九日の銘のあるもの 延慶二年辛亥五月の銘あるもの(北上市) 角塚古墳出土埴輪(胆沢町) 石包丁(胆沢町) 上田蝦夷森1号墳出土品(盛岡市) 長根古墳群出土品(宮古市) 鉄製「雀紋印の馬印(うまのかね)」(一戸町) 上杉沢遺跡25~28号堅穴住居跡出土品及び南遺物包含層出土品(浄法寺町)	須恵式陶壺(秋田市) 古鏡蓋付陶製経壺(横手市) 骨壺(横手市) 銅製経筒(横手市) 経甕(大森町) 魚形文刻石(矢島町) 魚形文刻石(阿仁町) 子持勾玉(西目町) 陶製水瓶(能代市) 魚形文刻石(雄勝町、矢島町) 板碑(羽後町) 板碑(羽後町) 藤木出土品(大曲市) 玉類(雄物川町) 土偶(大曲市) 板碑(増田町) 灰釉牡丹文瓶子(大曲市) 古鏡(羽後町) 蛤刃形磨製石斧(小坂町) 金剛童子線刻像(羽後町) 土師骨蔵器(羽後町) 麻生遺跡出土品(二ツ井町) 経甕(片口ふたつき)(二ツ井町) 胡桃館遺跡建築遺材及び出土遺物(鷹巣町) 勾玉及び玉類(秋田市) 鉢形土器(秋田市) 穀丁遺跡出土品(青磁碗ほか)(秋田市) 米ヶ森遺跡出土品(協和町) 古鏡(秋田市) 小谷地遺跡出土品(男鹿市) 秋田城跡SE406井戸跡出土品(秋田市) 中山遺跡出土漆工及び漆工関係出土品(五城目町) 鋒形石器(大館市) 柏子所貝塚出土骨角製品及び貝製品(能代市) 白坂遺跡出土品(森吉町) 田久保下遺跡土坑墓出土品(仙北町) 寒川Ⅱ遺跡土坑墓出土品(仙北町) 地藏田遺跡出土品(秋田市)

資料)各県ホームページ

注)( )内の市町村は、所在地を示す。

【図表 2-23：重要文化財（歴史資料）】

区分	青森県	岩手県	秋田県
国指定		高野長英関係資料(水沢市) 著述書類 文書、記録類、書状類、書跡類 平削盤 明治12年、工部省赤羽工作分局製 (盛岡市)	菅江真澄遊覧記(明徳館献納自筆本) (秋田市)
県指定	棟札(八戸市) 長栄寺正応碑(三戸町) 南部利康公位碑(三戸町) 青銅擬宝珠(三戸町) 湊家文書(八戸市) 天保三辰ヨリ七ヶ年凶作日記(八戸市) 明暦二年津軽十郎左衛門拝領 山県黒石領外浜平内領検地帳 (明暦の検地帳)(黒石市) 棟札(田屋熊野神社 文明十八年銘) (東通村)	紙本両鉄鉦山内御山並高炉之図(釜石市) 観音籤及び筒(浄法寺町) 雲筆文透し地組九條袈裟 付 伝衣贈記 1巻及び大衣帛沙(川井村) 算額(金ヶ崎町) 宮田宝篋印塔(一戸町) 星座石と陸奥州気仙郡唐丹村測量之碑 (釜石市)	佐竹侯累代の肖像(秋田市) 秋田街道絵巻(秋田市) 由利郡最上検地帳(象潟町) 田沢湯元道中画報(中仙町) 由利南部海岸図(金浦町) 秋田領給人町絵図(秋田市) 久保田城下絵図(秋田市) 紙本金地着色男鹿図屏風(秋田市) 久保田城下絵図(秋田市) 小坂鉦山資料(小坂町) 旧止滝発電所一号発電機械(小坂町) 旧小坂鉄道貴賓客車一両及び十一 号機関車一両(小坂町) 検地区絵及び下絵(秋田市)

資料)各県ホームページ

注)( )内の市町村は、所在地を示す。

## ウ 重要民俗文化財

国指定民俗文化財では、「重要有形民俗文化財」として、青森県では泊のまるきぶね、南部のさしこ仕事着コレクション、岩手県ではマタギの狩猟用具、南部杜氏の酒造用具、浄法寺の漆搔きと浄法寺塗りの用具及び製品、秋田県では八郎潟漁撈用具、田沢湖のまるきぶね、作業用覆面コレクションなどがある。

また、「重要無形民俗文化財」では、青森県では青森のねぶた(青森市)や弘前のねぶた(弘前市)、八戸のえんぶり(八戸市・三戸郡)、岩木山の登拝行事(お山参詣)(岩木町など)、下北の能舞(むつ市・下北郡・上北郡)などがあげられる。

岩手県では、早池峰神楽(大迫町)、毛越寺の延年(平泉町)、永井の大念仏剣舞(盛岡市)、山屋の田植踊(紫波町)、室根神社祭のまつりバ行事(室根村)などがあげられる。

秋田県では、大日堂舞楽(鹿角市)、保呂羽山霜月神楽(大森町)、男鹿のナマハゲ(男鹿市)、秋田の竿灯(秋田市)、西馬音内盆踊(羽後町)、六郷のカマクラ行事(六郷町)、刈和野の大綱引き(西仙北町)、東湖八坂神社祭のトウニン(統人)行事(天王町)などがあげられる。

さらに、各県において獅子踊や神楽を中心に多数の民俗芸能などが重要民俗文化財として指定されている。

【図表 2-24：重要民俗文化財（国指定）】

区分	青森県	岩手県	秋田県
有形	泊のまるきぶね(青森市) 南部のさしこ仕事着コレクション(三沢市) 円覚寺の奉納海上信仰資料(深浦町) 津軽・南部のさしこ着物(青森市) 南部七戸見町観音堂庶民信仰資料(七戸町) 南部七戸小田子不動堂奉納絵馬(七戸町) 八戸及び周辺地域の漁撈用具と浜小屋(八戸市) 津軽海峡及び周辺地域のムダマハギ型漁船コレクション(青森市)	大船渡のまるた(大船渡市) 沢内の丸木舟(沢内村) マタギ狩猟用具(沢内村) 南部杜氏の酒造用具(石鳥谷町) 沢内及び周辺地域の積雪期用具(沢内村) 浄法寺町の漆掻きと浄法寺塗の用具及び製品(浄法寺町) 黒石十三塚(水沢市) 北上山地川井村の山村生産用具コレクション(川井村)	八郎潟漁撈用具(昭和町) 田沢湖のまるきぶね(田沢湖町) 大沼の箱形くりぶね(きつつ)(秋田市) 男鹿のまるきぶね(男鹿市) 作業用覆面コレクション(秋田市)
無形	八戸のえんぶり(八戸市・三戸郡) 青森のねぶた(青森市) 弘前のねぶた(弘前市) 岩木山の登拝行事(青森市・弘前市・黒石市・五所川原市・東津軽郡・西津軽郡・中津軽郡・南津軽郡・北津軽郡) 下北の能舞(下北郡・むつ市・上北郡) 泉山の登拝行事(三戸町) 八戸三社大祭の山車行事(八戸市)	早池峰神楽(大迫町) 毛越寺の延年(平泉町) 永井の大念仏剣舞(盛岡市) 山屋の田植踊(紫波町) 室根神社祭のマツリバ行事(室根村・大東町・千厩町・川崎村・大船渡市・宮城県気仙沼市・宮城県唐桑町) 鬼剣舞(北上市・胆沢町・衣川村) 吉浜のスネカ(大船渡市)	大日堂舞楽(鹿角市) 保呂羽山の霜月神楽(大森町) 男鹿のナマハゲ(男鹿市) 秋田の竿灯(秋田市) 西馬音内の盆踊(羽後町) 六郷のカマクラ行事(六郷町) 川和野の大綱引き(西仙北町) 東湖八坂神社祭のトウニン(統人)行事(天王町・男鹿市) 角館祭りのやま行事(角館町) 土崎神明社祭の曳山行事(秋田市) 毛馬内の盆踊(鹿角市) 上郷の小正月行事(象潟町) 根子番楽(阿仁町) 小滝チョウクライロ舞(象潟町)

資料) 各県ホームページ

注) ( )内の市町村は、所在地を示す。

【図表 2-25 : 重要民俗文化財（県指定）】

区分	青森県	岩手県	秋田県
有形	<p>順礼札(南部町) 笈(南部町) 躰機(田子町) アイヌの腰刀(脇野沢村) 泊の丸木舟(六ヶ所村) 銀熨斗包印籠刻蝦夷腰刀拵(むつ市) 南部地方の紡織用具及び麻布(青森市) 高照神社奉納額絵馬(岩木町) 舟ヶ沢の丸木舟(東北町) 青森の刺しこ着(青森市) 東通村目名不動院伝来能舞面(東通村) 順礼札(隅ノ観音堂)(南部町)</p>	<p>大船渡のマルタ(大船渡市) 納骨器(平泉町) 金銅製五輪塔 木製五輪塔 竹筒 木製小箱型 木製仏像型 笹塔婆(平泉町) 巡礼納札(平泉町) 巡礼納札(平泉町) 巡礼納札(江刺市) 巡礼納札(大船渡市) 巡礼納札(一戸町) まいりのほとけ(東和町) まいりのほとけ(北上市) 南部絵暦(安代町) 田山曆木活版木 手書経文 嘉永2年木活版 絵暦 付 容器1個 墨壺1個 南部絵暦 盛岡曆 版木(盛岡市) まいりのほとけ(江刺市) まいりのほとけ(江刺市) 漆絵曳馬絵馬(陸前高田市) 花巻人形の型 25組半(北上市) まいりのほとけ(北上市) まいりのほとけ(北上市) まいりのほとけ(北上市) まいりのほとけ(北上市) 旧岩手県立農業博物館収集生業生活資料(北上市)</p>	<p>検地竿(秋田市) 古樫細工(角館町) 阿仁マタギ用具(阿仁町) 尾去沢鉱山資料(鹿角市) 八郎湯出土くり船(昭和町) 材木ノリ(千畑町) 真山の万体仏(男鹿市) 旧山田八幡神社獅子頭1頭及び鉢1振(湯沢市) 七高神社獅子頭(仁賀保町) 旧若宮八幡神社獅子頭(矢島町) 御嶽神社獅子頭(羽後町) 県内木造船資料(秋田市) 秋田柚子造材之画(秋田市)</p>
無形	<p>南部切田神楽(十和田市) 津軽神楽(弘前市) 南部駒踊(十和田市) 南部駒踊(八戸市) 南部駒踊(三沢市) 鶏舞(階上町) 田子神楽(田子町) 高田獅子(鹿)踊(青森市) 吉野田獅子(鹿)踊(浪岡町) 尾崎獅子(熊)踊(平賀町) 八幡崎獅子(熊)踊(尾上町) 種市獅子(鹿)踊(弘前市) 一野渡獅子(熊)踊(弘前市) 古懸獅子(熊)踊(碓ヶ関村) 南部駒踊(階上町) 水木獅子(鹿)踊(常盤村) 大沢獅子(熊)踊(弘前市) 浅井獅子(鹿)踊(五所川原市) 悪戸獅子(熊)踊(弘前市) 南部駒踊(倉石村) 嘉瀬奴踊(金木町) 念仏鶏舞(上北町) 加賀美流騎馬打毬(八戸市) 金ヶ沢鶏舞(新郷村) 三ツ目内獅子(熊)踊(大鰐町) 東通神楽(東通村) 鯨の神楽(八戸市) 斗内獅子舞(三戸町) 広船獅子(熊)踊(平賀町) 金木さなぶり荒馬踊(金木町) 田子の虫追い(田子町) 大川原の火流し(黒石市) 岩崎の鹿島祭(岩崎村) 福浦の歌舞伎(佐井村) 法霊神楽(八戸市) 東通のもちつき踊(東通村) 東通村の獅子舞(東通村) 横浜町の獅子舞(横浜町) 横浜町の神楽(横浜町) 黒石ねぶた(黒石市) 岩崎の獅子(鹿)踊(岩崎村) 田名部の山車行事(むつ市) 川内の山車行事(川内町) 佐井の山車行事(佐井村) 上十川獅子踊(黒石市) 脇野沢の山車行事(脇野沢村) 大畑の山車行事(大畑町) 風間浦の山車行事(風間浦村) 今別町の荒馬(今別町)</p>	<p>鹿踊り(江刺市) 火防祭の「屋台囃」(水沢市) しし踊り(東和町・遠野市) 江刺市梁川金津流鹿踊 付 金津流鹿踊本體 巻及び金津流鹿踊伝授之目録(江刺市) 早池峰大償流土沢神楽(東和町) 早池峰岳流石嶋岡神楽(東和町) 春田打(北上市) 黒森神楽(宮古市) 菅窪鹿踊・剣舞(田野畑村) 鴨沢神楽(江刺市) 道地ひな子剣舞(北上市) 煤孫ひな子剣舞(北上市) 大宮神楽(田野畑村) 上鹿妻念仏剣舞(盛岡市) 倉沢人形歌舞伎(東和町) 広瀬人形芝居(江刺市) 根反鹿踊り(一戸町) 舞川鹿子躍(一関市) 気仙町けんか七夕祭り(陸前高田市) 夏井大梵天神楽(久慈市) 花巻の山伏神楽(花巻市) 和賀の大乗神楽(北上市・花巻市) 久田鹿踊(江刺市) 三ヶ尻鹿踊(金ヶ崎町)</p>	<p>檜山舞(能代市) 仁井田番楽(十文字町) 仙道番楽(羽後町) 本海番楽(鳥海町) 鳥海山日立舞(象潟町) 冬師番楽(仁賀保町) 藤琴(志茂若 上若)豊作踊(藤里町) 阿仁前田獅子踊(森吉町) 常州下御供佐々楽(能代市) 国見さら(太田町) 東長野さら・長野さら(中仙町) 白岩さら(角館町) 戸沢さら(西木村) 大森親山獅子大権現舞(鹿角市) 切石さら踊(二ツ井町) 八沢木獅子舞(大森町) 坂ノ下番楽(矢島町) 屋敷番楽(由利町) 下川原さら(角館町) 伊勢居地番楽(仁賀保町) 釜ヶ台番楽(仁賀保町) 願人踊(八郎潟町) 猿倉人形芝居(本荘市) 猿倉人形芝居(合川町) 猿倉人形芝居(羽後町) 秋田万歳(秋田市) 大湯大太鼓(鹿角市) 花輪ばやし(鹿角市) 羽立大神楽(二ツ井町) 仁鮎さら踊(二ツ井町) 富根報徳番楽(二ツ井町) 志戸橋番楽(山本町) 花輪の町踊り(鹿角市) 荒丸の沼入り梵天行事(平鹿町) 鳥海山小滝番楽(象潟町) 中里のカンデッコあげ行事(西木村) 金沢八幡宮掛け歌行事(横手市) 駒形のネブ流し行事(二ツ井町) 松館天満宮三台山獅子大権現舞(鹿角市) 福米沢送り盆行事(若美町) 赤田大仏祭り(本荘市) 横手の送り盆行事(横手市) 日役町獅子踊(本荘市) 木境大物忌神社の虫除け祭り(矢島町)</p>

資料)各県ホームページ

注)( )内の市町村は、所在地を示す。

## エ 特別史跡・史跡

北東北では、国の特別史跡として、青森県の三内丸山遺跡、岩手県の毛越寺跡付鎮守社跡、無量光院跡、中尊寺境内、秋田県の大湯環状列石の5件が指定されている。

また、国の史跡として、北東北全体で50件が指定されており、城跡としては、古代の秋田城跡などや、近世の津軽氏城跡、盛岡城跡など、遺跡としては、亀ヶ岡石器時代遺跡や御所野遺跡などがあげられる。

さらに、県の史跡として、各地に残る一里塚などが多数指定されている。

【図表 2-26：主な史跡位置図】



資料) 『地図で訪ねる歴史の舞台—日本—』 (帝国書院)

【図表 2-27：特別史跡・史跡（国指定）】

区分	青森県	岩手県	秋田県
特別史跡 (国指定)	三内丸山遺跡(青森市)	毛越寺跡 付 鎮守社跡(平泉町) 無量光院跡(平泉町) 中尊寺境内(平泉町)	大湯環状列石(鹿角市)
史跡 (国指定)	浪岡城跡(浪岡町) 七戸城跡(七戸町) 根城跡(弘前市) 津軽氏城跡 (種里城跡(鯨ヶ沢町)・ 堀越城跡(弘前市)・ 弘前城跡(弘前市)) 亀ヶ岡石器時代遺跡(木造町) 田小屋野貝塚(木造町) 是川石器時代遺跡(八戸市) 長七谷地貝塚(八戸市) 小牧野遺跡(青森市) 二ッ森貝塚(天間林村) 丹後平古墳群(八戸市) 垂柳遺跡(田舎館村) 高屋敷館遺跡(浪岡町)	胆沢城跡(水沢市) 高野長英旧宅(水沢市) 下船渡貝塚(大船渡市) 蛸ノ浦貝塚(大船渡市) 中沢浜貝塚(陸前高田市) 九戸城跡(二戸市) 盛岡城跡(盛岡市) 橋野高炉跡(釜石市) 徳丹城跡(矢巾町) 樺山遺跡(北上市) 八天遺跡(北上市) 江釣子古墳群(北上市) 志波城跡(盛岡市) 角塚古墳(胆沢町) 御所野遺跡(一戸町) 崎山貝塚(宮古市) 柳之御所遺跡(平泉町) 南部領伊達領境塚(北上市・ 金ヶ崎町) 大洞貝塚(大船渡市) 綾織新田遺跡(遠野市)	払田柵跡(仙北町・千畑町) 平田篤胤墓(秋田市) 秋田城跡(秋田市) 岩井堂洞窟(雄勝町) 檜山安東氏城館跡 (檜山城跡・大館跡・茶臼館跡) (能代市) 杉沢台遺跡(能代市) 地藏田遺跡(秋田市) 由利海岸波除石垣(仁賀保町・ 金浦町) 伊勢堂岱遺跡(鷹巣町)

資料)各県ホームページ

注)( )内の市町村は、所在地を示す。

【図表 2-28 : 史跡 (県指定)】

区分	青森県	岩手県	秋田県
史跡 (県指定)	関の古碑群(深浦町) 八戸南部家墓所(八戸市) 唐馬の碑(三戸町) 一里塚(八戸市) 一里塚(十和田市) 一里塚(十和田市) 一里塚(野辺地町) 一里塚(天間林村) 一里塚(天間林村) 一里塚(南郷村) 一里塚(南郷村) 一里塚(南郷村) 八幡崎遺跡(尾上町) 藩境塚(平内町・野辺地町) 野辺地戦争戦死者の墓所 (野辺地町) 津軽信政の墓(岩木町) 一里塚(三戸町) 斗内千人塚 墳丘 供養塔 (三戸町) 餓死萬霊等供養塔及び戒壇石 (八戸市) 南部信直夫妻墓所(南部町) 中里城遺跡(中里町)	野田堅穴住居跡群(野田村) 泥田廃寺跡(一関市) 関谷洞窟住居跡(大船渡市) 舟久保洞窟(紫波町) 仙波堤堅穴住居跡(岩手町) 今松堅穴住居跡(岩手町) えぞ森古墳(矢巾町) 長者原廃寺跡(衣川村) 浮島古墳群(岩手町) 新平(にっぺい)遺跡(北上市) 明後沢古瓦出土地(前沢町) 二子・成田一里塚(北上市) 丹内山神社経塚(東和町) 貝島貝塚(花泉町) 下門岡ひじり塚(北上市) 国見山廃寺跡(北上市) 雫石街道の一里塚 日向一里塚(滝沢村) 生森一里塚・北側(雫石町) 生森一里塚・南側(雫石町) 高前田一里塚・北側(雫石町) 高前田一里塚・南側(雫石町) 江曾一里塚(石鳥谷町) 一石一字経塚 永和二年在銘碑 (宮古市) 末崎川一里塚(玉山村) 毘沙門堂平一里塚(玉山村) 塚の沢一里塚(玉山村) 大橋一里塚(玉山村) 小野松一里塚(盛岡市) 新塚一里塚(玉山村) 大竹廃寺跡(北上市) 高畑(たかばたけ)一里塚(盛岡市) 浪打峠一里塚(一戸町) 御堂・馬羽松一里塚(岩手町・ 一戸町) 栗林銭座跡(釜石市) 川原毛瓦窯跡(紫波町) 旧中山・小繁・川底一里塚(一戸町) 上田一里塚(盛岡市) 好地旧一里塚(石鳥谷町) 玉川鉄山跡(軽米町) 大槌城跡(大槌町) 館石野I遺跡(田野畑村) 栗木鉄山跡(住田町) 大館町遺跡(盛岡市)	如斯亭(秋田市) 矢石館遺跡(田代町) 上代窯跡(秋田市) 白岩焼窯跡(角館町) 十三本塚(羽後町) 万固山天徳寺(秋田市) 柏子所貝塚(能代市) 三崎山旧街道(象潟町) 飯詰堅穴群(仙南村) 四十二館跡(大曲市) 矢立廃寺跡(大館市) 磨崖(雄勝町) 一里塚(神岡町) 内館文庫跡(鷹巣町) 心像市道の窯跡(西仙北町) 一里塚(湯沢市) 岩野山古墳群(五城目町) 雀館古代井戸(五城目町) 石川理紀之助遺跡(昭和町) 檜山追分旧羽州街道松並木 (能代市) 旧青柳家武家屋敷(角館町) 旧院内銀山跡(雄勝町) 岩橋家武家屋敷(角館町) 萱刈沢貝塚遺跡(八竜町) 本堂城跡(千畑町) 一丈木遺跡(千畑町) 湯出野遺跡(東由利町) 吉田城跡(平鹿町) 天照皇御祖神社境内の磨崖仏 及び板碑(鹿角市) 亀田藩主岩城家墓所(岩城町) 山根館跡(仁賀保町) 戸沢氏城館跡(門屋城跡・古堀田 城跡)(西木村) 大堤一里塚(鷹巣町) 鴨巣一里塚(能代市) 西馬音内城跡(羽後町) 脇本城跡(男鹿市) 豊島館跡(河辺町) 大畑古窯跡(南外村) 横山遺跡(本荘市)

資料)各県ホームページ

注)( )内の市町村は、所在地を示す。

## オ まつり・民俗芸能

北東北には、民俗芸能などに関連するまつりが多く、それは特に農山村地域に多く見られるのが特徴である。

また、京文化などの影響を受けつつもそれをアレンジして地域独自の芸能に昇華させてきたものも見られる。

これらの民俗芸能の多くは、相互扶助的組織である保存会などによって取り組まれ

ている。こうした伝承団体があることによって、北東北の農山村では共同体的な意識が完全に失われず、まつりや芸能も継承されてきたといえる。

さらに、北東北では、特徴的な冬まつりが多い。農閑期である北東北の冬は厳しく、出稼ぎや家の中でやる手仕事等を通して副収入を得る期間であると同時に、翌年の春を迎えるまでの備えを終えた後に遊びを楽しむ休息期間であることが背景としてあげられる。

したがって、雪が多いからといって家の中に閉じこもるのではなく、外に出て遊び、それがまつりになったともいえる。つまり、厳しい冬の自然条件と共生してきたなかからまつりが生まれ、北東北の人たちは継承してきたのであり、そこに知恵と工夫をうかがい知ることができる。

## まつり

まつりは、一般的に信仰や儀式の色彩が濃い「祀り」とイベント化した「祭り」の二つに分けられるが、この点を基準として北東北のまつりをタイプ分けすると次のようになる。

なお、氏神様の例祭などは、今も各地で伝承されている。

### □ 青森ねぶた、弘前ねぶた、秋田竿燈

これらのまつりは、既に全国行事としてイベント化しているが、青森ねぶた、弘前ねぶた、秋田竿燈は、仙台七夕と同じ「眠流し」の系統に属する行事である。

「眠流し」は、元来、祓（はらえ）の形代（人形など）を流す行事が、睡魔を払う行事として発展したものとされており、七夕の水浴をはじめとして、各地に様々な習俗が伝わっている。

### □ 田植踊りや能、舞楽、歌舞伎などの民俗芸能を神社・仏閣に奉納する、神事や例祭としてのまつり（これらの民俗芸能は、国や県の無形民俗文化財にしていさされているものが多い）

例）早池峰神社例祭など

### □ 正月（小正月）や盆などの季節の節目に、その年の方策を祈願するため、あるいは豊凶を占うために行われるまつり（田の神・山の神信仰など、農耕儀礼に関わるものを含む。）

例）八戸えんぶり、秋田県刈和野の大綱引きなど

### □ かつてその地域を支配していたゆかりの武将などにまつわるまつりなど

例）春、秋の藤原まつりなど

### □ 伝説や伝承にかかわるまつり

例）男鹿のなまはげ

### □ 盆踊りや花火大会などがセットになった、イベント化した夏まつり

例）大曲全国花火競技大会など

### □ 雪をテーマにした冬の風物詩としてのまつり

例）弘前雪灯籠まつり、横手かまくらなど

【図表 2-29：主な祭礼・行事】

青森県	岩手県	秋田県
七日堂祭(岩木町)	和賀大乘神楽舞初め(北上市)	大日堂舞楽(鹿角市)
義経寺例祭(三厩村)	おしら遊び(遠野市ほか)	はだか参り(本荘市)
えんぶり(八戸市)	毛越寺二十日夜祭(平泉町)	かけよ(掛け魚)祭り(金浦町)
尾崎獅子踊り(平賀町)	サイゴギ(二戸市)	かまくら(横手市)
恐山大祭(むつ市)	春の藤原まつり(平泉町)	大綱引き(西仙北町)
田子神楽(田子町)	チャグチャグ馬コ(滝沢村)	万灯火(小阿仁村)
三社大祭(八戸市)	早池峰神社例祭(遠野市)	みこしの滝あび(八森町)
弘前ねぶたまつり(弘前市)	盛岡さんさ踊り(盛岡市)	竿燈(秋田市)
青森ねぶたまつり(青森市)	けんか七夕まつり(陸前高田市)	大曲全国花火競技大会(大曲市)
立ちねぶたまつり(五所川原市)	秋の藤原まつり(平泉町)	盆踊り(羽後町)
野辺地夏まつり(野辺地町)	又兵衛まつり(宮古市)	おやまばやし(角館町)
洞内南部駒踊り(十和田市)		霜月かぐら(大森町)
		なまはげ(男鹿市)

資料)『青森県の歴史』、『岩手県の歴史』、『秋田県の歴史』(山川出版社)

## 民俗芸能

まつりと密接な関連を持ちながら、むしろ芸能としての色彩を強めているものに民俗芸能があり、北東北の民俗芸能を大まかに分類してみると次のようになる。

- 山伏神楽：山伏修験者が行っていた神楽  
例) 青森県東通村の能舞、岩手県大迫町の山伏神楽、秋田県鳥海町の番楽、大森町の霜月神楽など
- 田植踊り：東北地方独特の豊年予祝の芸能  
例) 青森県八戸市のえんぶりなど
- 鹿踊り：鹿の頭を付け、8から12頭で激しく踊る、東北地方独特のもの  
例) 岩手県江刺市の鹿踊りなど
- 獅子踊り：獅子頭を付け踊るもので、東北一帯に数多く伝承されている。  
例) 青森県平賀町の尾崎獅子踊りなど
- けんばい：念仏踊りの一種で岩手県と宮城県に分布する。  
例) 岩手県盛岡市の大念仏、岩手県依川村の鬼けんばいなど
- 盆踊り：東北地方で広く行われている。  
例) 伝統的なものとしては、秋田県羽後町西馬音内<sup>にしもない</sup>など

【図表 2-30 : 主な民俗芸能】

青森県	岩手県	秋田県
牛滝三味線組踊	綾織田植踊	秋田万歳
えんぶり	荒屋田植踊	阿仁前田獅子踊
おしまこ踊	市野々剣舞	延年チュークライロ
おしら遊び	岩崎鬼剣舞	大森親山獅子大権現舞
おしら祭文	大償神楽	飾山囃子
お山参詣囃子	大宮神楽	竿燈囃子
切田神楽	上矢次剣舞	国見ささら
黒石よされ	軽石人形	蜘蛛舞
鶏舞	川西念仏剣舞	駒踊
さなぶり荒馬	剣舞	猿倉人形
鮫神楽	駒舞	大日堂舞楽
高館駒舞	ざっさか踊	大の坂舞
太刀振舞	さんさ踊	鳥海山日立舞
田子神楽	鹿踊	道地ささら
津軽神楽	庄ヶ畑春田打	戸沢ささら
津軽獅子踊	菅ノ窪鹿踊	なまはげ
十三の砂山	煤孫田植踊	仁井田番楽
ナニモササ	岳神楽	西馬音内盆踊
ナニヤドラヤ	田代念仏けんばい	根子番楽
南部駒舞	立花念仏剣舞	波宇志別神社霜月神楽
ねぶた	中尊寺延年	花輪囃子
	鶴羽衣鹿踊	番楽
	永井大念仏けんばい	東長野ささら
	花巻鹿踊	一日市願人踊
	早池峰神楽	檜山踊
	春田打	藤琴豊年踊
	日高囃子	梵天祭
	囃子剣舞	八沢木獅子舞
	福原神楽	山谷番楽
	二子鬼剣舞	横手万歳
	南非詰奴踊	
	毛越寺延年	
	梁川鹿踊	
	山屋田植踊	

資料)『民俗芸能辞典』(東京堂出版)

## カ 民謡

地域に根ざした歌である民謡についてみると、1986年～1987年に文化庁の補助により各都道府県の教育委員会が実施した「全国民謡緊急調査」によれば、全国で確認される民謡は約 58,000 曲あるとされており、そのうちのおよそ 8%である約 3,600 曲が北東北に存在している。

北東北に存在する代表的な民謡曲目を次表に示したが、大まかに分類すると①盆踊唄 ②祝い唄 ③民俗芸能 ④労作唄 ⑤酒盛唄 ⑥童唄 ⑦祭唄 ⑧遊唄 ⑨古典民謡 ⑩新民謡に分けられる。

これらのうち、北東北各県で比較的多いのが労作唄であり、特に秋田県で酒盛唄が多いのが特徴的である。

北東北における民謡の曲目は多様であり、労作唄に代表されるように民謡を唱うことによって、農作業などの厳しさも楽しさに変えるようなバイタリティを北東北の人たちは持ち続けてきたといえる。

【図表 2-31 : 主な民謡】

区分	青森県	岩手県	秋田県
盆踊唄	鱒ヶ沢甚句 おしまこ節 嘉瀬の奴踊 サイコ節 三戸盆踊 ソガエ節 十三の砂山 どだればち ナオハイ節 ナニヤドラヤ ナンヨ節 ホーハイ節	釜石浜唄 からめ節 気仙盆唄 さそり節 沢内さんさ踊 沢内甚句節	秋田音頭 秋田甚句 鹿角甚句 毛馬内の盆踊 大の坂音頭
祝唄	馬方三下り 謙良節 蒼前祝唄 津軽三下り 津軽山唄 福俵積み 孫祝唄 世の中節 礼返し唄	くるくる節 御祝い ざっさか踊 さんこ女郎 千福山 中おくに節 鍋子長嶺 南部駒引唄 山の神唄	男鹿まんだら おめでたい節 お山節 喜代節 大漁恵比寿舞唄 高杉節 長者の山 荷方節 八沢木節
民俗芸能	えんぶり 鶏舞 田名部万歳 なべぶた節 松の舞	剣舞 さんさ踊 南部囃子 早池峰神楽	秋田万歳 飾山囃子 西馬音内盆踊 一日市願人踊
労作唄	沖場唄 柏葉折の唄 鴨あ落ちた 木造の田植唄 下北の田植唄 十七唄 道中馬方節 夜の唄	鑄銭坂 キスネ搗唄 しがら山節 七之助節 そんでこ節 南部牛追唄 南部馬方節 南部木挽唄 南部米搗唄 南部杜氏酒屋唄 南部稗搗唄 南部麦打唄 南部麦搗唄 畑打唄 麦押唄	秋田臼挽唄 秋田馬方節 秋田木伐唄 秋田竹刀節 秋田長持唄 秋田米とぎ唄 姉こもさ 荒川山節 あらくれ搔唄 筏節 雄物川船唄 タント節 湯沢酒屋唄 湯瀬村こ
酒盛唄	黒石よされ 白銀ころばし 津軽アイヤ節 津軽小原節 津軽音頭 津軽じょんがら節 南部アイヤ節 南部追分 南部荷方節 ナンヨ節 八戸大漁祝唄 方言詩吟 弥三郎節	相子節 鍬ヶ崎節 廣大寺坊主踊唄 外山節 遠野の間抜け節 ドドサイ節 南部松坂(節) 南部よしゃれ 宮古大々漁節	秋田追分 秋田おぼこ 秋田のアイヤ節 秋田の飴売節 秋田船方節 おいと節 岡本新内 小野節 生保内節 お山こ節 こっから舞 木挽舞 そでこ節 大正寺おけさ 大正寺節 ドンパン節 なよ節 直根おぼこ ひでこ節 彫物舞 本荘追分
童唄	津軽の子守唄	三丁長嶺	秋田の子守唄 ねんねこころちやこ
祭唄		蘇民唄	恵比寿俵唄 梵天唄
遊唄	えんこえんこ 八戸の春田打		
古典民謡	笹あげ節		
新民謡	八戸小唄 リンゴ節 ワイハ節		おこさ節 久保田節 八郎潟口説

資料)『日本民謡辞典』(東京堂出版)

## キ 食文化

北東北の人たちの生活は、自然の恩恵や制約を受けてきた環境の中から、独自の食文化を育んできた。北東北の食文化の特色をいくつかあげると次のとおりである。

- (ア) 日本海側を中心に漬物が豊富である。
- (イ) 魚醤文化が見られ、汁ものが多い。
- (ウ) 稲作に不向きな山間部では、そばなどの雑穀文化が受け継がれている。

【図表 2-32：主な郷土料理・特産品】

青森県	岩手県	秋田県
粥の汁	ひつつみ	秋田フキ
蓮寿ずし	金婚漬	だまこ鍋
サメの飯ずし	短角牛	ハタハタ鍋(しょつつる)
つがる漬	前沢牛	しょつつる貝焼
マタギめし	かこい漬	ブリコ
あじゃら餅	えぞもち	オカノ餅
イワナの串焼き	かねなり	かねもち
と漬	かまやき	男鹿の石焼料理
鯛のかぶと蒸し	とろろ稗飯	比内地鶏
鯨餅	きりせんしょ	きりたんぼ鍋
タラ鍋	そばがき	とうぞう
ニシンの塩焼き	くし焼きもち	トンプリ
馬肉料理	柳ぱっと	松館しぼりダイコン
せんべい鍋	うちわ餅	山芋の鴨鍋
阿房宮	ぬっぺい汁	横沢曲がりネギ
そばかけ	アワビの粕漬	三関セリ
いちご煮	ホヤの粕漬	三梨牛
ヒメマス料理	岩たけの煮物	マエダマ
ホタテの黄身酢かけ	ハラコ汁	檜山納豆
煮あえっこ	ハラコそば	いぶりがっこ
そばもち	凍みじゃがいも	稲庭うどん
けいらん	番屋料理	イモの子汁
サケの寒風干し	まいたけのウニ漬	納豆ごりの酢味噌あえ
味噌貝焼	どんこのさかさ焼き	ジュンサイ
毛ガニ汁	どんこ汁	西明寺栗
じゃっぱ汁	北限漬	
アンコウのとも和え	よせ豆どうふ	
	豆ぶ汁	
	卵麺	

資料) 西東秋男著『東北の食と農漁の文化辞典』

## 郷土料理

北東北は、郷土料理の宝庫である。

その中でも、じゃっば汁（青森）、ぬっぺい汁（岩手）、ハタハタの塩魚汁鍋（秋田）、きりたんぼ鍋（秋田）など汁ものが多彩である。

また、ハタハタの塩魚汁鍋としょつつるにみる魚醤文化も残っている。縄文人やアイヌ人のルーツは、南方系モンゴロイドとされ、縄文文化が日本列島を北上する中で、南方民族に不可欠な魚醤文化が伝播されたと考えられている。加えて、九州の縄文人が主に、狩猟採集と焼畑農業を営んでいたのに対し、北東北のそれは漁撈にも比重を置いていたとされることから、塩汁文化の原型が古代からあったとみることができる。

さらに、岩手県の中南部地域は、北の岩手山を頂点に東の北上山地、西の横手盆地は、古代から納豆をはじめ乳酸発酵文化が生まれた拠点と見られている。ちなみに、九州に納豆を伝えたのは前九年合戦で捕虜となり、後に太宰府へと流された阿部宗任であるという伝説がある。

## 漬物

北東北では、冬場の保存食として漬物づくりが盛んである。特に、あまり雪の降らない太平洋側に比べて、日本海側に多いといわれている。

また、秋田県のいぶりがっこは、大根を薫して干した漬け物であり、囲炉裏の上の火棚に載せて干した物が薫製状になったのが始まりとされている。これは、西日本がかまど文化であるのに対し、東日本が囲炉裏文化であることに対応しており、地域性を表しているといえる。

## もち料理

北東北は、ハレの食・行事食、あるいは保存食としてのもち料理が豊富である。

特に、岩手県の県南（仙台藩領）は、もち文化圏とされ、もち料理の多彩さは日本一といえる水準にある。例えば、からもち、小豆もち、ずんだもち、雑煮もち、納豆もち、くるみもち、えびもち、ごまもち、しょうがもち、ふすべもちなどがある。

また、保存食の一種である干しもち（凍みもち）は、寒冷地である北東北で多く作られている。これは、正月のもちつきの時にもちを板の上に広げ、かなり固くなってから幅 10 cm、厚さ 1 cm ぐらいに切り、これをワラでつないで干し柿のように屋外に干して作るものがある。エビの粉、ヨモギ、ゴマなどを入れた色彩豊かなものも作られている。

そういう意味で、もち料理についても、冬の厳しいさや限られた食材の中から生まれた、調理・加工や保存に関する知恵や工夫があるといえる。

## 雑穀文化

歴史的にみると、東日本を中心に全国的にも、日常の主食は雑穀主体あるいは麦飯のように雑穀を混ぜることがむしろ普通であった。

特に東北、北陸・東山などのブナ林帯地域の山間部では、五穀にコメが含まれるこ

とは希であり、東山ではソバ、大豆、アワ、畑ヒエ、キビ、東北では地域によってヒエ、アワ、キビ、大豆、大根を五穀に数えていた。

北東北においても、稲作に適さない旧南部藩領を中心に、アワやそばの料理が多彩である。例えば、そば料理の場合は、串もち、いびきもち、そばだんご、くさもち、汁だんご、てこすりだんご、そばけもち、そばがき、そばきり、そばかけなどがある。

## ク 民間信仰

柳田國男の『遠野物語』は、岩手県の遠野地方に古くから伝わる伝承を地元の佐々木喜善から聞いてまとめたものであるが、その内容をみると神々や靈異等民間信仰に含まれるものが大部分を占めている。

このことから、民俗学者の岩崎敏夫は、柳田國男が民俗学の中でも民間信仰に早くから興味を持ち、その問題に取り組もうとしたのではないかとし、『遠野物語』が東北民間信仰の原点ともいえるとしている。

北東北では、仏教が浸透する以前には、田の神・山の神信仰など自然崇拝的な素朴な信仰があったと考えられる。一般的な田の神・山の神信仰は、山の神が春に山から下りてきて田の神となり、秋になると再び山に帰るという考え方である。そして、農耕社会に移行するにしたがい山を、天候を支配したり工作に必要な水を与えたりする神と仰ぐようになったものである。このような山の神信仰は、山そのものに宗教的な意味を持たせて崇拝し、種々の儀礼を行う山岳信仰へと進展していったものと考えられる。

このような民間信仰は、地域社会にあつて日常生活を営む人々の間に共通したものである。また、組織宗教のように特定の協議や教祖を持たず、それを生みだし、支えてきたのは地域に住む人々である。そのため、民間信仰の内容は、それぞれの地域で特色のあるものとなっていると考えられる。

【図表 2-33 : 主な民間信仰】

分類	信 仰 名
山岳信仰	恐山信仰、岩木山信仰、岩手山信仰、早池峰山信仰、室根山信仰、太平山信仰、駒ヶ岳信仰、鳥海山信仰
作新信仰	稲作信仰(田の神・山の神)、さなぶり
自然・動植物	水神、馬の神、樹木信仰、狩猟信仰、狛犬
その他	口寄せ、塞の神(道祖神)、屋敷神、お籠り、八幡信仰、地蔵信仰、不動信仰、観音信仰、弁天信仰、薬師信仰、諏訪信仰

資料) 谷川健一編『日本の神々』

【図表 2-34 : 主な神社・仏閣】

区分	青森県	岩手県	秋田県
神社	岩木山神社 猿賀神社 鬼神社 湯舟神社 高山稲荷神社 善知鶏神社 櫛引八幡宮 気比神社 十和田神社 天妃神社	駒形神社 出羽神社 於呂閉志胆沢川神社 志賀理和気神社 早池峰神社 岩手山神社 姫神岳神社 巻堀神社 室根神社 尾崎神社 黒森神社	鳥海山大物忌神社 城輪神社 小物忌神社 飛鳥神社 筏隊山神社 塩湯彦神社 旭岡山神社 波宇志別神社 副川神社・神宮寺八幡神社 太平山三吉神社 東湖八坂神社 赤神神社・真山神社
仏閣	長勝寺 青竜寺 法光寺 長福寺 恐山菩提寺 義経寺 三光寺 円覚寺 久渡寺	中尊寺 毛越寺 天台寺 黒石寺 成島毘沙門堂 竜松寺 穴十観音 常光寺 清水観音 福泉寺 釜石大観音 長安寺 滝山不動尊	補陀寺 常在院 天寧寺 成就院 長谷寺 多宝院 大日堂 中山観音 清涼寺 蚶満寺 最禅寺 龍門寺 浄蓮寺 西善寺

資料) 谷川健一編『日本の神々』を基に作成

## ケ 民話

民話は、昔話や童話とほとんど同義語として使われているように、今日のような都会的な遊びがない時代には、子どもたちにとっては一つの遊びであるとともに、子どもたちに伝統文化の心を伝える教えでもあったと考えられる。

北東北の主な民話は、青森県の瓜子姫子、岩手県の黄金の蛇、秋田県の猿賀入りなどがあげられる。

また、民話の特徴を大まかにあげると次のようになる。

- 寒い雪国の夜を楽しくするためのもの  
例 「雪姫」など
- 子どものしつけのためのもの  
例 「花咲翁」、「姥捨山」など
- 土地の歴史や伝承を学ぶためのもの（昔話よりも伝説が多い。）  
例 青森県岩木山の安寿姫、「岩手県の田村麻呂、義経、義家、秋田県の小野小町、なまはげなど

□ 神仏を大切に考えるためのもの

例 「猿地藏」、「3枚のお札」など

□ 子どもに夢を与えるためのもの

例 「一寸法師」、「力太郎」、「田螺（つぶ）長者」など

北東北の民話には、自然条件が厳しく貧しい生活環境にあってもそれを少しでも和らげ、大人たちには生活に潤いを与えるとともに楽しさに変えるものであり、子どもには楽しい夢を与える道具であったといえる。

これらの民話はいまでも語り継がれており、各々の土地の文化に大きな貢献をしていることを再認識する必要がある。

例えば、秋田県立図書館では、平成 12 年からインターネットのホームページで音声により「秋田の民話」を発信している。

## コ 県民気質等

NHKの全国県民意識調査結果（平成 8 年 6～7 月実施）によると、青森県人における郷土意識は強く、「青森県人のものの考え方には、ほかの県の人々とは違った特徴がある」とする傾向が強くみられるといわれています。青森県人は、地方のなまりが出ることは恥ずかしいという意識があるものの、土地の言葉については、残していきたいという傾向が強くなっている。

また、高村光太郎は、詩「岩手の人」のなかで、岩手の県民性を「岩手の人沈深牛のごとし」と表現しています。「沈深」という表現には、粘り強く努力家であるという意味とともに、寡黙でなかなか心を開かないという一面も込められており、NHKの調査結果からもそのことがうかがえる。

秋田県人の特徴として、白神山地、奥羽山脈、丁岳山地や鳥海山によって三方を囲まれ、他県との人・モノの交流が進まなかったことから、「秋田県人という気持ちを持つ」傾向が強く、郷土意識が強いことが特徴とされている。また、横並び意識が強く、お互いに競い合う関係を嫌う面もあるといわれている。

しかし、これまで歴史や気候、風土によって形成されてきたこういった県民気質は、各種の交流が盛んに行われるようになった現在においては、地域の外に向かって開かれたものになりつつあり、今後ますますその傾向は強まるものと考えられる。

## サ 地域の先人

北東北からは、12 世紀の奥州に“もう一つの日本”ともいうべき政治社会を築いた藤原秀衡を始めとして、多彩で個性的な先人が多数生み出されている。

この地域を代表する主な思想家、作家、芸術家等を見ると、青森県では、明治の言論人で著名な思想家陸羯南や作家の太宰治、石坂洋次郎、寺山修司、詩人サトウハチロー、版画家の棟方志功らがあげられる。

岩手県では、平民宰相と称された原敬や斎藤實、米内光政等の内閣総理大臣、さらには蘭学者高野長英、国際人新渡戸稲造、詩人宮沢賢治、歌人石川啄木、言語学者金田一京助など、多くの人材が輩出されている。

秋田県では、思想家として著名な安藤昌益や平田篤胤、佐藤信淵、安藤昌益の研究を始めた明治の大知識人狩野享吉、東洋史学の先唱者内藤湖南のほか、「農工一体」を理想としTDKを創設した斉藤憲三、アラビア石油の創設者山下太郎らの財界人、映画監督黒沢明、俳優三船敏郎らがあげられる。

また、以上の方々以外にも、三本木原開拓者の新渡戸傳、農地解放の指導者の鈴木東民など地域に多大な貢献をした先人たちが多数いたことを再認識することが必要である。

※委員会では、先人のリストについて検討したが、最終的に作成しないことにした。

北東北の先人に関する資料については「青森県人名事典（東奥日報社）」「岩手人名大鑑（岩手新報社）」「秋田人名大事典（秋田魁新報社）」などがある。

## シ 作家のみた「北東北」

北東北の風土については、さまざまな言葉で表現されている。

司馬遼太郎は、青森県について、縄文時代には「侵しがたいほど成熟した文化圏」であり、しかも今なお「地下三尺に、他地方にない感覚のゆたかさを秘めている」「北のまほろば」であったと、『街道をゆく』シリーズの「決算の地」として万感の思いを込めて語っている。

また、宮沢賢治は、『注文の多い料理店』の「広告のちらし」の中で、ドリームランド日本陸中国として、岩手県を「イーハトーブ」と呼び、ふるさとへの惜しめない愛を唱いあげている。

秋田県については、昭和初期に日本を訪れ、『日本美の再発見』を著したドイツの建築家ブルーノ・タウトが、京都風の茶趣味に通ずるその建築物や人々の風情を「北日本の京都」として賞賛している。

## ス 方言

北東北の民俗をうかがい知るには、言葉は重要な意味を持つと考えられる。特に、標準語が全国的に浸透してきているが、日常の会話にはまだ方言が残されている。

北東北には、津軽弁、南部弁、秋田弁などの方言があり、宮城県や山形県と隣接する地域では、宮城弁や山形弁と非常に似かよったものとなっている。

このような方言の中には、昔の書物に出てくる古語がたくさん残っており、「かわいい」という意味の「メンコイ」は、『万葉集』などにみられる「めぐし」からきているとされている。

また、アイヌ語の影響もみられ、マタギことばにはアイヌ語と同じ意味のものもあり、アイヌ語を語源とする地名が北東北に多く存在することからも、そのことがうかがえる。

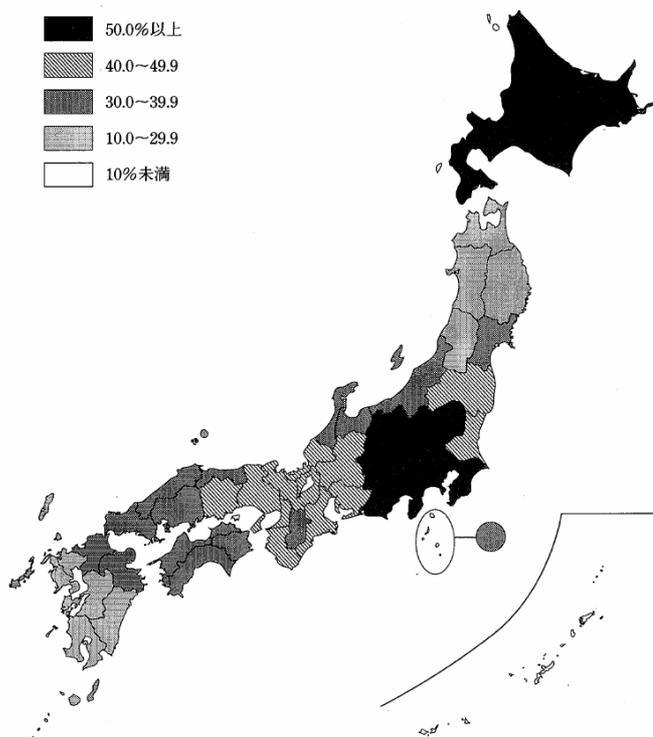
なお、標準語形の各都道府県分布率をみると、北東北3県はいずれも10.0～29.9%と九州南部と同様低い数値となっている。これは、方言学における方言分布パターンの一つにある「三辺境分布」という見方ができる。日本列島は南北に長いなづな形

になっているため、昔文化の中心であった畿内から伝わったことばが東北と九州南部に残ることが多く、加えて、文化の中心が畿内から関東に移っていく中で、両者の中間に位置する中部もエアポケットのように古いことばが残ったとされるものである。

また、類似のパターンとして柳田國男などが示した「圏論」があり、畿内を中心に同心円状に語形が広がっている分布のことで、この場合も同様に九州や東北に古いことばが残るという考え方である。

いずれにしても、ことばの多様さも北東北の文化の豊かさを示す一つの要素であると考えられる。

【図表 2-35：標準語形の各都道府県分布率】



資料：ヨーゼフ・クライナー編『地域性からみた日本』（新曜社）

## セ 歴史

（『北東北広域連携構想』（平成 11 年 10 月策定）から抜粋し、一部修正している。）

### 原始：旧石器時代・縄文時代

今から数万年前、氷河期の寒冷な環境のなか、現在では絶滅してしまったナウマンゾウやオオツノジカなどを追い求め、旧石器時代人の活動が日本列島で始まった。北東北でもこの時代の遺跡が各地に分布している。なかでも北上高地の金取遺跡（宮守村）は、3万五千年以上前の中期旧石器時代にさかのぼる可能性を持ち、日本列島で

の人類活動の始原を探る上で重要な遺跡として注目されている。このほかにも北東北には、北上高地や下北半島などの石灰岩地帯に分布する洞穴遺跡など、わが国では希少な絶滅した氷河時代の大型動物化石と共に旧石器時代人骨の発見が期待されている遺跡が眠っている。

1万五千年ほど前になると、氷河期終末の急激な気候変動期を迎える。北東北では十和田などの火山活動が活発化した。そのなかで、人々は新たな道具として土器を使い出し、また弓矢による狩猟も展開しはじめる。大平山元遺跡（蟹田町）や長者久保遺跡（東北町）などは、旧石器時代から縄文時代への移行期の貴重な遺跡であるばかりか、日本海を隔てた極東アジアとの関連から縄文文化成立期の様相を探る上で欠かせない遺跡である。

## 縄文時代

やがて、北東北の地には氷河時代の針葉樹林に変わって、まずブナ林が広がり、やがてクリ・コナラなどに覆われた野山が形成されていった。この落葉広葉樹林の豊かな恵みのなか、縄文人は食料貯蔵技術とその管理システムを高め、それまでの遊動的な生活から拠点となるムラをつくり、定住生活を確立したのである。また、太平洋沿岸地域や小川原湖周辺では、長七谷地貝塚（八戸市）など貝塚が発達し、以後継続して海洋資源の利用が高まった。

このような拠点的なムラには、共同住宅と推定されている大形の住居が建てられた。杉沢台遺跡（能代市）・綾織新田遺跡（遠野市）など、大形の住居を有するムラが北東北のそこかしこに出現したのである。三内丸山遺跡（青森市）は、このようなムラが拡大したひとつの典型といえよう。ムラの中央部には広場が設けられ、住居や貯蔵施設がそれを取り囲むように配置されていた（環状集落）。中央広場には墓地が造られることも少なくなかった。なかには、これらの空間を確保するため地表を削って平らにするなど大規模な造成工事が行われた遺跡も確認されている。

定住生活が安定して営まれるようになると、広域的な物資の移動も活発化する。特に新潟系魚川産のヒスイなどが、製品として盛んに持ち込まれた。

縄文時代前期中葉から中期中葉（約6000～4300年前）、現在の秋田―盛岡―宮古を結ぶ地域以北には円筒土器と呼ばれる土器様式が分布していた。この円筒土器は、複雑な縄文手法によって飾られ、文様や器形などの点でかたくなに伝統にこだわる面も持った土器様式である。北海道道南部と強い共通性が認められるのと同時に、東北南部に広がりを持つ大木式土器様式とは前期末葉に奥羽山脈に沿って円筒土器が広がるなど時期により複雑な動きを示している。また日本海沿岸には、北陸系の土器が流入するなど活発な交流も窺える。この円筒土器は、中期中葉以降、大木式土器様式の北進によって変質し、やがて北東北も大木式土器圏内に組み込まれていった。

縄文中期に各地に展開した環状集落は、やがて中期末葉を過ぎた頃には解体・消失し、後期には比較的小規模な集落に分散する動きをたどる。この頃、小牧野遺跡（青森市）や伊勢堂岱遺跡（鷹巣町）・大湯環状列石（鹿角市）のような大規模なストーンサークルを持つ遺跡が営まれるようになった。これらの遺跡は共同墓地と考えられ、日常の居住域として利用される空間は持たない場合が多いようである。生きるものの

世界と死者の世界が明瞭に分化していたことがわかる。このストーンサークルの周囲では、いくつかのムラが集まってマツリが執り行われたのかもしれない。おそらくそれは、共同墓地に寄り集う集団の絆を確認し、高める社会的意義を持っていたのであろう。

この縄文後期には、このような祭祀や儀礼に関わるような資料が増加する。これらの資料のなかには、キノコ形土製品、鐸形土製品、三角形石器・土製品などその用途は不明ながら北東北に集中して発見される資料が少なくない。特に土偶は、縄文人の精神世界を象徴するものであろう。北東北での土偶は根井沼遺跡（三沢市）など縄文早期中葉に出現し、縄文前期の終わり頃以降は、各地で盛んに作られた。特に、後期初頭、全国的に土偶が消失する中で、ひとり北東北だけが連綿と作り続けたのである。また、共同墓地以外でも、たとえば遺体を一旦骨にして、土器に埋納する特異な葬法もとられるなど、地域的な個性も見られたのもこの頃である。

土器の上でも後期になると北東北には十腰内遺跡（弘前市）を標識とする十腰内土器様式が強い共通性をもって分布するようになる。なかには壺形土器の肩部や胴部を切断した特殊な土器や、時期は縄文中期末～後期前葉にあたるが狩猟儀礼の様子を表現した土器なども北東北を中心に分布している。

このような独特の雰囲気は、後期中葉には一旦薄れてしまうが、その後また地方色が濃くなっていった。そうして縄文晩期に形成されたのが、華麗で精緻な文様をもつ亀ヶ岡式土器で有名な亀ヶ岡文化である。亀ヶ岡文化は、北海道石狩低地帯から北陸・北関東までの広がりを持つが、その中核的な地域は馬淵川流域・津軽平野・米代川流域そして北上川中・上流域と北東北にあり、岩偶や土面など、この範囲に集中して発見される資料も少なくない。

亀ヶ岡文化の遺跡から発見されるさまざまな形の土器はもちろん、遮光器土偶や漆製品などの出土品は、世界の先史時代の中にあっても卓越した意匠・技術がうかがえ、考古学資料としてだけではなく美術工芸史的にも高く評価されている。また、海岸部では鹿角を素材とした釣り針や銚頭が発達し後の水産国・日本の技術的原型を形成したのも後期後半から晩期にかけての頃であった。これらの骨角製漁労具の多くには秋田産などのアスファルトが装着固定剤として用いられるなど、広域的な物資流通システムがそれ以前にもまして展開したことを示している。植物食料を基盤としながらも、狩猟犬を用いた弓矢猟やマダイ・マグロそしてイルカやクジラなどの海生哺乳類までを対象とした漁労技術の発達には、単に食料獲得活動だけにとどまらず、おそらく威信的行為として行われたに違いないであろう。

このように縄文時代後晩期、北東北に発達した亀ヶ岡文化は、先史時代の狩猟採集社会の中にあっても物質文化ばかりか精神文化の面でも高度に発達を遂げた社会であったといえる。

## 弥生・古墳時代

砂沢遺跡（弘前市）で発見された水田跡は、弥生時代前期に稲作技術が津軽平野に及んでいたことを明らかにした。

かつて北東北の地は、ヤマセに象徴される冷涼な気候、古代蝦夷<sup>えみし</sup>に対する文献史料解釈そして当時の農耕技術レベルなどから弥生時代に稲作が行われていたことについて否定的であった。しかし、1981年秋、垂柳遺跡（田舎館村）での水田発見、そしてその後の北部九州の弥生前期に位置づけられる遠賀川式土器の系譜につながる土器がつぎつぎに発見されるなど、西日本から短期間に北東北へ稲作を含む文物が伝わったことを明らかにしたのである。

このような稲作技術は、仙台平野など東北南部では、その後継続して展開し、やがて古墳時代を迎えることになる。だが、津軽平野など北東北では弥生後期になるとそれまであった水田が衰退してしまう。おそらく縄文以来の伝統的な狩猟・採集活動の見直しと畑での雑穀栽培を中心とする食料体制に変化したのであろう。むしろ、このような変化・適応こそが北東北の資源利用としてふさわしく、稲作を棄て、多様な食料を活用する方向を主体的に選択した人々であったと北東北のこのような時代・文化を評価すべきであろう。この頃から古墳時代にかけて北海道との共通性が強まることも見逃せない動きである。

ところで弥生後期から古墳時代にかけての集落遺跡は北東北には非常に少ないようである。この希薄さは、当時の人々が水田を中心に一定の場所に定着するような生活ではなく、広範囲にわたって移動を繰り返していたことをうかがわせる。おそらく、このような非定住的な生活が展開していたため、古代国家の版図に組み込まれる社会的基盤が少なかったのであろう。

角塚古墳（胆沢町）を最北とし、北東北には6世紀をさかのぼる古墳は築造されなかった理由として、このような背景が考えられる。しかし、古墳文化の影響がまったくなかったわけではない。古墳時代の須恵器や鉄製品・装飾品などが、北海道系の土器などと共に、墓から発見されている。このことは、東日本から北方世界を含む広い範囲で当時の北東北の人々が活動していたことをうかがわせる。まさに、弥生文化・古墳文化とも一線を画する独特の文化が形成されていたことを象徴しているのであろう。

### **古代：奈良時代 在地「蝦夷集団の政治的成長」**

8世紀初頭には陸奥国、出羽国が置かれ、東北経営の拠点として、多賀城（宮城県多賀城市）の造営と、出羽柵の山形県庄内地方から清水岡（秋田市）への移設が行われている。多賀城碑には、「今日を去ること1500里、蝦夷国界を去ること1200里」などと記され、平城京から見て、文化果てる地域ではなく「蝦夷国」としての何かがあったことが示唆されている。

一方、城柵の造営には官道の整備が伴うことになるが、平城京から多賀城に至る東山道は、7世紀半ばには、雄勝城（羽後町、仙北町「払田柵」の説もある）へ、さらに笹谷峠（宮城県・山形県）越えて庄内から出羽柵に達し、また出羽柵は秋田城と改称されることになる。

こうした官道は、8世紀中葉に我が国で初めて陸奥国から金が産出（宮城県涌谷町）したこともあって、新たな交流の舞台として移民の導入や広範な交易のルートとなり、

稲作が再北上するとともに、「蝦夷」集団の政治的成長を促すことになる。丹後平古墳群（八戸市）や熊堂古墳群（花巻市）、江釣子古墳群（北上市）の造営、そこから発見される帯金具や和同開珎、蕨手刀などは、古代律令国家との接触の中で「蝦夷」社会にも族長層が成長したことを示している。

なお、8世紀には、朝鮮北部からアジア大陸北東部に領域を持った渤海国の国使が6回、出羽国に来着しており、秋田市以北の日本海沿岸に、大陸を含む北方世界との交易ルートが存在していたことは確実である。

## 古代：平安時代（1） 「<sup>えみし</sup>蝦夷戦争」の展開と<sup>とうい</sup>東夷政策の転換

しかし、古代律令国家によるこうした勢力拡大、すなわち「東夷」の開拓の動きは、在地「蝦夷」社会との長い戦乱の時代を招くことになる。

8世紀後半の伊治公皆麻呂の蜂起と多賀城焼き打ち以後、蝦夷と律令国家は本格的な抗争へと発展し、その範囲は出羽国にも拡大していく。

両国の「蝦夷」の結束に対し、数万の大軍をもってしても戦果をあげることができず、「征夷大將軍近衛権中将陸奥出羽按察使従四位上兼行陸奥鎮守府將軍」と「辺要」国官の最高役のすべてを兼任させ、準備に4年の歳月を費やし、4万の軍を動員した9世紀初頭の坂上田村麻呂の第3次遠征による大墓公阿弋流為の降伏まで22年間、18回に及び「征夷」が繰り返されることになる。

坂上田村麻呂は、802年、胆沢城（水沢市）を築城、多賀城に代わる最大の軍事拠点として鎮守府北上を成し遂げるとともに、翌年には志波城（盛岡市）を築く。

その後も、征夷將軍文室綿麻呂による閉伊、爾薩体（岩手県北部）への進攻や徳丹城（矢巾町）の築城にもかかわらず、「蝦夷」の反乱は続き、9世紀後半には出羽国において古代「蝦夷」問題に終止符を打つ大乱といわれる「元慶の乱」が起り、秋田城が陥落する。「元慶の乱」は、出羽権守に任じられた右中弁藤原保則と鎮守府將軍に専任された前左近衛將監小野春風らが、秋田城下の「俘囚」村の協力を得て、反大和政権側の要求を大幅に認めることで2年後、終息に向う。

## 古代：平安時代（2） 「炎立つ」戦乱と平安政権への結実

11世紀半ば以降における前九年合戦、後三年合戦の勃発は、「元慶の乱」以後、200年近く、「蝦夷」問題の終結を信じてきた朝廷に、大きな衝撃を与えることになる。それはまた、古代集権国家から、中世分権国家が成立していく上でのひな型を提示するものでもあった。

「東夷の酋長」の系譜とされる安倍氏は、北上川一帯の奥六郡（胆沢、江刺、和賀、稗抜（稗貫）、志和（紫波）、岩手）に「柵」を築き、鎮守府の権限を凍結、実質的な押領使として、陸奥という辺境の在地勢力を統合し、政治的・軍事的同族連合体の頂点に立っていたと考えられている。

そして、「奥六郡の主」「奥六郡の司」と称した安倍頼良（頼時）による賦貢揺役の拒否、衣川以南への進出が契機となり、12年間にわたる「前九年合戦」となる。朝廷は、東国武門の棟梁、源頼義を陸奥守に任じ追討に当たらせるが、総軍事力は優に2万に達し、常時1万人前後の動員が可能だったとされる安倍氏の前に敗戦は続く。頼

良の死後、子の貞任もまた源氏を寄せ付けず、戦況が逆転するのは、頼義が「常に贈るに珍奇を以ってし」「名簿をささげて（従者の誓いを立て）」数年にわたって招請し、ようやく腰を上げた「出羽山北の俘囚の主」清原真人光頼の加勢によるものであった。それでも光頼自らは動かず、弟の武則に精鋭1万余を預けて出陣させたのは、同じ東北に生きる安倍氏への惻隱の情であったともいわれている。そして、安倍氏は、陸奥国よりも半世紀早く豊かな穀倉地帯に変貌していた雄物川沿いを基盤とする武則の遠謀深慮の戦略により、「厨川柵」（盛岡市）で滅亡する。

「前九年合戦」の後、清原武則は東北人として初めて鎮守府将軍に任ぜられ胆沢城に入り、清原氏は本拠の「山北三郡」（雄勝、平鹿、山本（現仙北郡）。比羅保許山以北）に加え、安倍氏領有の奥六郡も所有し、源平に並ぶ国司級の武門として飛躍的に勢力を拡大していく。そして、「前九年合戦」から約20年後の11世紀後半、「後三年合戦」が起こる。この合戦は、同族共同支配の段階から、鎮守府将軍真衡によるピラミッド型の家父長的専制支配体制、武門棟梁化への急激な転換に伴う清原氏内部での摩擦・抗争を基本的な背景にしていると考えられている。

「後三年合戦」は、前段は真衡の病死で停戦を迎えるが、陸奥守として赴任してきた源義家が、奥六郡のうち、清衡（真衡の義弟）に胆沢、江刺、和賀という肥沃な農耕地が広がる三郡を与え、家衡（真衡の弟、清衡の異父弟）には北の三郡を分与したことから後段に入っていく。それは、清原氏一族の内紛から、兄義家の苦戦を聞いた（新羅三郎）義光の参戦等も含め、義家・清衡同盟を介して一気に奥羽への支配権拡大を目指す源氏と、清原氏との対立という構図であり、数万の軍勢による激しい攻防の末、兵糧が尽きた清原氏は、開戦から4年後「金沢柵」（横手市）で滅亡することとなる。一方、朝廷は、義家の介入を「私戦」として位置付けた。このため、恩賞を受けられなかった武士たちに対し、義家は「私財」を以て論功行賞を行ったという。このことにより義家、引いては源氏に対する「奉公」意識が高まり、現在まで伝わるさまざまな義家伝説をも残した。

### 古代：平安時代（3） 奥州藤原氏「黄金の世紀」

12世紀初頭、藤原清衡が奥羽の覇権を掌握し、まず手掛けたのは白河関（福島県白河市）から外ヶ浜（青森市）に至る、史上初めての東北縦断ルート、奥大道の開発、整備だったとされている。奥大道の整備は、現在の青森県や岩手県北部、秋田県北部を藤原氏の統治下に組み込んだばかりではなく、千島・沿海州を含む広大な北方世界からの物産の調達、運用システムの生命線として機能することになる。軍事的な立地条件に加え、奥大道のほぼ中央に位置し、また太平洋沿岸を経て、東南アジアに連結する博多湊（福岡県博多市）に至る北上川舟運の要衝にあるのが平泉（平泉町）であり、12世紀におけるこの東日本唯一の都市は、安倍氏の果たせなかった衣川関を南下して建設され、交易ネットワークに立脚したターミナル都市として、100年の栄耀を誇っていく。

平泉の繁栄は、こうした国際化の波とリンクした商社的機能による経済力を基盤に、奥羽の「省帳田文」を平泉が占有し、「国司、目代のほか、みな秀衡が進退なり」（自由な支配）という圧倒的な政治力と、両軍を「虜略」（武力による占領）する17

万騎とも 18 万騎ともいわれた軍事力の「猛勢」を手中に形成されたものと考えられる。そして、鎌倉幕府（神奈川県鎌倉市）よりも約 1 世紀早く、壮大な「国土計画」の下に、“京都一極集中”に終止符を打ち、奥羽に君臨した権勢の端的な象徴は、仏国土ともいべき一在地勢力による未曾有の寺院建立にあった。

例えば、初代清衡は、奥羽 1 万余の村落に寺堂を築き仏性油田を寄進するとともに、奥大道の 1 町（約 109m）ごとに金の阿弥陀像を図絵した笠卒塔婆を立てたと伝えられる。そして、奥大道の中央部に、それらの総本山のように造営されたのが中尊寺であり、奥大道の往来は寺域内の山頂に建立した多宝寺の関門を通る仕組みとなっていた。「寺塔四十余宇、禅坊三百余宇」といわれた中尊寺の中でも大長寿院（二階大堂）は、摂政藤原道長造営の法成寺九体阿弥陀堂（京都市）にもない三丈（約 9m）の本尊と丈六（約 4.8m）脇侍九体を擁し、高さは五丈（約 15m）で、釈迦堂は百体の釈迦如来像を安置していた。また、奥州藤原氏四代が眠る金色堂は、堂内の壁や柱はもとより、軒や外側にまで漆を塗り、その上に金箔を押し、内陣についても象牙や琉球諸島以南でしか採れない夜光貝等を用いながら、金蒔絵、螺鈿、透彫金具を施し、瑠璃を散りばめ、蝶や宝相華、孔雀といった高尚な装飾文様、定朝様の仏像などによって隅々まで埋め尽くした平安工芸の至宝精華といわれ、建造物の「国宝」第 1 号として、その財力を今に伝えている。そのほか、「紺紙著色金光明最勝王経金字宝塔曼荼羅」等の意匠の素晴らしさ、技術の確かさは、奥州藤原氏が摂取した文化の質の高さ、裾野の広さを物語るものといえる。

また、二代基衡は、清衡を引き継ぎ「堂塔四十余宇、禅坊五百余宇」といわれた毛越寺の造営に取り組む。毛越寺は、全国で最初の「特別名勝」の指定を受けた東西 180 m 強の浄土庭園、大泉池や復元された遣水等を残すのみであるが、かつては二階惣門（南大門）をくぐり、橋伝いに中島を越えて対岸に渡れば、左右に各東西約 18m、南北約 60m の翼廊が延び、金銀、紫檀赤木等の万宝を尽くし、「荘厳においては吾朝無双」と評された金堂（円隆寺）、その左隣には同様の規模を持つ嘉勝寺の二大伽藍が立ち並び、ほかに講堂、常行堂、法華堂等が軒を連ねていた。円隆寺自体、白河法皇の御願により半世紀をかけて造営された法勝寺（京都市）にならった巨大伽藍であり、仏師雲慶が作った本尊丈六仏と十二神将を安置し、関白藤原忠通自筆の額が掛けられ、その建立中、平泉と平安京を往復する荷駄は山道海道とも絶えることがなかったと記録されている。さらに三代秀衡は、無量光院（新御堂）を造営する。無量光院は、関白藤原頼通建立の宇治平等院（宇治市）を模したといわれるが、左右の翼廊の広がりを東西に各約 4m、南北方向に約 3m さらに延ばし、池は周囲にめぐらせ、堂の前面には中島を設けて 3 棟の建築物を配するなど、平等院鳳凰堂の規模を上回るものであった。

なお、奥羽の実質的な政庁だった平泉館（柳之御所遺跡）については、その発掘調査の結果、台地の中心部 6 万 1 千㎡に大小さまざまな建物が並び、それを上幅約 13.7 m、深さ 4.6m の堀で取り巻き、その西側に家臣団の居住空間が配置されており、ここからは日常生活用品や遊伎品等に加え、15 トンに達するカワラケ（饗宴に用いた使い捨ての酒器）や大型の渥美、常滑（愛知県）等の国産陶磁のほか、中国福建省産の白磁や青白磁、さらには北方文化圏とのかかわりを示唆する内耳鉄鍋など、大規模

生産と広域的流通を示す遺物が大量に出土している。

12世紀半ば、「保元の乱」をさかいに、時代の主役は公家から武士に移る。そして12世紀後半、後白河法皇の都城である平安京と、源頼朝を棟梁とする鎌倉の対決が、奥州藤原氏の出方次第で決まる、そういう三極鼎立の政治状況が三代秀衡によって作り出される。それ以前にも源義経が秀衡に庇護を求めたのは、平氏の支配を平泉が寄せ付けず独立を保っていたことによるとされるが、当時の源平を合わせたよりも多い「奥州十七万騎」を抱える秀衡を、後白河法皇は平氏牽制のため鎮守府将軍に登用し、また頼朝挙兵後は平宗盛が陸奥守に任じ、さらに源義仲は院庁下文を発するなどして、鎌倉の背後を衝くよう繰り返し要請する。この間、都では秀衡決起の噂が再三流れるが出兵はなく、頼朝もまた平泉から参じた義経を平氏追討に重用しながら敵意のないことを示すとともに、自らはその脅威を理由に鎌倉を動かなかった。

平氏の滅亡後、頼朝に疎まれた義経は、青春期の6年間を過ごし、鎌倉の圏外で隠然たる権勢を守る秀衡の下に帰る。追討の宣旨が出されていた義経の受け入れは、中央に対する長年の不干渉主義の放棄と頼朝との対決を意味するが、「北方の王者」には軍事的天才を迎えるという十分な勝算があったと考えられる。

しかし、義経到着から8か月後、秀衡は没し、その存命中は「奥御館」と呼び、他方で調伏密議を行い、上洛さえできなかった頼朝は、時を移さず四代泰衡を攪乱して義経を自害に追い込み、奥羽が再び力を結集する前に「私の宿意」による「奥州征伐」を果たす。秀衡の死から1年10か月後、頼義、義家の二代にわたる源氏の遺恨は、百年を経て末孫により達成され、頼朝は宿願の征夷大將軍の座を手にするようになるのである。しかし、そのわずか14年後、北条氏が執権に就任、30年後には実朝が殺害され、源氏正統もまた断絶を迎える。

平泉における仏教を根元とする統治政策にかかわって、初代清衡は「中尊寺建立供養願文」の中で、敵味方を含め度重なる戦乱によって亡くなった多くの霊を鎮魂すること、辺境として侮蔑を受けてきた奥羽に都と同じような伽藍を造営し、対等の扱いを受けるようにしたいという心情を述べている。平泉の「黄金の世紀」は、そうした施政と英知によってもたらされ、その収穫物を有効に利用し奥羽に還元することによって支えられたともいわれる。奥州藤原氏の滅亡とともにターミナル都市平泉の繁栄が終焉したことは、平泉が奥州藤原氏の支配力、吸引力そのものに基づく政治都市であったことを示している。そして、その滅亡によって、東北はアイデンティティを失い、“もう一つの日本”として存立してきた北東北も中央の版図に組み込まれることになるのである。

## 中世 「国際貿易港」十三湊の繁栄

奥州藤原氏の滅亡後、鎌倉幕府の御家人が守護、地頭として配され、奥羽もその領地となっていく。しかし、津軽地方のみは、「前九年の役」で滅んだ安倍貞任の子高星丸の後裔を称し、執権北条氏の代官職として蝦夷管領に任ぜられた在地勢力、安東氏（安藤氏）の支配に委ねられる。安東氏も「奥州夷」とみなされていたが、平泉の北方貿易のルートの一つでもあったといわれる十三湊（市浦村）を拠点に、最盛期には蝦夷地（北海道）にも志海苔館（北海道函館市）、茂別館（同上磯町）など12の館を

持ち、南は土先湊（秋田市）にまで勢力を伸ばし、歴代当主は「日之本將軍」と呼ばれたと伝えられている。十三湊、土崎湊がともに 13 世紀の『廻船式目』において全国の「七湊」に数えられていることから、安東氏がいわゆる安東水軍による海上交易を基盤とする権勢であったことがうかがえる。そして、近年における調査によって、後世の編纂物等二次的な資料や伝承による推測が限度だった十三湊遺跡の実像が明らかになりつつある。

発掘の結果、遺跡は南北 1.5 km、東西 55m で広さは 55 万㎡に達し、12 世紀頃から港として機能し始め、室町時代初頭の 14 世紀中頃から都市計画が施され、一気に港湾都市化して最盛期を迎え、安土・桃山時代が始まる 16 世紀の後半に途絶えたことが判明している。室町時代の大改修では、砂州を南北に貫くまっすぐな中軸道路を通し、砂州の中央部には東西に延びた幅 16m の土塁と堀を築いて都市域を南北に分け、南側には両側 700m にわたって町屋が軒を連ね、北側には安東氏の居館と推定される 1 辺 100m を超える大型の建築物を中心に家臣団屋敷が造られていた。また、中国製の陶磁器や韓国産の高麗青磁、珠洲焼（石川県）、瀬戸焼（愛知県）、鉄製品、木製品、銅銭、炭化米など、出土物も 3 千点に達しており、「夷船、京船、群集して、櫓先を並べ、舳を調べ、湊は市をなす」といわれた中世日本海交易屈指の国際貿易港、十三湊の繁栄を裏付けている。

しかし、こうして隆盛を極めた十三湊は、15 世紀中頃、安東氏が南部氏との抗争に敗れ津軽を追われたため、同湊も衰退を余儀なくされた。その後、安東氏は、戦国大名として再起し、16 世紀末には秋田氏に改称し、江戸時代常陸国宍戸（茨城県茨城郡）への転封を経ながら、三春藩（福島県田村郡）藩主として、明治維新に至るまで安倍氏の嫡流を保つことになる。

## 近世 商品経済の発展と「西廻航路」「東廻航路」の形成

徳川氏の全国統一により、17 世紀以降の北東北は、幕藩体制の下で、弘前藩、盛岡藩、仙台藩、秋田藩、由利諸藩、幕府領に分割され、統治されることになる。この時期、各藩は、城下町の建設や宿場の設置、街道の整備と並行して、和船（藩船）の建造や船手組織の編成、港湾の整備など、基本的な水上交通路の開拓に主体的に取り組んでいく。

既に 16 世紀末には、珠洲焼や越前焼（福井県）に代わって唐津焼（佐賀県）の日本海流入が示すように、北東日本海経済圏が消滅し、全国的な流通圏が成立していたとされるが、17 世紀後半には東廻航路（日本海～太平洋～江戸）、西廻航路（日本海～瀬戸内海～大坂）が開通する。

年貢米のほか、商品経済の発展に伴う畑作物や海産物、木材、鉱山に対する大量需要への対応を可能としたのは、北前船に代表されるこうした沿岸海運網とこれに結ぶ河川舟運からなる水系であり、それは各流域ごとの固有の文化を育むとともに、18 世紀には、青森や八戸、宮古、能代、土崎など、ターミナルとなった港湾を城下町にも匹敵する都市として成長させることになる。

しかし、明治以降の陸上交通の発達、海岸線に並行して流域と直角に交差する形で進められ、このことが水系の衰退と、自然系（生態的要素）からは乖離し、人工系

(人間的要素)のみに偏寄した、「一極一軸型」(『21世紀の国土のグランドデザイン』)の国土構造をもたらす一因にもなったといわれている。

### (3) 社会資源

社会資源は、社会生活を営む基盤となるもので、産業・経済、都市機能、社会基盤、地域活動などがあげられる。

北東北はこれまで、首都圏や関西圏等と比較して、高速交通体系を始めとする交通基盤や高等教育機関などの面で整備が遅れてきたといえるが、平成14年12月の新幹線八戸駅開業や各県立大学の設置など着実に整備が進められている状況にある。

#### ア 農林水産業

農林水産業の分野では、北東北三県とも食料自給率が100%を超えており、全国的にみた場合、食料供給基地としての役割を担っている。

##### 農業

農業粗生産額をみると、「米」は秋田県の全国第3位を筆頭に、三県合計では2,828億円で、全国の12.2%のシェアを占めている。「野菜」では、青森県の全国第13位を筆頭に、三県合計では1,200億円で、全国の5.7%のシェアを占めている。「果実」では、青森県の全国第3位を筆頭に、三県合計では801億円で、全国の9.9%のシェアを占めている。「畜産計」では、岩手県の全国第11位を筆頭に、三県合計では2,200億円で、全国の8.6%のシェアを占めている。

以上のように、三県がそれぞれ特徴を持っており、りんごなどの「果実」の青森県、前沢牛などの「畜産」の岩手県、あきたこまちなどの「米」の秋田県ということがいえる。

##### 林業

林業粗生産額をみると、「木材生産」では、岩手県の全国第3位を筆頭に、三県合計では3,646億円で、全国の11.3%のシェアを占めている。「薪炭生産」では、岩手県の全国第1位を筆頭に、三県合計では91億円で、全国の14.8%のシェアを占めている。「栽培きのこ類生産」では、岩手県の全国第11位を筆頭に、三県合計では1,052億円で、全国の5.3%のシェアを占めている。

北東北は、「青森ヒバ」、「南部アカマツ」、「秋田スギ」を抱え、森林面積も全国の1割を占めるなど、国産材の一大供給基地となっている。

##### 漁業

漁業・養殖業生産額をみると、「漁業合計」では、岩手県の全国第3位を筆頭に、三県合計では964億円で、全国の7.0%のシェアを占めている。「養殖合計」では、青森県の全国第14位を筆頭に、三県合計では266億円で、全国の5.0%のシェアを占めている。

青森県の八戸港や岩手県の宮古港・大船渡港などを中心に太平洋側で生産額が高く

なっている。

【図表 2-36：農林水産業生産額】

(単位:億円、位、%)

区分	項目	年次	全国順位			値			北東北		全国	全国シェア
			青森	岩手	秋田	青森	岩手	秋田	順位	値	値	
農業粗生産額	耕種計	2000	11	17	15	2,017	1,538	1,794	2	5,349	66,327	8.1
	米	2000	11	10	3	647	874	1,307	1	2,828	23,253	12.2
	野菜	2000	13	26	27	607	304	289	4	1,200	21,195	5.7
	果実	2000	3	18	30	573	144	84	1	801	8,120	9.9
	畜産計	2000	12	11	31	627	1,310	263	2	2,200	25,554	8.6
	牛(肉用牛+乳牛)	2000	24	10	35	224	677	115	2	1,016	19,409	5.2
	豚	2000	8	7	14	185	192	112	2	489	4,921	9.9
	鶏	2000	7	2	31	282	655	65	1	1,002	7,447	13.5
林業粗生産額	林業計	2000	13	5	15	135	223	124	3	4,820	53,110	9.1
	木材生産	2000	8	3	14	122	148	95	2	3,646	32,213	11.3
	薪炭生産	2000	20	1	20	0.4	8	0.4	1	91	616	14.8
	栽培きのこ類生産	2000	30	11	17	13	64	28	3	1,052	19,689	5.3
漁業・養殖業生産額	海面合計	2000	7	12	38	703	481	46	3	1,230	17,612	7.0
	漁業合計	2000	5	3	37	561	358	46	2	964	12,340	7.8
	遠洋漁業	2000	7	11	28	136	72	0.4	4	207	2,120	9.8
	沖合漁業	2000	3	6	35	216	56	13	3	285	4,456	6.4
	沿岸漁業	2000	6	5	37	209	231	32	2	472	5,765	8.2
	養殖合計	2000	14	16	36	142	123	0.6	8	266	5,272	5.0

資料)『生産農業所得統計表』、『漁業・養殖業生産統計年報』、『生産林業所得統計報告書』(農林水産省)

## イ 商工業

商工業の分野では、北東北三県とも工業の分野で産業集積が他地域に比べて低いということや商業の分野で小規模な小売業が中心ということが特徴としてあげられる。

### 工業

「品目別工業製造品年間出荷額」でみると、全国シェアの高いものとしては、「木材・木製品」の5.8%、「精密機械器具」の3.3%、「食料品」の3.1%があげられる。逆に低いものとしては、「石油製品・石炭製品」の0.2%、「化学工業製品」の0.5%、「ゴム製品」の0.5%、「プラスチック製品」の0.8%があげられる。

概観すると、石油や金属などの基礎素材型の工業製造品が少なく、食料品や木材加工品などの第1次産業製品を加工する工業製造品、生活関連型の工業製造品、電気機械器具などの加工組立型の工業製造品が比較的多い(全国シェアが高い)ということができる。

【図表 2-37 : 品目別工業製造品年間出荷額】

(単位:億円、位、%)

区分	項目	年次	順位			値			北東北		全国	全国
			青森	岩手	秋田	青森	岩手	秋田	順位	値	値	シェア
品目別工業製造品年間出荷額	食料品	2001	23	22	44	3,012	3,024	1,012	12	7,048	229,637	3.1
	飲料・資料・たばこ	2001	36	23	42	684	1,652	440	14	2,776	108,801	2.6
	繊維工業・衣類・その他の繊維製品	2001	46	42	43	120	202	198	24	520	40,646	1.3
	木材・木製品	2001	40	17	9	216	597	797	3	1,610	27,791	5.8
	家具・装飾品	2001	43	42	37	62	75	121	28	258	24,602	1.0
	パルプ・紙・紙加工品	2001	20	38	37	1,143	354	365	13	1,862	73,202	2.5
	出版・印刷・同関連品	2001	35	30	41	346	442	262	15	1,050	102,259	1.0
	化学工業製品	2001	41	38	39	312	473	400	33	1,185	228,720	0.5
	石油製品・石炭製品	2001	35	34	37	62	68	58	23	188	94,329	0.2
	プラスチック製品	2001	45	37	41	145	407	176	30	728	96,733	0.8
	ゴム製品	2001	41	38	35	27	44	77	28	148	27,647	0.5
	なめしがわ・同製品・毛皮製品	2001	28	21	27	22	49	23	15	94	5,934	1.6
	窯業・土石製品	2001	39	29	41	625	889	546	15	2,060	82,319	2.5
	鉄鋼	2001	29	28	37	467	494	197	20	1,158	104,394	1.1
	非鉄金属	2001	39	35	33	83	163	255	28	501	57,019	0.9
	金属製品	2001	42	31	39	371	907	531	23	1,809	125,773	1.4
	一般機械器具	2001	42	32	41	723	1,964	890	23	3,577	265,922	1.3
	電気機械機器	2001	39	26	28	2,531	6,350	6,162	13	15,043	500,494	3.0
	輸送用機械器具	2001	42	22	41	135	2,235	261	22	2,631	437,966	0.6
精密機械器具	2001	31	21	18	141	478	658	13	1,277	38,668	3.3	
その他の製造品	2001	44	36	40	69	184	130	28	383	51,089	0.7	

資料)『品目別工業製造品年間出荷額』(経済産業省)

【図表 2-38 : 主な大規模工業団地】

青森県	岩手県	秋田県
八戸インター工業団地 八戸第二臨海工業団地 むつ小川原工業開発地区	盛岡北部工業団地 北上南部工業団地 江刺中核工業団地 北上工業団地 岩手中部工業団地 一関東工業団地	向浜工業団地 秋田北港工業団地

資料)『平成14年度 新幹線を含めた広域交通ネットワーク形成等による都市連携モデル調査』(国土交通省・青森県)

## 商業

「業種別小売業年間販売額」をみると、「食料品」が三県合計で 13,2859 億円、全国シェアが 3.2%と最も高く、逆に「卸売り」が三県合計で 5,820 億円、全国シェアが 1.4%と最も低くなっている。

このことから、北東北においては、産業用（生産業者向け）を始めとした大口取引が少なく、他県の卸売業者から仕入れて事件の小売店・消費者に販売するという小規模な経営が多いことがうかがわれる。

【図表 2-39：業種別小売業年間販売額】

(単位:千万円、位、%)

区分	項目	年次	順位			値			北東北		全国	全国
			青森	岩手	秋田	青森	岩手	秋田	順位	値	値	シェア
業種別小売業年間販売額	合計	2002	28	30	34	36,939	35,258	27,141	13	99,338	5,485,825	1.8
	卸売り	2002	27	28	35	21,579	21,298	15,325	13	58,202	4,134,572	1.4
	小売	2002	26	29	37	15,360	13,960	11,816	10	41,136	1,351,253	3.0
	各種商品	2002	31	34	38	137,889	116,820	95,919	12	350,628	17,318,285	2.0
	織物・衣類・身の回り品	2002	26	32	33	116,157	93,718	91,882	12	301,757	10,980,231	2.7
	飲食料品	2002	27	29	31	471,635	461,101	395,858	11	1,328,594	41,237,595	3.2
	自動車・自転車	2002	27	32	40	188,462	171,022	125,697	11	485,181	16,216,824	3.0
	家具・じゅう器・機械器具	2002	28	35	39	125,015	94,116	81,569	10	300,700	11,883,715	2.5
	その他	2002	25	26	31	496,849	459,215	390,666	9	1,346,730	7,488,673	18.0

資料)『業種別小売業年間販売額』(経済産業省)

## ウ 伝統産業

北東北の山には、日本の三大美林と称される青森ヒバと秋田スギをはじめ、白神山地などにみられるブナ林のほか、ナラ、ウルシその他の多様な雑木林があり、こうした森林資源は木材・木製品工業や伝統工芸品産業の発展に結びついている。木材を原料とした主な伝統工芸品をあげてみると、岩谷堂箆笥や五城目桐箆笥、津軽塗、川連塗などの漆器、温泉、花巻などのこけしなど、多種多様である。

北東北に残る伝統工芸品をみると、近世以前にその源流をみ、江戸時代になって発達したものがあり、代表的なものとしては、津軽こぎん刺し、紫根染、弘前手織などがあげられる。また、江戸時代になって藩の殖産興業の政策のもとに発達したものとしては、南部藩の南部鉄瓶がその代表的なものであり、民間需要に応じて発達伝播したものに、郷土玩具である伝統こけしや木製駒などがあげられる。

これらの伝統工芸品は江戸時代には驚くほどの発達を遂げ、地場産業として形成されてきたが、その多くは近代化の波の中で激減し、消滅を危ぶまれる状態であった。

しかし近年、伝統工芸品の持つ自然の味わいが見直されつつあり、地域の活性化を目指し産業振興が図られている事例がみられる。

伝統工芸品の中には、芸術性豊かな高価なものとなっているものもあるが、多くの工芸品は地域住民の生活と密着しながら成長してきたものである。長い年月をかけて培われてきた工芸品は、いわば北東北の誇るべき文化遺産ともいえる。

【図表 2-40 : 主な伝統工芸品】

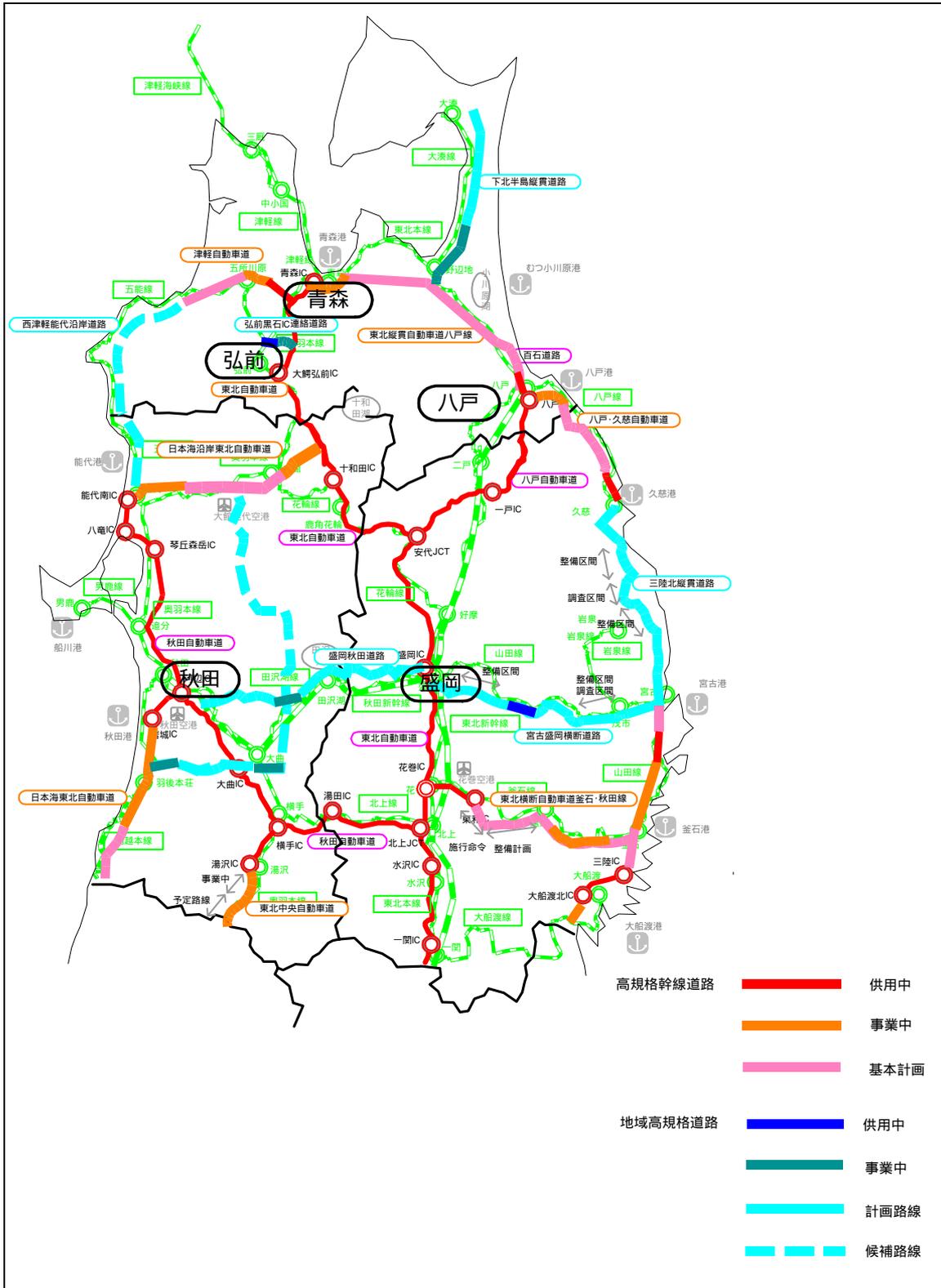
青森県	岩手県	秋田県
南部裂織 こぎん刺し 南部菱刺 津軽焼 八戸焼 津軽塗 津軽竹籠 八幡馬 えんぶり人形・えぼし 津軽凧 南部姫まり 温湯こけし 下河原人形 大鱈ずぐり 大鱈こけし あけび細工 大鱈蔓細工	南部紬 ホームспан 紫根染 南部古代型染 小久慈焼 鍛冶丁焼 南部鉄器 秀衡塗 浄法寺塗 岩谷堂箆笥 根曲竹細工 東山和紙 成島和紙 花巻人形 紫雲石硯	秋田八丈 横手地織木綿 鹿角古代紫根染・茜染 浅舞紋り 白岩焼 檜岡焼 秋田焼 秋田銀線細工 五城目打刃物 川連漆器 能代春慶塗 本荘塗 樺細工 大館曲げわっぱ 秋田杉桶樽 イタヤ細工 五城目桐箆笥 五城目建具 六郷竹細工 川連こけし ごてんまり 八橋人形 能代凧 木地山こけし 中山人形 大曲の花火 戸波ゲラ あけびつる細工 仁井田菅笠 扇田菅笠

資料)『全国伝統的工芸品総覧』

## 工 交通基盤 高速道路

高速道路については、国土開発幹線自動車道の建設計画に従って、東北縦貫自動車道の南北方向への整備が進められていたが、近年東北横断自動車道の釜石秋田線の北上・秋田間が平成9年に開通するなど、東西方向を結ぶ整備が進みつつある。

【図表 2-41：高速道路網等の現状と計画】



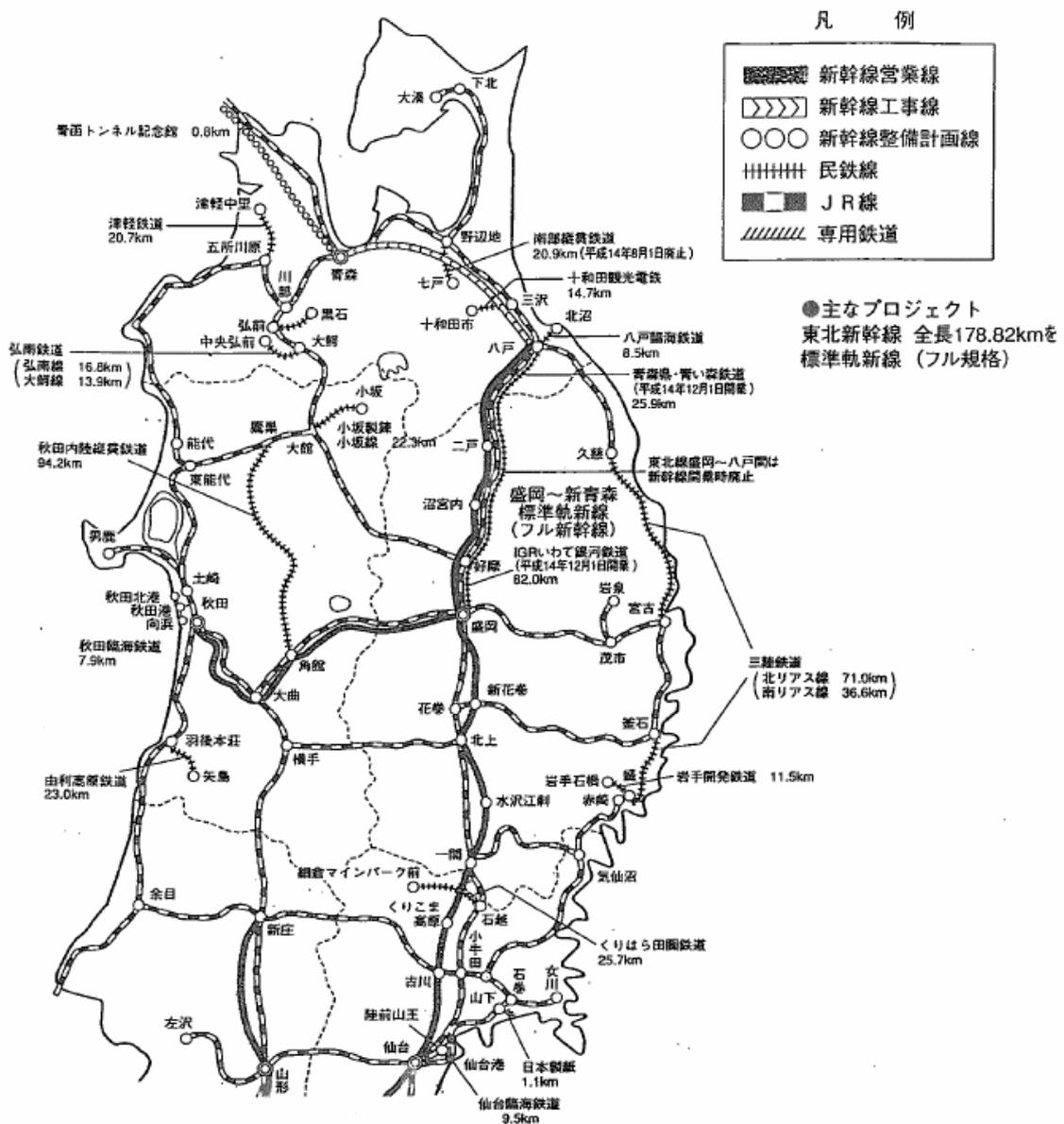
資料)『平成 14 年度 新幹線を含めた広域交通ネットワーク形成等による都市連携モデル調査』(国土交通省、青森県)

## 新幹線

新幹線については、昭和 57 年の東北新幹線盛岡駅開業、平成 9 年のいわゆるミニ新幹線として秋田新幹線開業に続き、平成 14 年に東北新幹線八戸駅が開業したことで、ようやく北東北 3 県すべてに新幹線が乗り入れることになった。

現在は、青森県の県庁所在地である青森市への新幹線乗り入れを目指し、整備が進められている。

【図表 2-42：鉄道路線網及び主な鉄道整備プロジェクト】



資料)『平成 14 年度 新幹線を含めた広域交通ネットワーク形成等による都市連携モデル調査』(国土交通省、青森県)

## 港湾

港湾については、青森県の八戸、大湊、青森、むつ小川原、岩手県の宮古、大船渡、久慈、釜石、秋田県の秋田、船川、能代という 11 の重要港湾がある。

中でも、太平洋側に開かれた八戸港は、北米や東南アジア等への、日本海側の秋田港は中国・韓国・ロシア等への国際定期コンテナ航路を有しており、その地理的条件を活かして貨物取扱量を年々拡大させている。

【図表 2-43：主な港湾】

県名	港湾名	重要港湾 指定年月	港湾区域 面積(ha)	臨港地区 (ha)	バース数	最大水深 (m)	トン数 (千t)
青森県	八戸港	昭和26年1月	3,136	625	22	14.0	50
	大湊港	昭和44年4月	1,296	149	12	7.5	5
	青森港	昭和26年1月	4,754	140	11	13.0	40
	むつ小川原港	昭和52年9月	7,172	992	2	7.5	5
岩手県	宮古港	昭和26年1月	540	66	10	12.0	30
	大船渡港	昭和34年6月	1,033	119	5	13.0	40
	久慈港	昭和50年4月	1,739	117	4	10.0	12
	釜石港	昭和26年9月	842	44	1	7.5	5
秋田県	秋田港	昭和26年1月	2,770	714	17	13.0	50
	船川港	昭和26年1月	2,824	253	4	10.0	15
	能代港	昭和56年5月	2,251	276	4	13.0	40

資料)『豊かさが語る東北の魅力』(財団法人東北開発研究センター)を基に一部修正し、作成  
注)バース数は推進7.5メートル以上の公共埠頭を掲載。

### ④ 空港

空港については、青森県の青森、三沢、岩手県の花巻、秋田県の秋田、大館能代の 5 空港があり、羽田空港や新千歳空港を始め、関西、九州等に空のネットワークが形成されている。

また、青森空港はロシアハバロスクや韓国ソウル、秋田空港は韓国ソウルへそれぞれ国際定期便を抱えている。

【図表 2-44：空港施設】

県名	空港名	種別	総面積(m <sup>2</sup> )	滑走路(m)	供用開始
青森県	青森空港	第三種	2,299,085	2,500×60	平成2年3月
	三沢飛行場	共用飛行場	1,600(ha)	3,050×45	—
岩手県	花巻空港	第三種	1,520,544	2,000×45	昭和58年3月
秋田県	秋田空港	第二種	1,588,900	2,500×60	昭和56年6月
	大館能代空港	第三種	1,214,240	2,000×45	平成10年7月

資料)各県担当課資料による。

## オ 物流

北東北の物量状況を代表輸送機関別の年間出荷量でみると、トラックが3県合計で全体の84.5%と大半を占めており、次いで海運の10.0%となっている。

【図表 2-45：代表輸送機関別にみた年間出荷量】

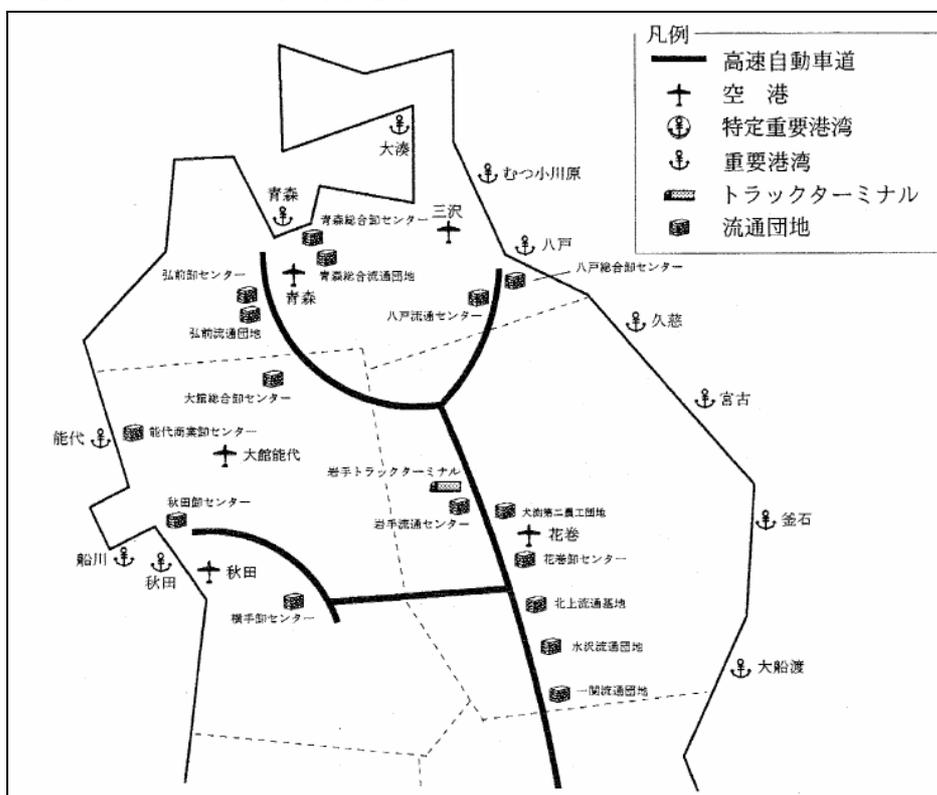
(単位:トン、%)

区分	鉄道	トラック			海運	航空	その他	合計	
		自家用	営業用	計					
青森県	出荷量	302,488	13,886,429	13,743,959	27,630,388	6,874,921	84	4,487,073	39,294,954
	構成割合	0.8	35.3	35.0	70.3	17.5	0.0	11.4	100.0
岩手県	出荷量	156,220	11,715,489	23,954,210	35,669,699	3,126,949	3,489	288,269	39,244,626
	構成割合	0.4	29.9	61	90.9	8.0	0.0	0.7	100.0
秋田県	出荷量	328,473	11,988,207	12,719,182	24,707,389	442,269	2,668	91,803	25,572,602
	構成割合	1.3	46.9	49.7	96.6	1.7	0.0	0.4	100.0
北東北	出荷量	787,181	37,590,125	50,417,351	88,007,476	10,444,139	6,241	4,867,145	104,112,182
	構成割合	0.8	36.1	48.4	84.5	10.0	0.0	4.7	100.0

資料)『第7回全国貨物純流動調査(物流コンサス)』(国土交通省)

注)北東北の欄は、3県の単純合計である。

【図表 2-46：主な物流施設図】



資料)『東北の物流』(国土交通省東北運輸局)を基に作成

## カ 高等教育機関

高等教育機関については、弘前大学、岩手大学、秋田大学の国立大学を始めとして、多数の大学・短期大学・専門学校等があり、人材育成等に貢献してきている。

特に、平成10年に岩手県立大学、平成11年には秋田県立大学と青森県立保健大学が設置されるなど、看護、社会福祉、コンピュータなどの新たな社会的ニーズを踏まえた県立大学の設立が近年目立っている。

さらに、平成16年4月には秋田県に県立国際教養大学が設立される予定となっており、北東北における国際教育の中心となることが期待されている。

【図表2-47：大学（4年制）・大学院】

区分	大学名	設立形態	所在地	学部	設置
青森県	弘前大学	国立	弘前市	人文学部、教育学部、医学部、理工学部、農学生命科学部 【大学院】 人文社会学研究科、教育学研究科、医学研究科、理工学研究科、農学生命科学研究科、地域社会研究科	昭和24年5月
	青森公立大学	公立	青森市	経営経済学部 【大学院】 経営経済学研究科	平成4年12月
	青森県立保健大学	県立	青森市	健康科学部 【大学院】 健康科学研究科	平成10年12月
	青森大学	私立	青森市	経営学部、社会学部、工学部 【大学院】 環境科学研究科	昭和43年3月
	青森中央学院大学	私立	青森市	経営法学部	平成9年12月
	東北女子大学	私立	弘前市	家政学部、家政学専攻科	昭和44年2月
	八戸大学	私立	八戸市	商学部	昭和56年1月
	八戸工業大学	私立	八戸市	工学部 【大学院】 工学研究科	昭和47年1月
	弘前学院大学	私立	弘前市	文学部、社会福祉学部 【大学院】 社会福祉学研究科	昭和46年1月
岩手県	岩手大学	国立	盛岡市	人文社会科学部、教育学部、工学部、農学部 【大学院】 人文社会科学研究科、教育学研究科、工学研究科、農学研究科、大学院連合農学研究科	昭和24年5月
	岩手県立大学	県立	滝沢村	看護学部、社会福祉学部、ソフトウェア情報学部、総合政策学部 【大学院】 社会福祉学研究科	平成9年12月
	岩手医科大学	私立	盛岡市	医学部、歯学部 【大学院】 医学研究科、歯学研究科	昭和27年2月
	富士大学	私立	花巻市	経済学部 【大学院】 経済・経営システム研究科	昭和40年1月
	盛岡大学	私立	滝沢村	文学部	昭和56年1月
秋田県	秋田大学	国立	秋田市	教育文化学部、医学部、工学資源学部 【大学院】 教育学研究科、医学研究科、工学資源研究科	昭和24年5月
	秋田県立大学	県立	秋田市本荘市	システム科学技術学部、生物資源科学学部 【大学院】 システム科学技術研究科、生物資源科学研究科	平成10年12月
	秋田経済法科大学	私立	秋田市	経済学部、法学部	昭和39年1月

資料)『平成13年度全国大学一覧』

【図表2-48：高等専門学校】

区分	名称	設立形態	所在地	学 科 等	設 置
青森県	八戸工業高等専門学校	国立	八戸市	機械工学科、電気工学科、物質工学科、建設環境工学科、専攻科	昭和38年4月
岩手県	一関工業高等専門学校	国立	一関市	機械工学科、電気情報工学科、制御情報工学科、物質科学工学科、専攻科	昭和39年4月
秋田県	秋田工業高等専門学校	国立	秋田市	機械工学科、電気工学科、物質工学科、環境都市工学科、専攻科	昭和39年4月

資料)『平成13年度全国大学一覧』

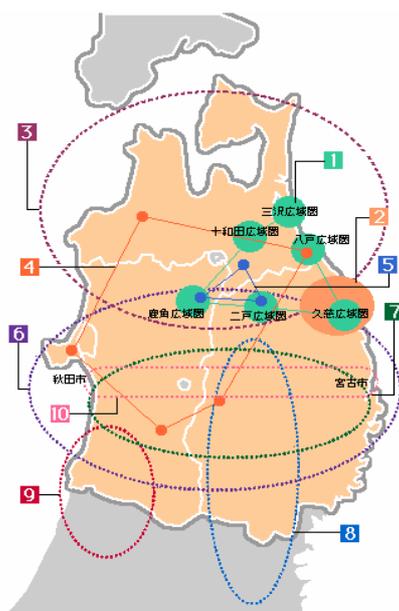
## キ 地域連携（広域連携）

北東北3県は、平成11年10月に北東北地域の連携の基本的指針として『北東北広域連携構想』を策定している。

また、この構想の着実な推進を図っていくため、北東北の民・官・学からなる「北東北広域連携推進協議会」を平成12年2月に設立し、広域連携推進に向けた様々な事業を実施している。

さらに、これ以外にも北東北には、県境を越えた連携活動を行っている事例（民間を中心としたものや行政を中心としたもの）が多数みられる。

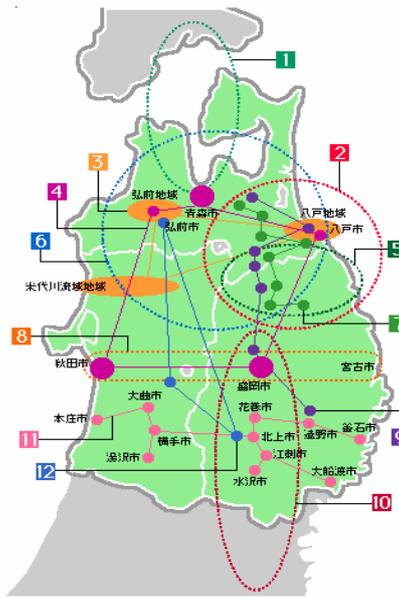
【図表 2-49：民間を中心とした連携活動の事例】



番号	名称	設立	主な構成団体等
1	南部州デザイン会議	H4~	八戸商工会議所、やませデザイン会議、八戸・十和田・三沢・鹿角・二戸・久慈青年会議所、個人会員
2	NPO法人やませデザイン会議	H4~	久慈市を始めとした6市町村の青年会議所
3	北東北Aライン地域連携軸連絡協議会	H13~	青森県、岩手県北部、秋田県北部に所在する10の商工会議所及び商工会青年部
4	みちのく五大雪まつり推進協議会	S55~	八戸市、弘前市、男鹿市、横手市、零石町、各観光連盟等
5	トライアングルサミット	H5~	青森県、岩手県、秋田県の県境に位置する田子町「タブコブ町民塾」、浄法寺町「カシオペア桂泉塾」、鹿角市「大湯浪漫塾」
6	北東北交流連携倶楽部	H8~	岩手県・秋田県の個人
7	「北緯40° Bライン」連携軸推進協議会	H7~	岩手県、秋田県の中南部に位置する12の商工会議所青年部
8	NPO法人北上川流域連携交流会	H7~	岩手県、宮城県、首都圏等の個人
9	環島海地域づくり研究会	H8~	環島海エリアの本荘由利、湯沢、新庄、酒田、鳥海の五つの青年会議所
10	NPO法人秋田岩手横軸連携交流会	H12~	岩手県、秋田県等の個人

資料) 北東北広域連携推進協議会ホームページ

【図表 2-50：行政を中心とした連携活動の事例】



番号	名称	設立	主な構成団体等
1	青函インターブロック交流圏構想推進協議会	S63～	青函地域の産・学・官
2	北奥羽開発促進協議会	S42～	青森県南地域19市町村、岩手県北地域13市町村及び秋田県北東地域2市町村
3	北東北地方拠点都市地域連携・交流会議	H8～	八戸地域、弘前地域及び米代川流域の三つの地方拠点都市
4	北東北都市間ネットワーク懇談会	H8～	青森市、弘前市、八戸市、盛岡市、秋田市
5	岩手・青森県境農林関係公所長連絡会議	S49～	青森県八戸地方、岩手県久慈地方及び二戸地方の農林関係公所長
6	環十和田プラネット広域交流圏推進協議会	H14 解散	青森県の64市町村、岩手県の13市町村、秋田県の19市町村
7	「戸」のサミット	H5～	青森県の八戸市、七戸町、六戸町、三戸町、五戸町、岩手県の二戸市、一戸町、九戸村
8	秋田・岩手地域連携軸推進協議会	H11～	岩手県の9市、秋田県の7市町村
9	南部首長会議	S59～	青森県の八戸市、南部町、三戸町、七戸町、岩手県の盛岡市、遠野市、二戸市
10	北上川流域市町村連絡協議会	H7～	岩手県の25市町村、宮城県の11市町村
11	北東北地域連携軸構想推進協議会	H7～	岩手県の7市、秋田県の4市
12	みちのく三大桜名所桜サミット	H11～	青森県弘前市、岩手県北上市、秋田県角館町

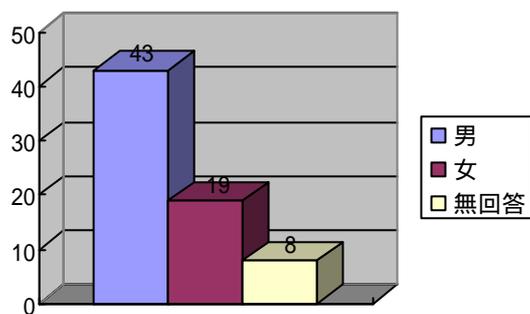
資料) 北東北広域連携推進協議会ホームページ

### 第3編 「北東北」に関するアンケート

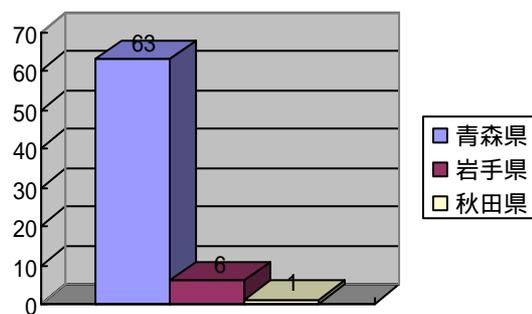
#### 1 北東北学フォーラム・アンケート結果



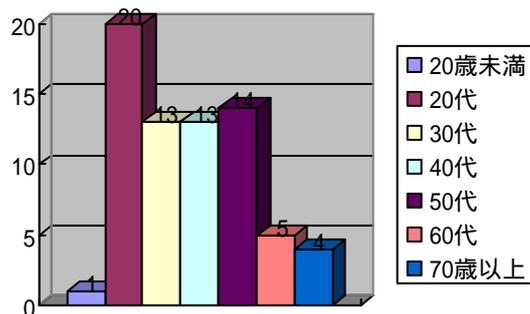
性別



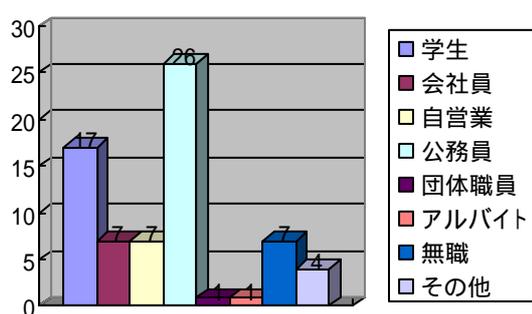
住まい



年齢

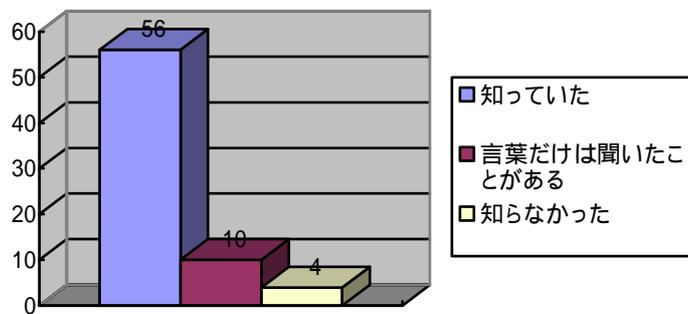


職業

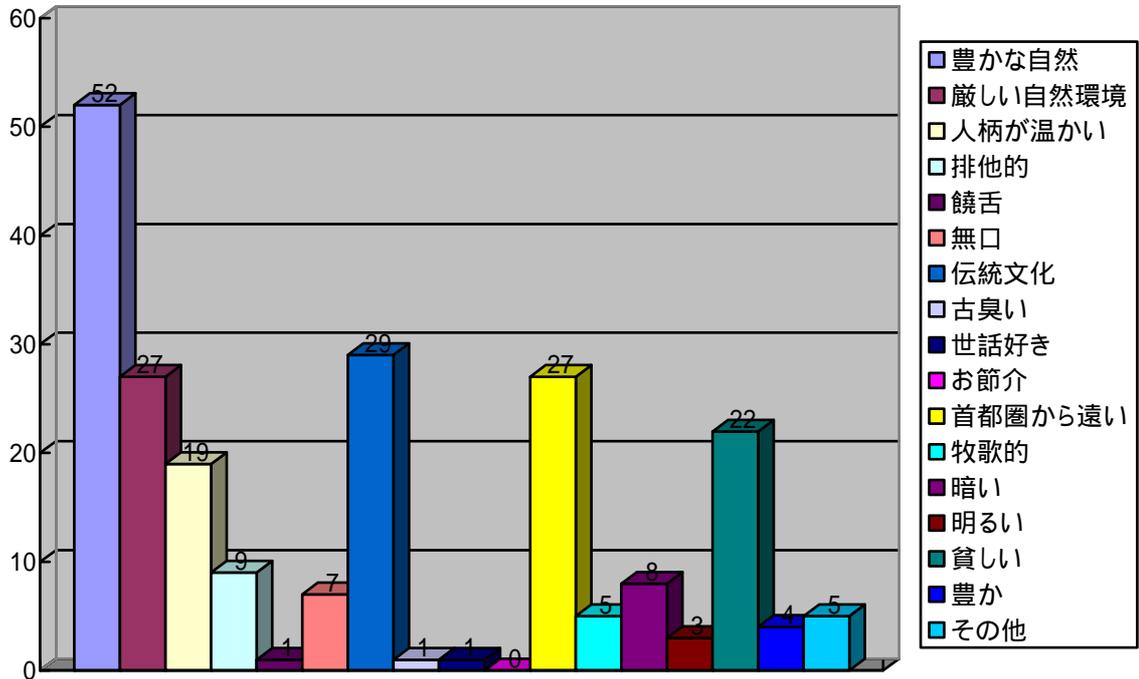


その他……デザイナー……………1名

#### 1 「北東北」という言葉をご存じでしたか(ここでいう「北東北」とは、青森県、岩手県、秋田県の3県を示す言葉です)

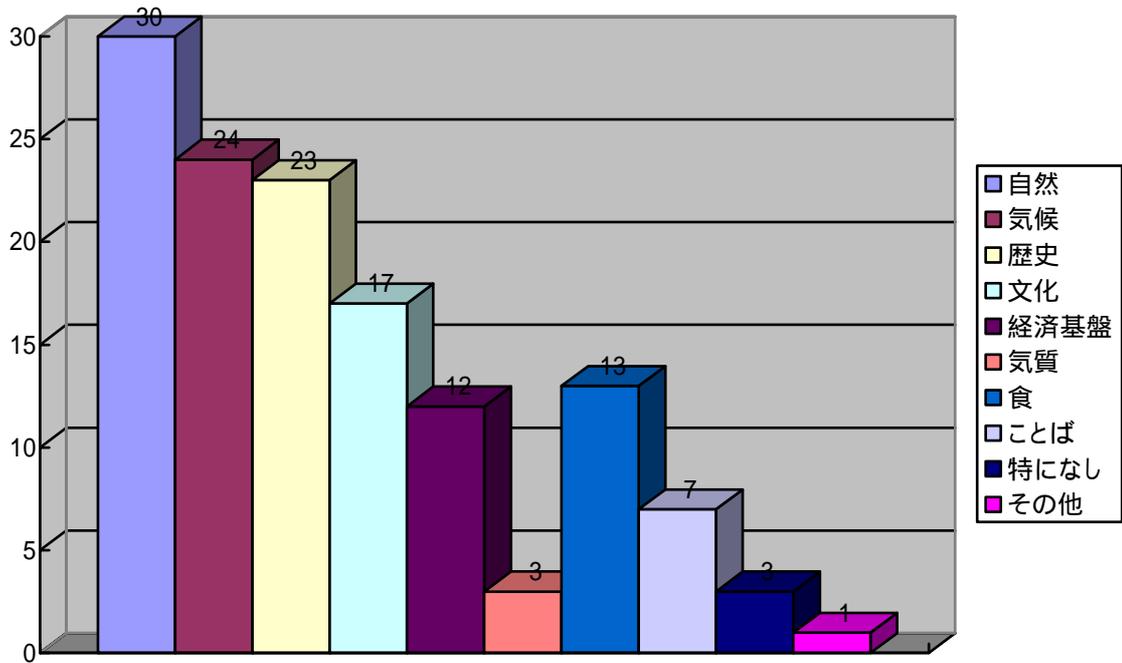


2 北東北についてあなたのイメージを教えてください(3 つまで)



その他…美しい、農と食、農業、林業、第一次産業

3 青森・岩手・秋田 3 県の共通性があるとすれば、何だと思えますか



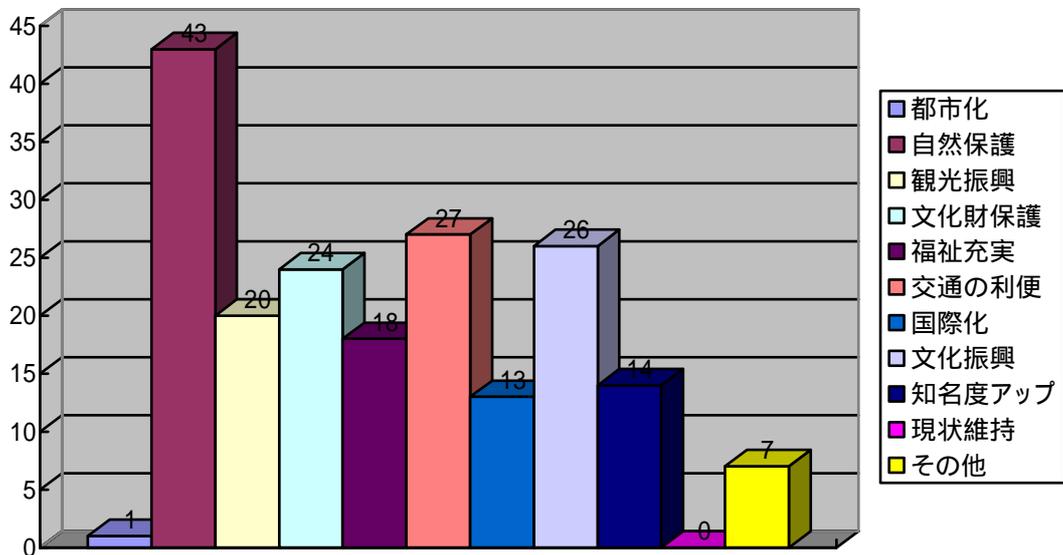
その他……自給自足、エネルギー、農漁業の基盤がある。

#### 4 あなたの暮らす地域の誇れること・自慢できることを具体的に1つあげてください

- 豊かな自然と観光資源
- 人間性が好き
- 豊かな自然と農山村風景と食の豊かな地域
- 自然を体感できる場所が近くにある
- 岩木山が美しいこと
- 弘前公園の景観（2名）
- 夏は過ごし易い
- 豊かな自然（6名）
- 古いものがある
- 自然が残っている事（2名）
- 祭り（ねぶた）（6名）
- 食材（安全、新鮮、豊富）
- 青森ねぶた（但し、外に広めることと同時に市民のためにということを、もう一度再検討して欲しい）
- エネルギッシュな夏祭り
- 自然（緑）
- 新鮮な農水産物
- スローライフのできる、自然豊かな地域
- 郷土芸能（2名）
- 県内で食糧自給が可能であろうこと
- 中央から離れていること
- 弘前城と桜
- 文化施設
- 弘前城跡
- 自然（環境、四季のある自然）（2名）
- 先人が残した物や、事柄について話せる材料が豊富なこと
- 村名に趣きがある
- えんぶり、夜宮といった祭り
- （良い意味で）保守的であること
- リンゴの生産が盛ん（2名）
- 北海道生まれの北海道育ちなので、アイデンティティーは北海道にあります。十勝、東北の一県並の広さ、そしてそれ以上の生産力を持つ。十勝産小麦、小豆、砂糖等を使用した美味しいお菓子
- 地域の歴史を継承し、残していこうとする人々が多い
- 歴史が感じられる
- 文化財が多い（2名）
- 伝統文化
- 昔ながらの城下町

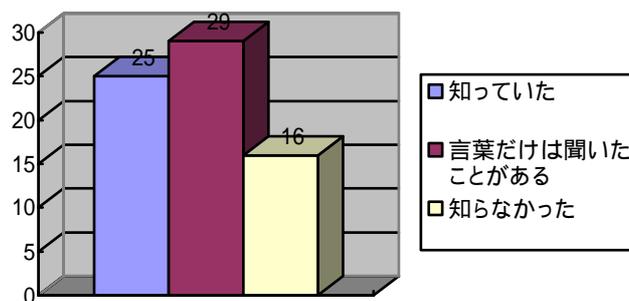
- 桜の美しさ
- 都会なのに空と空気がきれいだと思う
- 人々がやさしい
- 食、食べ物がおいしい
- 壊さない文化がある、守るべきとを感じるものがある
- 津軽三味線、三内丸山遺跡等の歴史・文化
- 農産物が豊かであること
- 夏祭り等の伝統文化
- おいしいホタテ

### 5 これからの北東北に望むことは何ですか(3つまで)

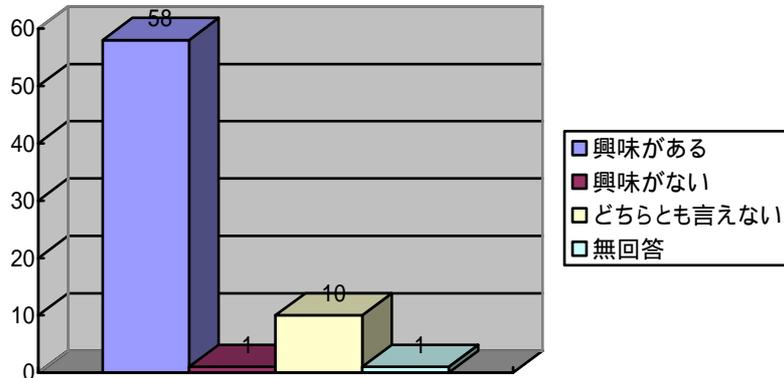


その他……3 県の交流、経済振興、職業・賃金の充実、交流・対流、農業・食糧基地、食糧生産振興、教育。

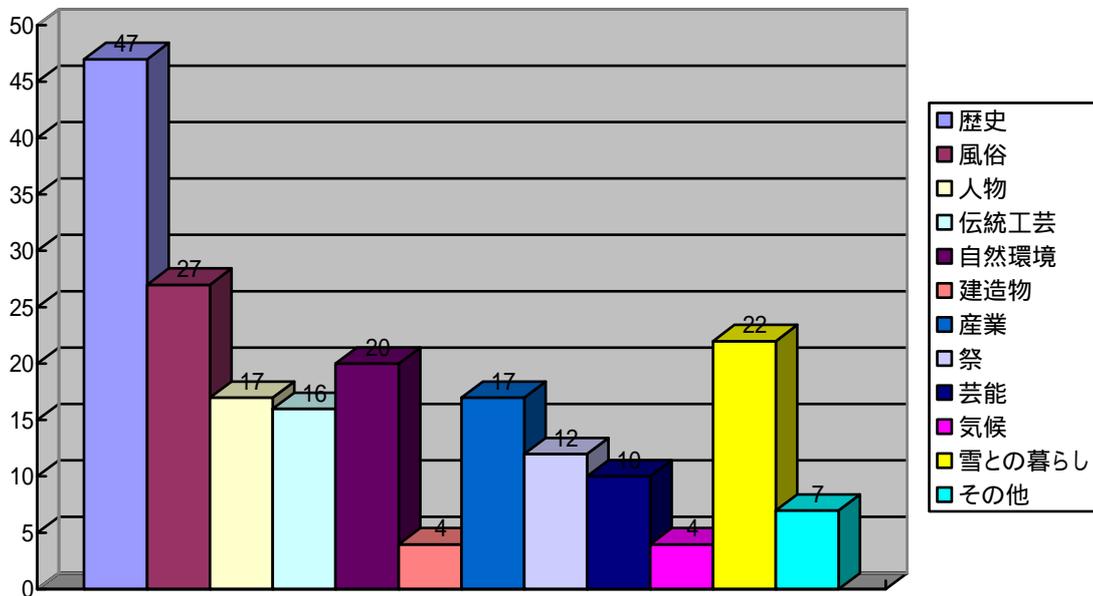
### 6 「地域学」という言葉をご存じでしたか(「地域学とは「自分の住む地域の歴史や文化、産業、などを見つめ直し、地域の魅力や可能性を発掘しようとするもの」です)



7 地域学として「北東北学」を構築することについては、どのように考えますか



8 「北東北学」で取り上げてほしいものは何ですか（3つまで）



その他……8 の設問の項目は、「地域学」を構想するのであれば、研究されて当然の事柄、北東北「学」は、その上位に構築され得ると考えられます。経済、新しい共通資源、これからすばらしい地域を作っていく、強い絆みたいなものも考えて欲しい、コミュニティのあり方～政府（行政）のあり方、北東北地域の魅力と可能性、自然環境・グローバル・ローカルの共存、伝承

## 9 「北東北」について、あなたのご意見をご自由にお書きください

- 今のところ、あまり知名度がなく、栄えてもいないのが残念です
- 「東北学」という言葉を聞けば、青森、岩手、秋田の3県をイメージするが、そうした地方自治体の行政区域を越えたところでの、「北」として同じ文化、産業基盤等をもつ地域全てを含んで「北東北」が形づくられていけば素晴らしいと思った。  
国、地方自治体の垣根が取り払われていこうとする昨今、そうした共通性が最も強い地域を形づくるものとなるのではないかと思う。「北東北」という言葉も、そうした共通性を想起する言葉として定着するようになればと思う。
- 北東北（学）という動機付けが”これから”なのかな…という感じを受けたサミットでした。（アンケートの項目などからも、そのような感じを受けました）。  
これから「北東北」3県連携に向けた動きは益々加速されていくことと思います。知恵や個性など、守るべきものは大切にしながら、どんどん連携を進めて行けばいいなと思います。そのための「地域を知るための」学問としておこる「北東北学」の確立は本当に大切なことですね。北東北学を通して、何が見えてくるのか、とても楽しみです。
- カーペンター氏の視点は大学の再編、学生にとっての環境の視点が主であったと思うが、国際的な視野でとらえた際、北東北の価値について、興味が惹かれるものであり、示唆に富んでいたものとの印象を受けた。  
長谷川氏の報告は、従来からの北東北三県の素材の共通性等についてのものであったが、少し時間的に短かったという印象を受けた。
- 北東北として、全国、世界へ発信する新しいイメージを早く確立して積極的にPRしてください。  
国家公務員、NTT、東北電力など、東北圏内での移動を繰り返す職業の方々には、東北という地域に対するイメージを持っているのではないのでしょうか。
- 北東北三県で協力しあって、本当に外国人や日本国内の人々が立ち寄って楽しむとか、ためになるとか、又来たいと思わせられる何かを作ることができたらいいなと思います。そしたら、もう少し豊かな産業ができるかと思います。就職率は最低で、平均賃金も最低な青森の名を、違う意味で知らせる為にも北東北で何かできたらいいですね。
- 将来に向けて自信を持って出身地を言える地域になって欲しいし、皆、協力しなければと思う。
- 北東北を歴史的に先ず捉えなおして、その位置をしてもらいたい。  
蝦夷エミシからエゾへの変わって来た名称と北東北に於けるアイヌの問題を普通に認識を深めたい。その上で縄文を考えたい。北東北人の中にある中央に対する複雑な意識を、まさに意識化することが重要である。そうしたアイデンティティから自然、文化、伝統など北東北がもつ豊富な資源を活かす。ディスカバー日本につながるのでは。
- これから議論を深めていく必要がある。
- 自然をベースに自給自足の基盤があり、伝統芸能、むかしがあり、医学、教育、情報等などの最先端であるべき項目に注目し取り上げ、独自の地域を構築してほしい。  
都市部との差別化の推進、あきらかに違う地域をつくってほしい。

- 「北東北」という共通性のククリには無理があるのでは。
- 共通性がないことを前提に、緩やかな連携が新たな発展を生む可能性があるかもしれない。
- 北3県がひとつの国として、どのように国の経済を確立（自立できるように）していくかを考える必要がある。そのためには、どのような資源を持っているか、自給自足できるのは何か。輸入しなくてもある程度、自立できる分野をどのように育てていくかを考えるべき。  
地産地消というが、これを更に大掛かりに国の意識を持って自立できる経済体制を確立していく視点がなければ、地域の独自性を維持しながら他地域と競争して打ち勝っていけない。その上で、何を輸出していけるか検討すべき。
- 「地域に暮らす”豊かさ”」が、そこにいると見えない場合が多い。特に3県に限定する（道州制の前提のように）必要もないが、井の中の蛙とならない客観性を持つためにも、少し域を広げて考え、学ぶことに意義があるのでは—と考えています。
- 北東北という言葉は、最近出た新しい言葉ではあるが、何か未知の可能性を含めた新しい東北の発信が望める含みのある言葉のイメージがあります。
- 今日のフォーラムを興味深く聞かせていただきました。ただ、「北東北」という言葉を「〇九州」、「〇北陸」等と変えても通じる様なお話が多かったと感じました。「中央」に対する「地方」というフォーラムでしょうか。
- 他県（北東北）との交流をより活発に。
- 情報発信としての技術的なフォローが弱い。



## 北東北学フォーラム・アンケート

- 性別 男・女 ●お住まい（ ）県（ ）市・町・村  
●年齢 20歳未満・20代・30代・40代・50代・60代・70歳以上  
●職業 学生・会社員・自営業・公務員・団体職員・アルバイト・無職・その他（ ）

1 「北東北」という言葉をご存じでしたか（ここでいう「北東北」とは青森県、岩手県、秋田県の3県を示す言葉です）

知っていた 言葉だけは聞いたことがある 知らなかった

2 北東北についてのあなたのイメージを教えてください（3つまで）

豊かな自然 厳しい自然環境 人柄が温かい 排他的 饒舌 無口 伝統文化   
古臭い 世話好き お節介 首都圏から遠い 牧歌的  
暗い 明るい 貧しい 豊か その他（ ）

3 青森・岩手・秋田3県の共通性があるとすれば、何だと思えますか

自然 気候 歴史 文化 経済基盤 気質 食 ことば 特になし  
その他（ ）

4 あなたの暮らす地域の誇れること・自慢できることを具体的に1つあげてください  
（ ）

例) 民俗芸能などが盛ん

5 これからの北東北に望むことは何ですか（3つまで）

都市化 自然保護 観光振興 文化財保護 福祉充実 交通の利便  
国際化 文化振興 知名度アップ 現状維持 その他（ ）

6 「地域学」という言葉をご存じでしたか（※地域学とは「自分の住む地域の歴史や文化、産業、自然などを見つめ直し、地域の魅力や可能性を発掘しようとするもの」です）

知っていた 言葉だけは聞いたことがある 知らなかった

7 地域学として「北東北学」を構築することについては、どのように考えますか

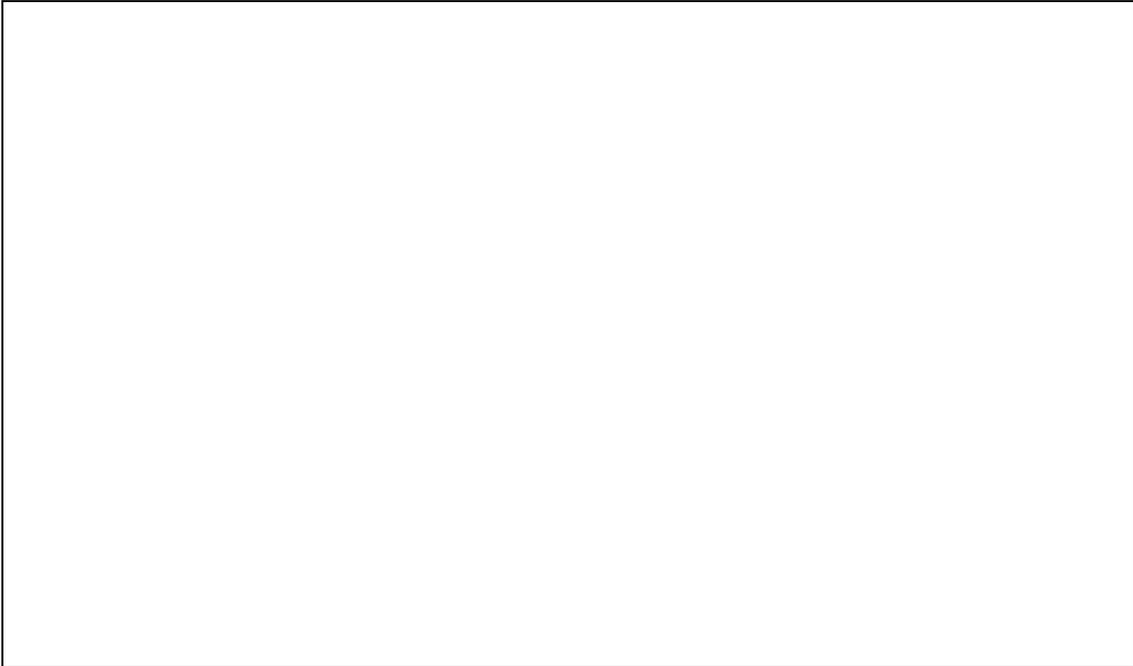
興味がある 興味がない どちらとも言えない

8 「北東北学」で取り上げてほしいものは何ですか（3つまで）

歴史 風俗 人物 伝統工芸 自然環境 建造物 産業 祭 芸能  
気候 雪との暮らし その他（ ）

**裏面もご覧ください**

- 9 「北東北」について、あなたのご意見をご自由にお書きください。



**ご協力ありがとうございました。**

## 資 料

### 『菅江真澄遊覧記』の「北東北」関係記事

#### 1 「北東北」における基層文化の共通性

○「小野のふるさと」『菅江真澄遊覧記 1』118頁【習俗・行事の共通性】

「錢を包んで扇にのせ、さしだして帰ってゆく。また子供がくると、家の主人は、松の葉に一文錢をとおして「この馬はやせてます」など言いながら与える。松の小枝に錢をつなぐことは、出羽、陸奥でひろく行なうとかいうことである。」

○「小野のふるさと」『菅江真澄遊覧記 1』138頁【景観の類似性】

「きりはた山は松岡山のうしろに隠れた。彼方の雪の消えた山は、横手という宿駅へでる道の上にみえる岳である。この峰には塩湯彦の御社を崇め祀っている。そのあたりに、雪か雲かとたどられるのは、阿仁《銅を掘る山である》山であろうか。よもや、陸奥に名高い岩手山ではないであろうなどと、視界に入る山々、岳々を眺望しながら思いつづけた。」

○「けふのせば布」『菅江真澄遊覧記 1』181頁【習俗の共通性】

「やがてここをでて、松の木村（十和田町）というところをくると、石の男根をならべた祠があった。これは、信濃、越後、出羽、とくに陸奥にたいへん多い。」

○「かすむ駒形」『菅江真澄遊覧記 2』3頁【風俗の共通性】

「はいつてくる子供には松の小枝に錢を貫きさして、これを『馬に乗せる』と行って与え、錢が少ないと、これはやせ馬だなどというありさまは、出羽の国と同じであった。」

○「かすむ駒形」『菅江真澄遊覧記 2』19頁【歌謡・芸能の共通性】

「ここでうたう『朝日さす夕日かがやく木の下に漆千盃こがね億置』というのは、この金鶏山をさしていったのだといわれている。だがこの歌はむかしの童謡であろうか、出羽や陸奥に、わずかの違いはあるがところどころにある。」

○「はしわの若葉」『菅江真澄遊覧記 2』46頁【風俗・遊びの共通性】

「(※4月)4日 大ぜいの子供が、この地の方言でいうてんばた(たこ)というものを、糸をひきあい、ひっぱりあって遊んでいた。時ならぬたこあげだと思ったが、男鹿半島(秋田県)では7月13日を始めとし、久保田(秋田市)は12月の末をたこのあげ始めにしている。」

○「はしわの若葉」『菅江真澄遊覧記 2』60頁【風習・行事の共通性】

「(※5月)5日 きょう、軒に蓬<sup>よもぎ</sup>や菖蒲<sup>しょうぶ</sup>をさす風習は、ほかの国とかわりない。陸奥は実方中將の故事があって、5月5日はかならずかつみをふかせ、あやめはけっして葺かないという話をきいていたが、昔と今はちがっているようだ。軒に幡<sup>のぼり</sup>を立てるのは、男の子のある家ではどこでもするならわしであるが、この村では女の子を持った家でも、また子供のない家でも区別なく行ない、富んだ家ではとくに立派にするなど、出羽の方面も同様である。今宵の行事は、しょうぶうちにやや似ていた。」

○「外が浜づたひ」『菅江真澄遊覧記 2』107頁【習俗の普遍化】

「村はずれの祠に男根の形をした石をまつている。このようなものは陸奥<sup>みちのく</sup>にはたいそう多い。」

○「外が浜づたひ」『菅江真澄遊覧記 2』114頁【地名の共通性】

「考えてみるに、陸奥<sup>みちのく</sup>の人、とくにこのあたりでは、空洞<sup>うつつぼ</sup>なものをさしてうとうといい、うつろになった木をうとう木という。南部の山里に行ったとき、乗った馬がどどと踏みとどろかすと、大きくなりひびくところがある。どうしてこうなのかとたずねると、ここはうとう坂なのでこのように鳴るのだとこたえた。ところどころにうとう坂、うとう山という地名をきいた。」

○「牧の朝露」『菅江真澄遊覧記 3』59～60頁【ねぶた、芸能・行事の共通性】

「まだ暮れはてぬころから、子供らが、六、七尺から一丈ばかりの棹の先に、色どった画をかき、七夕祭と記した横形の燈籠をともして、その上部には小笹、薄などがさし束ねてあり、それを手ごとにささげ持って「ねぶたもながれよ、豆の葉もとどまれ、苧がらおがら」とはやし唱えながら、太鼓、笛をならして、にぎやかに声をはりあげて歩く。この唱え言は出羽の国秋田の山里に住む子供らが、おがら(麻苧のから)をめいめいの年の数だけ折って、それを藤豆<sup>とうまめ</sup>という野生の蔓で巻き結んで、七月六日の夜、一晚これを枕として臥し、あくる七日の朝、川にながすことからおこった行事だという。しかしおなじ国ながら久保田(秋田)の町などでは、ただ燈籠をたかくささげてあるだけで、そのようなことはおこなわなかった。これを秋田郡ではねぶりがしというが、ここ(下北郡大畑)ではねぶたながしというようだ。これはあるいはねぶたであろうか、ねむたと書くのかと、人々が言いあらそっている。」

○「おぶちの牧」『菅江真澄遊覧記 3』82頁【アイヌ語地名、北海道との共通性、下北・北海道】

「そこは老部の部落であった。あられが砂をみだすように強く降ってきて、行くさきも遠く、吹雪が蓑を破るように激しい苦屋<sup>とまおや</sup>(粗末な家)に泊まった。この大藪<sup>おおい</sup>(イグサ)の筵<sup>むしろ</sup>を織るのを仕事にしているので、ここをおおいべともいうのであろうと冗談をいうと、主人はなお笑った。この地名は蝦夷がいったのだろうか。むかしこのあたりに、もっぱら住

んでいたのだろう。ここの隣の浦を白糠<sup>しらぬか</sup>というのも、そのように蝦夷たちがいったのであろう。いまもオイへ、シラヌカは蝦夷の島（北海道）にある地名である。筵<sup>むしろ</sup>をうつ老爺は、日が暮れたので檜（ヒノキアスナロ）の皮をくだいて燈心とし、かすべ（干えい）、するめ（干いか）の油を燈火にともした。妻は布を織るいみかをひき（麻苧をよる）、また大藪のむしろを織っていた。」

○「奥のてぶり」『菅江真澄遊覧記 3』97～98 頁【行事・習俗の共通性、交流、下北・北海道】

「十三日 目名（東通村）という近村の優婆塞（山伏）たちが、三年に一度行なわれる獅子舞という神楽をして、白紙の御幣に熊野（目名に熊野神社がある）の御札を高くさし、笛太鼓ではやしたてて、門ごとに巡ってあるくのは、松前の島（北海道）の神主らが毎年行なう獅子舞と同じである。また、松前の三年神楽<sup>かぐら</sup>のさまに似ている。「ありやりやのこじからししがまいった」「ししがまふたり」とうたい、また戯れては「おさんごよれよれ、せんげをまもる」とうたうが、これは、そのむかし新谷千軒<sup>かぐら</sup>とって、赤坂の岡の広い野に豊かに栄えた里があった。そのあらやの小路よりと歌うべきところを、こう言いあやまつたものという。せんげは千軒であろうか。さんごは参宮米《うちまきをこのあたりではおさんごといい、仙台あたりでははなよね、あるいはおはないという》である。」

○「奥のてぶり」『菅江真澄遊覧記 3』99 頁【習俗の共通性、交流、下北・北海道】

「十五日 男の子はきょうを初めとして、菅原道真公の像を家の隅にまつり（天神祭）、また女の子はひな祭をする風習は、松前（北海道）とだいたい似ている。昼ごろ、うえに浴帷子<sup>ゆかたびら</sup>を着て、紅の裾をたかくからげ、はばきをつけ、わらじを履いた田植え姿の女たちが、声をそろえて「えもとさえもがほうたんだ、一ぼん植ゑれば千本になる、かいとのわせのたねとかや、ほいほい」と、鳴子をうちならして去っていった。」

○「津軽の奥」『菅江真澄遊覧記 3』119 頁【地名の共通性、アイヌ語地名、津軽・北海道】

「へびつかという村を経て、ほどなく<sup>きりいし</sup>炭石の浦（根井）の部落にはいった。矢倉崎（根井のすぐ西）というところは、むかし不動明王をまつってあったという。ここにある石のかたちが<sup>きり</sup>炭に似ているのでこの浦の名とした。そのあたりに重なっている岩の下方を人がくぐりぬけることができるので、またの名を<sup>くぐりざか</sup>潜坂（久栗坂）というとのことだが、むかしは蝦夷が住んで、シャルウシといった。その同じ名は夷国（北海道）に今もある《東蝦夷地のかやべのほりにある、ときわという彼方、シユシユベツというところを、こちらではザル石というところを聞いていた。これもシャルウシの夷語をあやまっているのである》。また久栗坂というところの南の山奥に、むかしの往来の道すじが今ものこっている。この地の景色があまりにおもしろいので、宿をここにとることにした。」

○「津軽の奥」『菅江真澄遊覧記 3』144～145 頁【地名の共通性、小野小町の伝承、交流、津軽・雄勝】

「竜山公がまた都に召しかえされなされたとき、小野小町のもっていた十四弦の琴を都に持っていかれたが、それを、そのころの主上がお聞きになって、「それはめでたいことだ」と、おそれおおくも、かきならしなされたそうだと、この人が語っているこれはまたどうしたことだろう、驚いた。わたくしも出羽の国（秋田県）を旅して、雄勝の郡にきて、小野というところ（雄勝町）で、小町が植えたというえびすくすり（ジャクヤク）の園があるのを尋ねたり、小野小町の古跡をのこりなく見あるき、小野家の末である優婆塞（山伏）の家には行って、あれこれ聞いたが、「今はなにひとつ、むかしをしのぶしるしもありますが、わたくしの家に、遠い先祖から持ち伝えている小町姫の琴というのがありましたのを、家にやもめばかりが住んでいた時分に、津軽からきた馱馬の使に宿をかしたところ、この琴をしきりに請うのにまかせて売ってしまってから、いまは津軽の宝となっていると聞き伝えています」と語っていた。そのとおりのことを日記（第一巻〔小野のふるさと〕参照）にしるし、やがて津軽路には行って弘前にでて、このことを聞いている人があるかと、会うひとごとに尋ねたが、知っているとは答えた人はまったくなかった（天明五年、〔外が浜風〕の旅）。

いま、はからずもこの物語を耳にして、めずらしく思い、なおくりかえし、根ほり葉ほり聞いていると、また、「それについてのいわれは知らないが、青山の琵琶もこの国にあると聞いています。なおここに、不思議な物語があります。聞いてください、おはなししましょう。

三十年もむかしであったか、ある鍛冶やがふくふいごのかたわらに、古いかぶとが火桶としてあったのを、進藤某が見てあやしみ、田村某とかに、これは世にもめずらしい器であろうと言った。田村はこれを聞いて、いそいで鍛冶のもとから買いとって、これを進藤に、鳥銃（火矢）でうつつて試みよと行って、うたせてみたが、弾丸はあたらない。これは、ねらいがはずれたのであろう、さあ、こんどはと、思無邪という台にかけてはじいたが、それでも射とおすことができない。これでも射あてられないのはくやしいと、石の盤にのせ、斧をふりあげて砕けるほどうつつと、器は割れないで、わずかに斧の刃のあとがついただけで、盤のほうが、あとかたもなく砕け散ってしまった。おどろいて、どうしたことか、これほど射撃の名人の手でさえ射つことができず、斧の刃もたたないというのは、どのような鍛冶工がつくり、むかし、誰がかぶったかぶとであろうか、どこでこれを得たのかと、あらためて鍛冶やにきくと、出羽の国の何とかという土地の土中から掘りだしたのを、わたくしが代価を払って手にいれたものだという。むかし、金沢の戦いに、是弘公からいただいた薄金のかぶとを、石弓にはじかれて失ったと言いつたが、そのかぶとではなかろうか、武蔵の明珍（甲冑師として有名な家）にみてもらおうと、見せたところ、明珍は手を洗い口をすすぎ、かたちを正して言った。これは獅子王の一族のかぶとのひとつで、神祖のつくられた尊い器であると、百たび千たび、うやうやしく拝し、うすがねのかぶとにまちがいない、価のつかない宝とはこれであると添書してよこしてきた。それが、

あたらずかのかぶととって、ながくこの津軽の宝物となったのです」と語った。」

○「雪のもろ滝」『菅江真澄遊覧記 3』237頁【方言の共通性】

「日が暮れると、火をたいてあたりながら、いちにちじゅう木を伐って山をふみあるいた話をしたり、あるいは夏の川でいわな、やまべなどをとった思い出など、それぞれ話したいことを語りあった。ものを聞くと、「知り申さぬ」と秋田弁でこたえるのは、この山のかなたの出羽の国藤琴（秋田県山本郡藤里村）というところからきている木こりである。何の返事にも「うまやい」と答えるのは、やって来る途中にあった太秋（西目屋村大秋）の山里からきた木こりの頭である《うまやいというのは、ごもつとも、そのとおりですというこたえである》。」

○「雪のもろ滝」『菅江真澄遊覧記 3』237頁【きりたんぼの食事 食事の共通性 津軽・出羽】

「村里では寝につく時刻を告げる鐘をきく時分であろう。「ああ、退屈だ、何かしようか」といって、ふたたび飯をたいた。たんぼやきという餅をつくろうと、木櫃きびに飯へらをつきたてて飯をねり、それを木の長い串にさし、あぶってみそをつけて、「さあ、これをおあがりなさい」と、二尺ばかりあるたんぼやきをさしだされた。わたくしは三、四寸ほど食べてやめたが、案内人も山男たちもそれを四、五尺ほどはたべたであろう。」

○「津軽のおち」『菅江真澄遊覧記 3』246～247頁【風俗の共通性 北海道・津軽・出羽】

「こうして、家にはいったが、空はまだ夜が明けず、たいへん暗いので、ともし火をかかげて、倉稻魂命うかのみたまにだろうか、秋田の風俗とひとしく、ここでもうかの餅を供えている《出羽の国秋田のあたりでは、かがの餅とって、その家にいる男の数にあわせてくつかた（楕円形）のもちをそなえる》（第一巻〔小野のふるさと〕注二参照）。この浦ではこの神を岡おか戎えびすととなえて、とりの子（卵）のかたちをした餅四個を奉り、皿むすびというものを藁わらでつくって、それに干鯛なます、鱈たらをもち、武士の家のことのばら（ごまめ）、商人の家のたはらご（なまこ）などをもちととのえ、秘かにそなえる。明あきのかた（恵方）はかりをひかずに残したしめ縄によって、暦を使わない浦人たちが、何の業をはじめるにもその方角からはじめればよいので、たいそう便宜がよい。米俵に五葉松の枝をさしたのをかめ松と称するのは、福山の島（北海道）の習俗とおなじである《松前では内板うちいたの松といい、かめの松という。この浦ではただかめ松という名がある》。えびすめ（昆布）で幣をつくる習俗もおなじである。しかし、花びらの餅というのは、まことに春めいた名称であった。

○「津軽のつと」『菅江真澄遊覧記 3』274頁【行事・芸能の共通性 津軽・下北】

「（\*平内にて）えぶりすり（〔奥のてぶり〕注七参照）というものが群れになってきた《「えんぶりすりの藤九郎がまいった」といって、南部、仙台などで田うえというおどりをす

るのも、もとは田をかきならすまねごとからはじまった」。かわった立烏帽子に白うさぎ、とが矢のかたちなどを書き、五葉松の小枝をもって舞い、あるいは扇、ゆずる葉を折りかざして舞う。笛つづみではやし、鍬から（くわの柄）というものに鳴子、馬の鳴輪<sup>なりわ</sup>、つかりなどをつないで、これをついて拍子<sup>ひょうし</sup>をとり、うたをうたうと、ほんとうに春がきたような心地がする。これは乞食たちのわざではなく、村々の若人がたわむれに行うのである。」

○「雪の陸奥雪の出羽路」『菅江真澄遊覧記 4』7頁【地名の共通性】

「黒崎も、名を白崎とよびたいように、雪と波のなかに白く見えていた。左方に高い磯山がいくつもつらなっているなかに、ひときわ秀でた山は白髪が岳だという《白神山、白髪の磯の地名は北海道にもある。出羽の男鹿半島にも同じ名があり、紀の国にも同じ地名がある。春や秋ならば、どこも見物したいようなよいところであるが、今ごろは山もとしよりになって、などと馬子らがおかしい話をするので、

こまかへる春やまつらんとしたかきしらかみ山

の雪のをもかけ

津梅川<sup>つばい</sup>の橋をわたると、大間越<sup>おおまごし</sup>の部落である。」

○「雪の陸奥雪の出羽路」『菅江真澄遊覧記 4』8頁【厚織布など衣料の共通性、津軽・能代】

「岩館の浦（山本郡八森町）の部落にはいつて、菊地小三郎の家についた《この浦は、八森、岩館の麻苧<sup>いおさき</sup>剥織<sup>いとおくず</sup>といつて、厚く織った布を出す。津軽根子の浦では麻屑織、能代の浦では木綿糸割織<sup>かなさく</sup>といつて産する》。」

○「雪の陸奥雪の出羽路」『菅江真澄遊覧記 4』10頁【鱒の流通、食生活の共通性】

「漁の最中には、沖に鷗がむらがり、磯には鳥があつまる。そして、人がたくさん出て、捕った魚をはかり桶というもので計って、あちか（ざる）にいれ、それを（仲買人が）争い求め、馬に負わせて関山を越え、陸奥（おもに岩手県）に運ぶ。あるいはここから能代の港や阿仁、比内（北秋田郡・大館市など）に持ち運んで売る。男鹿半島でとれた鱒は土崎の港、久保田（秋田）・仙北・由利・平鹿の各郡に、あるいは酒田（山形県）へ、また最上越えもして売りさばきに行く。漁の真盛りのころは、どこの浦にも魚舎<sup>なや</sup>をびっしりと建てならべて、松前の鮭の網びきのように、あまの村君<sup>むらぎみ</sup>という古い習俗がのこっている。」

○「雪の陸奥雪の出羽路」『菅江真澄遊覧記 4』9頁【漁の技術の共通性 出羽沿岸・北海道】

「六日 暁天の星をいただいて、漁師たちは起きたので、わたしも、ともに起きて顔を洗った。鱒<sup>はたはた</sup>の網曳きをするといつて、たくさん的小舟が漕ぎ出て、荒れ狂う機の大波のなかを、やすやすと乗りまわっている。このような冬の荒波で苦勞する漁師の渡世りは、蝦夷<sup>おっとせい</sup>の臘臍<sup>おつとせい</sup>狩りと同じである。岸边の岩の上では男や女が群がって立ち、「あっちだ、こっ

ちだ」と手を振り、波にからだをぬらしながら叫んで、魚群のいる個所を舟に教えている  
《はたはたという魚は、陸奥にもいるが、とくに出羽の秋田の名産である。佐竹常陸介義重と小田讃岐守入道天庵の争いがいったん和睦をむすんでいたころは、常陸でもこの魚がたいそう多かった。佐竹家が秋田に移封されると、また、はたはたが秋田の海に多くなった。世間の人は、鱒は佐竹家につき従う魚だといっている。》

○「しげき山本」『菅江真澄遊覧記 4』42頁【こぎん、いろいろ衣—衣料の共通性】

「木こりらがめいめい、布、こぎん（仕事着）あるいはいろいろ衣（つぎはぎの着物）をもって垂れ幕になぞらえて獅子頭にとりかけ、これを冠りかざして舞い、笛を吹きながらうたい、飯笥（弁当箱）をつづみのかわりにうちたいて、毎夜戯れあそんだ。」

○「しげき山本」『菅江真澄遊覧記 4』43頁【イタコ 津軽との習俗の共通性】

「山仕事が終わってから、獅子頭をそのまま山に捨てて、みな家に帰ったが、まもなく男たちにもものけがつき、身は焼けるような高熱をだして、口早に、うわごとをいう。「どうしてわたしひとりを山に捨ておいて行ったのか、雨露にぬれてつらいめにあっているぞ」。家族はおどろいて、これはどうしたことかと、いたこ（盲目の巫女）に弓をひいてうらなわせると、同じように語る。これを聞いた親たちはおどろいて山に行き、獅子頭をとってきて、この岩屋におさめ奉ると、若男らのものけもしずまったという。」

○「しげき山本」『菅江真澄遊覧記 4』50頁【コガケ 津軽の地名との類似】

「この日、仁鮎（米代川の南岸、二ツ井町）という村に舟でわたった。なお奥に行くと、子懸（小掛）というところがある。津軽路で聞いたおなじ名があるので、筑波寺のむかし徳一大師の古い話を思い出した。」

○「すすきの出湯」『菅江真澄遊覧記 4』84頁【習俗・行事の共通性 鹿角・津軽】

「八日 夕方、くれのおも（ウイキョウ、葉に芳香のある多年草）と魚のひれとを串にさして、戸窓ふさぐとって、家のすみずみにさしている。この習慣は陸奥にもある（第三卷〔津軽のをち〕注五参照）が、正月の十四日に魚のひれと餅をさしてたて、あるいは五月の田植えが終わった日に、さなぶりだんごというものをたぐしにさして、家のあるかぎりの戸窓にさし立てているのと同じやりかたで、災厄の家に入ることをふせぐものであるが、それぞれ時期を異にしている。」

○「すすきの出湯」『菅江真澄遊覧記 4』93頁【地名の共通性、出羽・陸奥】

「賀左の沢というところにおいていて、いくつかの小川をわたって進んだ。大杉（ここから森吉町）というところに一軒家があって、雨が降ってきたので雨やどりした。軒ちかくみなぎり流れる川を、六郎川という。この奥山にやびつというところがある《やびつとは山川のたぎり流れるところをいうのであろうか。出羽・陸奥にその名がたいへん多い》。」

○「にえのしがらみ」『菅江真澄遊覧記 4』125～126 頁【地名の共通性、出羽・津軽・松前】

「前方には、二重鳥居山、鍋破山《二重鳥居は森吉山の麓、狭股の村にも同じ地名がある。鍋破というところも津軽でも聞いた。松前尻打山にもあった。木こり山賤らが言いだした地名であろう、ところどころにある》などをごく近くに望み、遠方には、雄岳、近い長者森は虎が伏している姿をして、竜が森といどみ争うようなさまにみえた。森吉の岳は、はるかに横たわるように、はっきりとあおがれる。」

○「みかべのよろひ」『菅江真澄遊覧記 4』141 頁【考古遺物の共通性、蝦夷人の居住】

「戸鳥内の村にきた。このあたりはもと蝦夷が住んでいたのであろう、山かげにおかしな（笑内）というところがあるので、それと知られる。粟・稗・きびをつくる山畑を開墾していたとき、人の面のような土器を掘りだしたことがあるということだった。それをみると、陸奥の津軽寒苗（青森市、第三巻〔すみかの山〕参照）の畑から掘り出したものとおなじであった。」

○「かすむ月星」『菅江真澄遊覧記 4』150～151 頁【地名の共通性、津軽・北海道・北秋田沿岸】

「二月二十一日（文化三年、一八〇六）能代（秋田県能代市）を出立して、高い岡にのぼると、海原がうらうらと望まれて、たちわたる霞のなかに陸奥との国境（青森県境）の方面はまだ雪が深く、津軽の白神が岳（西津軽郡岩崎村）が間近く見えた《東蝦夷の国（北海道）にシリベツがあり、津軽の青森の堤川の川辺にも埼川がある。おなじ津軽の十三の港（西津軽郡）に近くたっひの沼（田光沼）があり、三厩の浦（東津軽郡）の西にもたっひの崎（竜飛崎）がある。松前の島（北海道）には白神の磯があるが、また津軽の深浦（西津軽郡）に近い磯山にも白神という地名がある。このように（蝦夷地と）同じ名が多いのは、遠いむかしはこのあたりにももっぱら蝦夷人が住んでいたのであろうと知られる》。」

○「ひなの遊び」『菅江真澄遊覧記 5』47～48 頁【芸能の共通性 陸奥、糠部・津軽・秋田】

「また番楽舞というものがあって、修験者がもっぱら演じている。神官が舞う村もあった。このような舞を陸奥の胆沢・磐井（ともに岩手県）・桃生（宮城県）などでは神楽といい、糠部の郡（青森県東部）では能舞とよび、この秋田では舞曲と、もっぱらいつている。楽ということばはもっとも古いものである。番楽は蛮楽かという人もあるが、十二番の神楽をいうのであろう。」

（中略）

糠部の能舞には「玄番之尉」「稻田刈」「世品舞」などがあり、たいそうおもしろい。津軽郡（青森県西部）のものも、大同小異である。この能舞というのは、俳優、猿楽のむか

しの姿が、遠い僻地に、かたばかり残っていたものであろう。

○「男鹿の鈴風」『菅江真澄遊覧記 5』97頁【白神の地名の共通性】

「<sup>はましおや</sup>浜塩屋、あるいは<sup>はまなか</sup>浜砂ともいうところや、<sup>はまなか</sup>浜中の部落を過ぎて三の女潟（三ノ目潟）の水が潜りである涼しい細流のあるところに、いくつもの鳥居が立って無動尊を祀っている。名をしら神という《紀伊の国の白神の磯の名をはじめとして、しら神という名は陸奥の松前の白神が崎、津軽の深浦の近くにも白神が岳などがある。しら神とは白鳥をさしていい、日本式尊を祀り、また雷神をも祀る。また白山を祀って<sup>くくりひめ いわ</sup>菊理姫を齋っている。また、繭の神をもしら神と、いう。白神という地名はたいそう多い》。」

○「男鹿の島風」『菅江真澄遊覧記 5』108～109頁【言語・習俗の共通性 男鹿・陸奥】

「また、びきやと呼ぶと、十あまりの女の童や、二十あまりの男も寄って来た。これは名を呼ばずに、<sup>あに おじ</sup>兄・弟などとよぶ出羽・陸奥のならわしと同じさまからである。陸奥の田が名部（青森県むつ市）あたりで、<sup>うぶこ</sup>産子を五十日子（いがこ）などというが、それを、成長したのちまで、にがと呼ばれる女の子もあった。この島（男鹿）にかぎらず、<sup>うぶこ</sup>産子を<sup>びき</sup>墓になぞらえることから、びきという呼称がおこったのである。

○「軒の山吹」『菅江真澄遊覧記 5』132頁【風俗の共通性】

「初田植えの風俗は、どこでも忌みごとが多くて、正月から齋戒して行なわれる。人びとの生命の糧である五穀の長であるおきつみとし（稲の誕生）を祝うのはおなじであるから、もっともなことである。<sup>ほお</sup>朴のひろい葉に食物を盛るさまは、津軽路（青森県）とおなじであった。」

○「軒の山吹」『菅江真澄遊覧記 5』140頁【行事の共通性—歯固め】

「六月一日 今日<sup>ひむろ</sup>は氷室のためしになぞらえて、氷餅<sup>はがた</sup>を食べて歯固めの祝を行うのが出羽・陸奥のならわしである。」

○「月のおろちね」『菅江真澄遊覧記 5』166頁【習俗・信仰の共通性 岩手・青森】

「ざく沢という山の中に大きな<sup>かつら</sup>桂の木があり、この大木に、もぎ木の枝たくさん打ち掛けである。これを「山の神のたむけ」という。これは陸奥山（岩手・青森県など）にもところどころにある習俗で、<sup>けそう</sup>懸想した人を祈念してこのように投げかけて占う。それを<sup>かんかけ</sup>鍵掛とよんでいるものであろう。」

## 2 「北東北」の伝承

○「秋田のかりね」『菅江真澄遊覧記 1』93頁【伝承の交流、陸奥→出羽】

「三十日潮越をたった。大潮越の村をでて飛というところに着く。むかし、陸奥の塩釜がひとつとんできたとして、いまそれを神と崇めて、村もとびと名づけていた。その沖のとび島が波のかなたにはるばると見はるかした。金浦と山う磯家をこえて、芹田の川は綱舟で渡り、あまはぎという川には仮橋がかかっていた。

○「小野のふるさと」『菅江真澄遊覧記 1』131頁【伝承の交流・小野小町伝承、津軽→出羽】

「むかし、津軽の守の御使いが、一夜、わたくしの家に泊まって、『あの梁にかかっているのは何か』と尋ねた。『何であるか知らないが、ただ昔からこのように紙に包み、八重縄でゆわえてある』と答えると、『秘密なものであってもけっして人には語らない。中を見せてくれ』としきりに頼むので、鎌できり落としてひらいてみると、たいそう古い木ぎれのような琴であった。これは小野の家の古い調度であろう。また小町姫のもてあそんだものであろうかと思われ、津軽の人は『この琴をなんとかゆずってくれ』と、いくらかの黄金をだして買いとっていったといい伝えております。熊野神社がここにあるのは良実が建てられ、この国では見かけない瓦ぶきで、大きな建物だと評判であったが、今はすっかり衰えて小さい社になってしまいました。このあたりを耕すとわれた瓦がたくさん鍬にあたります。昔からみれば、道なども場所がかわったのでしょう。むかし、人家があったのは、向こうの木々がむら立っているあたりです。」

○「外が浜風」『菅江真澄遊覧記 1』154頁【伝承の交流、出羽→津軽】

「神明の御社のある手前に立っているのを<sup>まといわ</sup>的岩という。『むかし、出羽の国の男鹿の島から神が射られた矢がこの石にあたったというので、この村を<sup>まとがみ</sup>的神と名づけたのである』と、通りがかりの人が語った。」

○「けふのせば布」『菅江真澄遊覧記 1』190頁【山椒大夫伝承、伝承の交流、岩木山→岩手山】

「そのむかし、岩木山に安寿姫をまつり、この岳には津志王丸を祀っている。また岩木山には、ずし王の霊をまつり、この岩手山に安寿姫の霊を崇めまつるので、安寿山というべきところを誤っているのだなどと、後の世の人々が様々にいうので迷ってしまった。真実はどうなのであろうか、知っている人に尋ねたい。」

○「はしわの若葉」『菅江真澄遊覧記 2』56頁【安藤氏の伝承】

「安日の社は、神武天皇の軍勢にそむいた<sup>ながすねひこ</sup>長髓彦の兄であった安日が、その御代に津軽の<sup>とさの</sup>十三湊に流された。その子孫に阿倍頼時が出て、貞任は衣が<sup>たて</sup>柵に住んだ。この梅森山は靈地であって、自分の<sup>たて</sup>館も近いので、祖先の安日を神とまつたものであろうか。神星の社は何かわからない。また、貞任の子高星が二歳のとき、乳母がふところに抱いて戦乱を避け、津軽の藤崎にかくれ住んだ。高星に子があり、月星という。その塚が川岸にあったが

崩れて失せ、水底に棺の落ちたのが井桁のように見えたので、そこを井戸淵といったが、今は名はかりが残っている。また河越某の畠の地名に、高星殿、月星殿と、近いころまでいったという。」

○「岩手の山」『菅江真澄遊覧記 2』90頁【山椒大夫の伝承、伝承の交流、岩木山←→岩手山】

「人々の話では、岩城判官の公達、津志王丸<sup>ずしおう</sup>の神霊をこの山（※岩手山）にまつり、津軽路にある岩木山の峰には、安寿姫の霊を安珠姫<sup>やすたま</sup>とまつり、岩木山大権現とあがめ奉っている。また、この岩鷲山の頂上の霧が岳というところには、いまでも鬼がすんでいるとか、あやしいものを、むかし埋めたところでもあるという。」

○「外が浜づたひ」『菅江真澄遊覧記 2』118頁【能因法師の伝承】

「村のなかには小川がふたつながれていた。そのひとつについて、能因法師が『しほ風こしてみちのくの』と、もっぱらここで詠んだ歌であると言いつたが、仙台はさらのこと、南部路でいうのさえ疑わしいと、浦人は語っているがどうであろうか。」

○「津軽の奥」『菅江真澄遊覧記 3』144～145頁【小野小町の伝承、交流、地名の共通性 津軽←→雄勝】

「竜山公がまた都に召しかえされなされたとき、小野小町のもっていた十四弦の琴を都に持っていかれたが、それを、そのころの主上がお聞きになって、「それはめでたいことだ」と、おそれおおくも、かきならしなされたそうだと、この人が語っているこれはまたどうしたことだろう、驚いた。わたくしも出羽の国（秋田県）を旅して、雄勝の郡にきて、小野というところ（雄勝町）で、小町が植えたというえびすくすり（ジャクヤク）の園があるのを尋ねたり、小野小町の古跡をのこりなく見あるき、小野家の末である優婆塞（山伏）の家には行って、あれこれ聞いたが、「今はなにひとつ、むかしをしのぶしるしもありますが、わたくしのお家に、遠い先祖から持ち伝えている小町姫の琴というのがありましたのを、家にやもめばかりが住んでいた時分に、津軽からきた駄馬の使に宿をかしたところ、この琴をしきりに請うのにまかせて売ってしまってから、いまは津軽の宝となると聞き伝えています」と語っていた。そのとおりのことを日記（第一巻〔小野のふるさと〕参照）にしるし、やがて津軽路には行って弘前にでて、このことを聞いている人があるかと、会うひとごとに尋ねたが、知っているとは答えた人はまったくなかった（天明五年、〔外が浜風〕の旅）。

いま、はからずもこの物語を耳にして、めずらしく思い、なおくりかえし、根ほり葉ほり聞いていると、また、「それについてのいわれは知らないが、青山の琵琶<sup>せいざん</sup>もこの国にあると聞いています。なおここに、不思議な物語があります。聞いてください、おはなししましょう。

三十年もむかしであったか、ある鍛冶やがふくふいごのかたわらに、古いかぶとが火桶

としてあったのを、進藤某が見てあやしみ、田村某とかに、これは世にもめずらしい器であろうと言った。田村はこれを聞いて、いそいで鍛冶のもとから買いとって、これを進藤に、鳥銃（火矢）でうつて試みよと行って、うたせてみたが、弾丸はあたらない。これは、ねらいがはずれたのであろう、さあ、こんどはと、思無邪という台にかけてはじいたが、それでも射とおすことができない。これでも射あてられないのはくやしいと、石の盤にのせ、斧をふりあげて砕けるほどうつと、器は割れないで、わずかに斧の刃のあとがついただけで、盤のほうか、あとかたもなく砕け散ってしまった。おどろいて、どうしたことか、これほど射撃の名人の手でさえ射つことができず、斧の刃もたたないというのは、どのような鍛冶工がつくり、むかし、誰がかぶったかぶとであろうか、どこでこれを得たのかと、あらためて鍛冶やにきくと、出羽の国の何とかという土地の土中から掘り出したのを、わたくしが代価を払って手にいれたものだという。むかし、<sup>かねざわ</sup>金沢の戦いに、是弘公からいただいた薄金のかぶとを、石弓にはじかれて失ったと言いつたが、そのかぶとではなかろうか、武蔵の<sup>みょうちん</sup>明珍（甲冑師として有名な家）にみてもらおうと、見せたところ、明珍は手を洗い口をすすぎ、かたちを正して言った。これは獅子王の一族のかぶとのひとつで、神祖のつくられた尊い器であると、百たび千たび、うやうやしく拝し、うすがねのかぶとにまちがいない、価のつかない宝とはこれであると添書してよこしてきた。それが、あたらずかのかぶとと行って、ながくこの津軽の宝物となったのです」と語った。

○「外浜奇勝」『菅江真澄遊覧記 3』194頁【伝承の伝播、蝦夷人の居住 津軽←→北海道】

「喜良市についた。村近く<sup>かのこ</sup>鹿子山という山があり、そこに楊梅のような形で黄金の光をもった石がある。人の採ったものを見ると、それは蜜栗子というものであろうか。この山に、むかし<sup>きらいち</sup>吉良以知という蝦夷人が住んでいて、峰にも尾根にも<sup>かのこ</sup>加能古という、この上なく立派な大きな石があったのであるが、それを持って島渡り（北海道にいく）してしまった。この蝦夷が住んでいた山を<sup>かのこ</sup>きらいちと行って、大倉が岳と鹿子山とのあいだに、高くはないが、いまもある。その<sup>かのこ</sup>鹿子石があったころは、この山川も瀬がひろく、鮭鱒などものぼってきたが、その石をとり去った後は、魚もさらにこなくなってしまった。いっぽう、鹿子石をうち砕いて松前の島山のところどころに投げすてたので、その島（北海道）にはいまも、さけ、ますがおおいのだという昔話を人ごとに語っている。また<sup>かのこ</sup>加能古は草の名（カノコソウ）であるとか、かのこ石もまれにはいまも拾うことがあるなどといわれている。こうして、岡田某という村長のもとに宿をかりた。」

○「外浜奇勝」『菅江真澄遊覧記 3』199～200頁【伝承の共通性 津軽・田沢湖】

「さねうち沼といい、またの名を<sup>はくたいこ</sup>白太鼓が沼とも雄沼（大沼）ともいう湖水のように大きな沼があった。それは、<sup>はくたいこ</sup>白体子という女が身を投げたところからつけられた名である。その女は容貌人柄がよかったと伝え聞いて、田屋の弘誓という男が、すでにこの世にない白体子を恋い慕って、自分もいっしょに身を沈めてしまいたいものだといつて、亡くなった

という沼のいわれは、秋田路にある田沢の淵（田沢湖）とおなじようである。」

○「外浜奇勝」『菅江真澄遊覧記 3』201～202頁【安藤氏の伝承、阿倍比羅夫の伝承】

「そもそもこの相内は、そのむかし、安倍比羅夫が蝦夷らの反乱を討とうとしてむかわれたが、戦果のあがらないでいたとき、安東<sup>やすはる</sup>という者が比羅夫にまみえ、申し上げて、「わが遠い先祖は長髓彦<sup>なかすねひこ</sup>の兄で、浜安東浦を領していた安日<sup>やすひ</sup>の遠い末の子孫です。仰ぎ願わくば、遠い祖先の罪をいまお許し下さるならば、わが命を君にささげて蝦夷をうち平らげましょう」という。比羅夫はこのことを帝に奏し奉り、安東<sup>やすはる</sup>を先にたてて ついに蝦夷にうち勝ち、その勲功をたたえて安倍<sup>あべ</sup>氏の姓を与え かれと縁をむすび、親しく交わって比羅夫は都に帰られた。そこで安東の家を安倍と名のり、それからほかに時代がさがって、また蝦夷が戦をおこしたとき、安東の子孫致東<sup>ときはる</sup>という者がこれを討ち平らげ、その功により将軍になされた。一条院の御代（一〇〇〇年ごろ）に蝦夷がまた襲来したとき、致東の子孫国東<sup>くにはる</sup>が島わたりして松前にゆき、かみみち（上道）、しもみち（下道）の二道からたくさん軍勢をひきいて戦い、勝って、首謀者四人を捕虜にして帰ってきた。国東の子頼良<sup>すずよし</sup>、その子安東太郎頼良は名を頼時とあらためて、自ら安倍将軍と名のり、陸奥、出羽、二国の司（押領使）となり、男八人女二人の十人の子をもっていたという。

遠いむかし、この十三のあたりには家が多く栄えていたのであろう。子供のもてあそぶ『十三往来』という書物に、近い世まで、都にたぐえるばかり、十三の里は豊かで賑わっていたと書いてある。安東もこのあたりに住んで、その一族もたいそう多く、安倍氏の領地もひろかったので、このあたりをさして安日氏<sup>あつびし</sup>ともつばらいうところを、今の世には相内と人がよんでいるのであろう。松前の島の西磯、東磯<sup>かみくに しもくに</sup>に上国、下国という名があるのは、この上道、下道<sup>かみみち しもみち</sup>であろうか。南部路に安東という港がある。」

○「雪の陸奥雪の出羽路」『菅江真澄遊覧記 4』9頁【交流と伝承 陸奥の武士→津軽猿賀村→出羽→岩崎】

「この浦の須藤有衛門という人の家に、親鸞聖人の御筆で南無阿弥陀仏、蓮如上人の描かれた画阿弥陀仏、実如上人の御筆という二通一卷の御書を伝え持っている。先祖の須藤刑部左衛門は、その子須藤兵部とともに陸奥の武士であったが、南部の乱を避けて、津軽の猿賀村（南津軽郡尾上町）に逃れ、それからこの出羽まできて、このような磯山のかげに田畠を開墾して住んだ。それで、そこを子孫の有衛門にちなんで有衛門崎という。近年になって、このようにその一族が岩館にきて住んでいるということである。」

○「男鹿の秋風」『菅江真澄遊覧記 5』33頁【義経島渡り伝承】

「この浦はたいそう古いところで、門馬莊兵衛という者の家に遠い祖先から伝えられたという、九郎判官義経が蝦夷の島（北海道）渡りをなされたとき、道中の食糧が乏しくなって借用していった粟の券というものを持っているという。それは義経が牛若丸といって鞍馬山<sup>くらま</sup>に学んでいたころ、おなじ年ごろの学童で鈴木宗因というものがあつた。宗因が故

郷である出羽の飽田<sup>あきた</sup>の、この芦崎に帰って住んでいたのを、義経はそのよしみをもとめて武蔵坊を伴い、訪ねてきて泊まり、日を過ごされたといい伝えている。その宗因の古塚が、ここの太郎作という漁師の家の前庭にある。」

### 3 「北東北」のアイヌ語地名、蝦夷人

#### ○「外が浜づたひ」『菅江真澄遊覧記 2』110頁【蝦夷人居住の伝承】

「ふりあおぐと、木々のなかにあきつが窟<sup>いわや</sup>とって、むかし蝦夷人がこもって、行きかう船をおそって財宝をうばったという岩窟がある。まことけわしいところで、容易に人のゆくことのできそうもない窟である。『おくの海夷<sup>えびす</sup>がいはやのけふりさへおもへはなひく風や吹くらん』などと和歌集にあるのは、蝦夷はこんなところに多く住んだのを、むかしの人もこのような歌に詠んだのである。」

#### ○「外が浜づたひ」『菅江真澄遊覧記 2』111頁【義経伝承、蝦夷人居住の伝承】

「峠を越えると男根の形をした大石が立っていた。ここを浦島森という、大浦、小浦、冠山とって景色のよい磯山がある。野内の関のこちらの坂のうえ高く、神社があるので詣でると、神主が社前をきよめながら語った。『これはむかし、山城の貴船<sup>きふね</sup>の神をうつし奉ったものです。また弁財天をまつる小さい社があり、これが鬼の娘十郎姫の霊を祀ったともいいます。また義経の女房であったという旭の前という方が、義経をしきりに慕って後を追ひ、松前にわたる船のなかで重い病いにかかり亡くなったのを、ここで火葬にしたともいいます。その骨は山奥の玉清水という村に埋め、そこに塚をきずいてしを立て、その寺を朝日山安養寺常福院といたしました」また神社があり、神明をあがめ奉っている。この神主とともに坂をおりた。「その兄の娘というのはどこの鬼ですか」と尋ねると、「蝦夷などの勇猛なものをいったのでしょ。旭の前も、どこの女人ともわかっていません」と答えた。「こちらへ」とさそわれて道を行くと、奇妙なかつこうにさし出た岩があったこれを竜<sup>たつ</sup>の口<sup>くち</sup>と名付けている。その岩の外側には垣を波の中までもめぐらせて囲ってあった。

磯山のかげにけさもりというのがあり、むかし修業者がここにけさをかけたという由來が語られている。東北方に、じろさくという蝦夷人が住んだ家のあとがあった。たたみ石、わしり岬、また祖母石というのは、その立石のまたの名である。じろさくの妻が老いてから、わが子が遠い島にわたってしまったのを恋<sup>わ</sup>い侘びて、毎日、山に立っていたが、それが石に化してしまった姿であると、望夫石とおなじような物語がここにもあった。また、水江の浦島が子（浦島太郎）の故事をここであったこととしてつたえている昔話もあった。網屋場<sup>あじやば</sup>というところに義経が車にのってまっすぐに磯にくだられたという跡がある。義経が船をつながせた島をはなくり岩とよんで、今もある。山の名もそう呼んでいる。

#### ○「外が浜づたひ」『菅江真澄遊覧記 2』112頁【アイヌ語地名】

「主人の言うには、『野内とは、もと蝦夷のことばで、まことは鷲の尾の港という意です。

むかし、ここに島渡りする（本州から北海道に行く）鷺が尾羽を落としたこともありまし  
た』と語った。

○「外が浜づたひ」『菅江真澄遊覧記 2』116頁【アイヌの風俗、アツシ】

「瀬戸子<sup>せとこ</sup>などの浜を来ると、例の道づくり（巡見使を迎えるため）で、木の皮の糸で織つたあつしというアイヌの刺繍した着物を着たり、あるいは、この浦の娘らが織ったはなだ（うすい藍色）の麻布に、背中にあたる部分だけをふとい白糸であやにぬいとった衣服（コギンという）を着た男女が大ぜい入りまじり、手ごとになべら（金へら）、てんすき（手鋤）、たち、かつさび、などを持って群がっていた。」

○「外が浜づたひ」『菅江真澄遊覧記 2』123頁【蝦夷人の子孫】

「旧宇鉄川<sup>もとてつがわ</sup>をわたって、上宇鉄の浦という部落に午前 10 時ごろついた。この浦人はもと蝦夷の子孫であるが、言語などはいっこうにほかの浦と違わない。近いむかしとかに、ひげをそり、頭もそって、女もいれずみをせず、和人とまったく区別がつかないようになった。この浦の長、四郎三郎という人のところに宿をかりた。むかしは浦々に蝦夷が多かったであろう。にぎえぞ（和人の生活によく入り交わってしまったアイヌ）、あらえぞ（和人に従わないアイヌ）などと、もっぱらいつている。なお、むかした母衣<sup>ほろつき</sup>月のへキリバの子孫を又右衛門といい、松が崎のカフタイブの末を今は次郎兵衛といい、藤島のムサカイブはいまその子孫が清八であり、宇鉄のクマタカイブの子孫がこの宿の主人の四郎三郎である。この 4 人の保長<sup>おとな</sup>として浜名浦（今別町）の七郎右衛門をいまもおやかたといい、年の暮れなどにはトマフという海狗<sup>と</sup>に似た海のけものを小島のあたりでとって、その浜名浦の親方のもとに土地の産物としておくれたという。」

○「牧の冬枯」『菅江真澄遊覧記 3』11～12頁【蝦夷人の居住】

「樺山《かばの木のたいそう多かつたところからいう名だろう。皮をとり、たいまつとする木である》村を過ぎて、山ふたつを越えた下の方を鶴沢という。むかしは、この沢のへり近くまで潮が満ちてきたところであつたが、今は遠く退いて、鰻<sup>あわび</sup>つり沢の名だけが残っていると、馬をひく男が言った。女館という村があり、むかし蝦夷の女たちがたむろしたという物語がある。」

○「おぶちの牧」『菅江真澄遊覧記 3』82頁【アイヌ語地名、北海道との共通性】

「そこは老部の部落であつた。あられが砂をみだすように強く降ってきて、行くさきも遠く、吹雪が蓑を破るように激しい苦屋<sup>とまおや</sup>（粗末な家）に泊まった。この大藺<sup>おおい</sup>（イグサ）の筵<sup>むしろ</sup>を織るのを仕事にしているので、ここをおおいべともいうのであろうと冗談をいうと、主人はなお笑った。この地名は蝦夷がいったのだろうか。むかしこのあたりに、もっぱら住んでいたのだろうか。ここの隣の浦を白糠<sup>しらぬか</sup>というのも、そのように蝦夷たちがいったのであろう。いまもオイへ、シラヌカは蝦夷の島（北海道）にある地名である。筵<sup>むしろ</sup>をうつ老爺は、

日が暮れたので檜（ヒノキアスナロ）の皮をくだいて燈心とし、かすべ（干えい）、するめ（干いか）の油を燈火にともした。妻は布を織るいみかをひき（麻苧をよる）、また大藪のむしろを織っていた。」

○「津軽の奥」『菅江真澄遊覧記 3』119頁【アイヌ語地名、地名の共通性、津軽・北海道】

「へびつかという村を経て、ほどなく<sup>ぎるいし</sup>根井の浦（根井）の部落にはいった。矢倉崎（根井のすぐ西）というところは、むかし不動明王をまつてあったという。ここにある石のかたちが<sup>ぎる</sup>根に似ているのでこの浦の名とした。そのあたりに重なっている岩の下方を人がくぐりぬけることができるので、またの名を<sup>くぐりざか</sup>潜坂（久栗坂）というとのことだが、むかしは蝦夷が住んで、シャルウシといった。その同じ名は夷国（北海道）に今もある《東蝦夷地のかやべのほりにある、ときわという彼方、シユシユベツというところを、こちらではザル石というと聞いている。これもシャルウシの夷語をあやまっているのである》。また久栗坂というところの南の山奥に、むかしの往来の道すじが今ものこっている。この地の景色があまりにおもしろいので、宿をここにとることにした。

○「外浜奇勝」『菅江真澄遊覧記 3』194頁【蝦夷人の居住、伝承の伝播 津軽←→北海道】

「喜良市についた。村近く<sup>かのこ</sup>鹿子山という山があり、そこに楊梅のような形で黄金の光をもった石がある。人の採ったものを見ると、それは蜜栗子というものであろうか。この山に、むかし<sup>きらいち</sup>吉良以知という蝦夷人が住んでいて、峰にも尾根にも<sup>かのこ</sup>加能古という、この上なく立派な大きな石があったのであるが、それを持って島渡り（北海道にいく）してしまった。この蝦夷が住んでいた山を<sup>かのこいし</sup>きらいちといって、大倉が岳と鹿子山とのあいだに、高くはないが、いまもある。その<sup>かのこいし</sup>鹿子石があったころは、この山川も瀬がひろく、鮭鱒などものぼってきたが、その石をとり去った後は、魚もさらにこなくなってしまった。いっぽう、鹿子石をうち砕いて松前の島山のところどころに投げすてたので、その島（北海道）にはいまも、さけ、ますがおおいのだという昔話を人ごとに語っている。また<sup>かのこ</sup>加能古は草の名（カノコソウ）であるとか、かのこ石もまれにはいまも拾うことがあるなどといわれている。こうして、岡田某という村長のもとに宿をかりた。」

○「雪のもろ滝」『菅江真澄遊覧記 3』233頁【アイヌ語地名—尾太の地名由来】

「輪巻の淵、<sup>りゅうめん</sup>竜面の淵、また<sup>かとり</sup>香取のわたりなどというところを見ながら過ぎ、岸辺の山路をわけて行くと、鈴淵、<sup>とのもりぶち</sup>殿衛淵なども見て、<sup>(唐)</sup>宮守平という山里についた。木戸沢のつづらおりは寒沢山（七二四メートル）のてまえにつづっているのであろう。砂子瀬村にでて、おさばしをわたった。左は湯の沢といって、<sup>おつふ</sup>乙部の岳《越部（おつふ）は尾太とも。また甲田山に連句としていうために乙生、乙部などと、風流を好む人が書いている。この山は出羽にちかくそびえて銅を掘る鉞山である。オツフの地名は、もと蝦夷がいったのであろ

う》から流れでる急な川、右は大川、これを一瀬でわたり、山路、崖、野原をすすんで川原平村につき、米沢長兵衛という人のもとに宿をかりた。」

○「雪の陸奥雪の出羽路」『菅江真澄遊覧記 4』6頁【ナイーアイヌ語地名】

「さぎない川（笹内川）を渡るころ、空がかきくもってきて、あたりいったい暗くなり、笠も衣服もおるほど霰<sup>あられ</sup>がたたきつけて、馬も歩きにくそうである。久田、正道尻<sup>ひさだ しょうどうじり</sup>を経て森山という磯辺の山にでた《さぎない、正道しり。ナイは沢という蝦夷辞<sup>えぞことば</sup>で、シリとは崎という蝦夷辞である。むかしこのあたりに蝦夷が住んでいたことが知られる》。」

○「にえのしがらみ」『菅江真澄遊覧記 4』126頁【アイヌ語地名】

「池内という村に出た《池内という村に出た《池内という地名も蝦夷ことばでヘツチナイということである。津軽の平内浦にもあるが、池内の地名はそちこちにある》。」

○「みかべのよろひ」『菅江真澄遊覧記 4』141頁【蝦夷人の居住、考古遺物の共通性】

「戸鳥内<sup>ととりない</sup>の村にきた。このあたりはもと蝦夷が住んでいたのであろう、山かげにおかしな（笑内）というところがあるので、それと知られる。粟・稗<sup>あわ ひえ</sup>・きびをつくる山畑を開墾していたとき、人の面のような土器を掘りだしたことがあるということだった。それをみると、陸奥の津軽寒苗（青森市、第三巻〔すみかの山〕参照）の畑から掘り出したものとおなじであった。」

○「男鹿の島風」『菅江真澄遊覧記 5』103～104頁【アツシ、風俗の共通性 出羽・蝦夷島】

「日が暮れると、蚊の集まるのを避けて、男女とも子供もつれて、みな浜辺の砂の上に、しんぼうという厚織りの衣服や、あるいは、どうざつづれという、いろいろな布をつぎさした厚い衣服をかぶって寝る。蝦夷の島（北海道）の住民が、蚤・蚊<sup>のみ か</sup>をさけて浜に出て、木糸<sup>あつし</sup>の衣服をかぶり、波の音を枕もとに聞きながら寝て、夜を明かすという風習に似ている。どうも、蚤蚊が多くて眠られないという老人の声が枕上に聞こえたが、これなら涼しい浜辺がよかろうと思われて、窓からもれる月を眺めながら、眠るともなく一夜をあかした。」

○「ひなの遊び」『菅江真澄遊覧記 5』42頁【アイヌ語地名、地名の共通性 津軽・秋田】

「七月一日（文化六年、一八〇九）明けてゆく空もたいそうすずしく、ひろい田の面に風がさわやかに吹きわたっていく《道奥<sup>みちのく</sup>にある寒苗という地名は書紀にみえる。その音にあてていまは山内と書いたと思われるので、そのもとの字をかりておいた。山内は津軽をはじめ、この秋田にも、ところどころに多い地名である（青森市、第三巻一五四ページ参照）。もともとないは沢という蝦夷ことばである。」

○「月のおろちね」『菅江真澄遊覧記 5』184～185頁【アイヌ語地名、共通性】

「糠塚という地名は出羽・陸奥にたいそう多い。もと蝦夷婦の酒造をするところからおこったのであるが、このことは〔えぞのてぶり〕（第二巻参照）にくわしく記した。」

#### 4 「北東北」の交流

○「奥のてぶり」『菅江真澄遊覧記 3』97～98頁【行事・習俗の共通性、交流、下北←→北海道】

「十三日 目名（東通村）という近村の優婆塞（山伏）たちが、三年に一度行なわれる獅子舞という神楽をして、白紙の御幣に熊野（目名に熊野神社がある）の御札を高くさし、笛太鼓ではやしたてて、門ごとに巡ってあるくのは、松前の島（北海道）の神主らが毎年行なう獅子舞と同じである。また、松前の三年神楽のさまに似ている。「ありやりゃのこじからししがまいった」「ししがまふたり」とうたい、また戯れては「おさんごよれよれ、せんげをまもる」とうたうが、これは、そのむかし新谷千軒とって、赤坂の岡の広い野に豊かに栄えた里があった。そのあらやの小路よりと歌うべきところを、こう言いあやまったものという。せんげは千軒であろうか。さんごは参宮米《うちまきをこのあたりではおさんぐといい、仙台あたりでははなよね、あるいはおはないという》である。」

○「奥のてぶり」『菅江真澄遊覧記 3』99頁【習俗の共通性、交流、下北←→北海道】

「十五日 男の子はきょうを初めとして、菅原道真公の像を家の隅にまつり（天神祭）、また女の子はひな祭をする風習は、松前（北海道）とだいたい似ている。昼ごろ、うえに浴帷子ゆかたびらを着て、紅の裾をたかくからげ、はばきをつけ、わらじを履いた田植え姿の女たちが、声をそろえて「えもとさえもがほうたんだ、一ぼん植ぬれば千本になる、かいとのわせのたねとかや、ほいほい」と、鳴子をうちならして去っていった。」

○「津軽の奥」『菅江真澄遊覧記 3』144～145頁【小野小町の伝承、交流、地名の共通性 津軽←→雄勝】

「竜山公がまた都に召しかえされなされたとき、小野小町のもっていた十四弦の琴を都に持っていかれたが、それを、そのころの主上がお聞きになって、「それはめでたいことだ」と、おそれおおくも、かきならしなされたそうだと、ここの人が語っているこれはまたどうしたことだろう、驚いた。わたくしも出羽の国（秋田県）を旅して、雄勝の郡にきて、小野というところ（雄勝町）で、小町が植えたというえびすくすり（ジャクヤク）の園があるのを尋ねたり、小野小町おののこまちの古跡をのこりなく見あるき、小野家の末である優婆塞（山伏）の家には行って、あれこれ聞いたが、「今はなにひとつ、むかしをしのぶるしもありませんが、わたくしの家に、遠い先祖から持ち伝えている小町姫の琴というのがありましたのを、家にやもめばかりが住んでいた時分に、津軽からきた駄馬の使に宿をかしたところ、この琴をしきりに請うのにまかせて売ってしまってから、いまは津軽の宝となってい

ると聞き伝えています」と語っていた。そのとおりのことを日記（第一巻〔小野のふるさと〕参照）にしるし、やがて津軽路にはいつて弘前にでて、このことを聞いている人があるかと、会うひとごとに尋ねたが、知っていると言った人はまったくなかった（天明五年、〔外が浜風〕の旅）。

いま、はからずもこの物語を耳にして、めずらしく思い、なおくりかえし、根ほり葉ほり聞いていると、また、「それについてのいわれは知らないが、青山の琵琶もこの国にあると聞いています。なおここに、不思議な物語があります。聞いてください、おはなししましょう。

三十年もむかしであったか、ある鍛冶やがふくふいごのかたわらに、古いかぶとが火桶としてあったのを、進藤某が見てあやしみ、田村某とかに、これは世にもめずらしい器であろうと言った。田村はこれを聞いて、いそいで鍛冶のもとから買いとって、これを進藤に、鳥銃（火矢）でうつつて試みよと行って、うたせてみたが、弾丸はあたらない。これは、ねらいがはずれたのであろう、さあ、こんどはと、思無邪という台にかけてはじいたが、それでも射とおすことができない。これでも射あてられないのはくやしいと、石の盤にのせ、斧をふりあげて砕けるほどうつつと、器は割れないで、わずかに斧の刃のあとがついただけで、盤のほうが、あとかたもなく砕け散ってしまった。おどろいて、どうしたことか、これほど射撃の名人の手でさえ射つことができず、斧の刃もたたないというのは、どのような鍛冶工がつくり、むかし、誰がかぶったかぶとであろうか、どこでこれを得たのかと、あらためて鍛冶やにきくと、出羽の国の何とかという土地の土中から掘りだしたのを、わたくしが代価を払って手にいれたものだという。むかし、金沢の戦いに、是弘公からいただいた薄金のかぶとを、石弓にはじかれて失ったと言いつたが、そのかぶとではなかろうか、武蔵の明珍（甲冑師として有名な家）にみてもらおうと、見せたところ、明珍は手を洗い口をすすぎ、かたちを正して言った。これは獅子王の一族のかぶとのひとつで、神祖のつくられた尊い器であると、百たび千たび、うやうやしく拝し、うすがねのかぶとにまちがいない、価のつかない宝とはこれであると添書してよこしてきた。それが、あたらずかのかぶとと行って、ながくこの津軽の宝物となったのです」と語った。

○「雪の陸奥雪の出羽路」『菅江真澄遊覧記 4』9頁【交流と伝承 陸奥の武士→津軽猿賀村→出羽→岩崎】

「この浦の須藤有衛門という人の家に、親鸞聖人の御筆で南無阿弥陀仏、蓮如上人の描かれた画阿弥陀仏、実如上人の御筆という二通一巻の御書を伝え持っている。先祖の須藤刑部左衛門は、その子須藤兵部とともに陸奥の武士であったが、南部の乱を避けて、津軽の猿賀村（南津軽郡尾上町）に逃れ、それからこの出羽まで来て、このような磯山のかげに田畠を開墾して住んだ。それで、そこを子孫の有衛門にちなんで有衛門崎という。近年になって、このようにその一族が岩館にきて住んでいるということである。」

○「しげき山本」『菅江真澄遊覧記 4』49頁【人の交流、北秋田←→津軽、鯨ヶ沢出身の

## 老女、陸奥なまり】

「なかむかしのころ、この平山（太良）では鉱石が湧くようにいくらでも掘られ、鉛がたくさんふき出して、栄えた鉱山だなどと語りながら、火を焚き、酒をあたため、わりご（弁当箱）をひらいて中食をとった。ほろ酔い気分でおわけ入ると、水無<sup>みずなし</sup>という五、六軒ばかりの家が大池の岸にある部落についた。桜が咲き、桂の木が芽ぶき、しでこぶしの花もおもしろく、水の上に影をおとしている。広い水面には木の根の朽ちのこっているものがたいへん多く、ちょうど群がる鴨が餌をあさっているように見える。それに、つつじが寄り咲き、さまざまの木がびっしりと生いたっていた。これは五十年ほどの近い昔、平之<sup>へいの</sup>というひじょうな力持ちが、それまでちいさな池であったのを、一夜のうちに独力で流れをせき止めひろげたものである。世間に類のない力持ちであったが、あるとき、木を伐ろうとして、山奥にはいり、白石股という水上の大滝に落ち入り、亡くなったのは気の毒なことであったなどと語りあっている酒宴の席に、咳ばらいしながら陸奥（青森県）のなまり声であいさつして、老女がやってきた。としを尋ねると、九十歳とこたえた。酒をすすめると、ほほえんで盃をとり、「ひとつひかへてその影見れば、こがね花やら豊<sup>とよ</sup>にさく」とうたい、盃をほした。この女は津軽郡鯉が沢に生まれた人であるが、まだ二十歳にならないころ、思いがけなく人にとまなわれて、ここに来て、平之の妻となり、この山里にながく住みついたのであるという。」

## ○「すすきの出湯」『菅江真澄遊覧記 4』88頁【人の交流、九戸一揆の残党伝承】

「<sup>まといし</sup>酌石という沢にわけいり、<sup>そでやま</sup>袖山という山里で休息した。御岳という高い山は真白に雪をいただいて、吹き渡る風がたいそう寒い《袖山とか袖の沢などという名が出羽、陸奥にたいへん多い。もと、外ということばをなまめたのであろうという》。

このあたりにすむ<sup>やまがつ</sup>山賤（山仕事をするもの）たちの遠い先祖は、陸奥<sup>く</sup>九戸<sup>の</sup>の乱からのがれてきたものだという語り伝えがある。また、なながしの帝の五の宮のひとりが陸奥のけふの郡（鹿角郡）に流寓なされたころ、おつかえしていた従者の子孫で、安保・涌本（秋本）・奈良・成田などといまもなのっている家で、正月に行なう風習もまた変わっている。」

## ○「かすむ月星」『菅江真澄遊覧記 4』155頁【仏像、信仰の移動・交流】

「荷八田という部落がある。阿弥陀仏の堂に、神社のような鳥居がたっていた。その阿弥陀仏は、いま陸奥津軽の阿弥陀川という浦（青森県東津軽郡蓬田村）にうつされてあるということだった。」

## ○「おらがの滝」『菅江真澄遊覧記 4』172頁【円空仏、仏像、信仰の移動・交流】

「この御仏はわが家の宝として残ったのである」と自分の家のむかしを語った。仏の御姿は、春日などの作ったものとも異なり、近江の円空と（第二巻〔えぞのてぶり〕注一三参頗）とおもわれるが、陸奥の糠部の郡うそり山（下北の恐山）の菩薩、加羅陀山（恐山のうち）の地藏大師（第三巻〔牧の冬枯〕注二〇参照）とおなじである。慈覚大師がまことに刻ま

れたものであろうか。」

○「おらがの滝」『菅江真澄遊覧記 4』186頁【円仁仏、仏像、信仰の移動・交流】

「仏像は円仁の作られたものであったが、この観音菩薩は陸奥にもって行かれて、深浦の間口の観音（第三巻〔外浜奇勝三〕注二五参照）とよばれ、船人たちにことに尊ばれていた。観音の使者の野良猫も、そのあとをしたって、津軽の方（西津軽郡深浦町）へ行ったという。」

## 参考文献など

### 第2章 北東北に共通する基層文化

－縄文時代以来の伝統を引き継ぐ北東北－（編集 富樫 泰時委員）

### 第3章 過去から見た北東北

1 絵図に描かれた北東北（編集 長谷川 成一委員長）

2 『菅江真澄遊覧記』に見る江戸時代の「北東北」（編集 長谷川 成一委員長）

#### 【参考文献】

細井計ほか『岩手県の歴史』（山川出版社 1999年）

長谷川成一ほか『青森県の歴史』（山川出版社 2000年）

塩谷順耳ほか『秋田県の歴史』（山川出版社 2001年）など

3 近現代における北東北（河西 英通アドバイザー）

#### 【参考文献】（筆者はすべて河西英通）

『近代日本の地域思想』（窓社 1996年）

「近代東北の意識」渡辺信夫編『東北の歴史 再発見』（河出書房新社 1997年）

『東北一つくられた異境』（中公新書 2001年）

「近代と東北」『東北学』（第7号 2002年）

「可能性としての津軽」『社会文学』（第19号 2003年）

資料 『菅江真澄遊覧記』の「北東北」関係記事（編集 長谷川 成一委員長）

\*使用した、『菅江真澄遊覧記 1～5』中の作品は、以下の通り

『菅江真澄遊覧記 1』（平凡社 1966年）

○「秋田のかりね」 天明4年（1784）9月～12月 山形庄内・秋田由利の旅

○「小野のふるさと」 天明5年（1785）1月～4月 秋田雄勝の旅

○「外が浜風」 天明5年（1785）8月 津軽西海岸の旅

○「けふのせば布」 天明5年（1785）8月～10月 鹿角・岩手北上の旅

『菅江真澄遊覧記 2』（平凡社 1966年）

○「かすむ駒形」 天明6年（1786）1月～2月 岩手胆沢郡・平泉の旅

○「はしわの若葉」 天明6年（1786）4月～6月 岩手東磐井郡の旅

○「岩手の山」 天明8年（1788）6月～7月 胆沢郡～北郡の旅

○「外が浜づたひ」 天明8年（1788）7月 津軽半島東岸～松前への旅

『菅江真澄遊覧記 3』（平凡社 1967年）

○「牧の冬枯」 寛政4年（1792）10月～12月 下北北通りの旅

○「牧の朝露」 寛政5年（1793）7月～9月 下北大畑・田名部の旅

○「おぶちの牧」 寛政5年（1793）10月～12月 上北郡六ヶ所の旅

○「奥のてぶり」 寛政6年（1794）1月～3月 下北恐山の旅

- 「外浜奇勝」 寛政 8 年 (1796) 6 月～7 月 青森、津軽半島の旅  
同 10 年 (1798) 3 月～7 月 青森・藤崎・弘前・西目屋・  
西海 岸の旅
- 「津軽の奥」 寛政 7 年 (1795) 3 月～11 月 青森・弘前・黒石の旅  
同 8 年 (1796) 1 月～4 月 上北～平内・夏泊半島の旅
- 「雪のもろ滝」 寛政 8 年 (1796) 10 月～11 月 津軽西目屋の旅
- 「津軽のおち」 寛政 9 年 (1797) 1 月～6 月 津軽深浦～藤崎の旅
- 「津軽のつと」 寛政 10 年 (1798) 1 月 津軽小湊・童子の旅

『菅江真澄遊覧記 4』(平凡社 1967 年)

- 「雪の陸奥雪の出羽路」 享和元年 (1801) 11 月～12 月 津軽深浦～秋田海岸  
の旅
- 「しげき山本」 享和 2 年 (1802) 3 月～6 月 秋田山本郡の旅
- 「すすきの出湯」 享和 3 年 (1803) 1 月～5 月 秋田比内大滝・十二所の旅
- 「にえのしがらみ」 享和 3 年 (1803) 6 月 秋田比内仁井田・鷹巣の旅
- 「みかべのよろひ」 文化 2 年 (1805) 7 月～9 月 秋田阿仁・森吉・田代の旅
- 「かすむ月星」 文化 3 年 (1806) 2 月～3 月 秋田能代・湖東の旅
- 「おらがの滝」 文化 4 年 (1807) 3 月～5 月 秋田山本郡～大館の旅

『菅江真澄遊覧記 5』(平凡社 1968 年)

- 「男鹿の秋風」 文化元年 (1804) 8 月～9 月 男鹿半島南岸～能代の旅
- 「ひなの遊び」 文化 6 年 (1809) 7 月～9 月 南秋田郡五城目の旅
- 「男鹿の鈴風」 文化 7 年 (1810) 3 月～5 月 男鹿半島北端～水島の旅
- 「男鹿の島風」 文化 7 年 (1810) 7 月 男鹿半島の島々巡りの旅
- 「軒の山吹」 文化 8 年 (1811) 3 月～6 月 南秋田郡岩瀬・金足の旅
- 「月のおろちね」 文化 9 年 (1812) 7 月～8 月 秋田・太平山の旅

《表紙 (モチーフ) : 大日本国地震之図 石川県 原田正彰蔵》